

福岡縣史蹟名勝天然紀念物調查報告書 第十三輯

天然紀念物之部

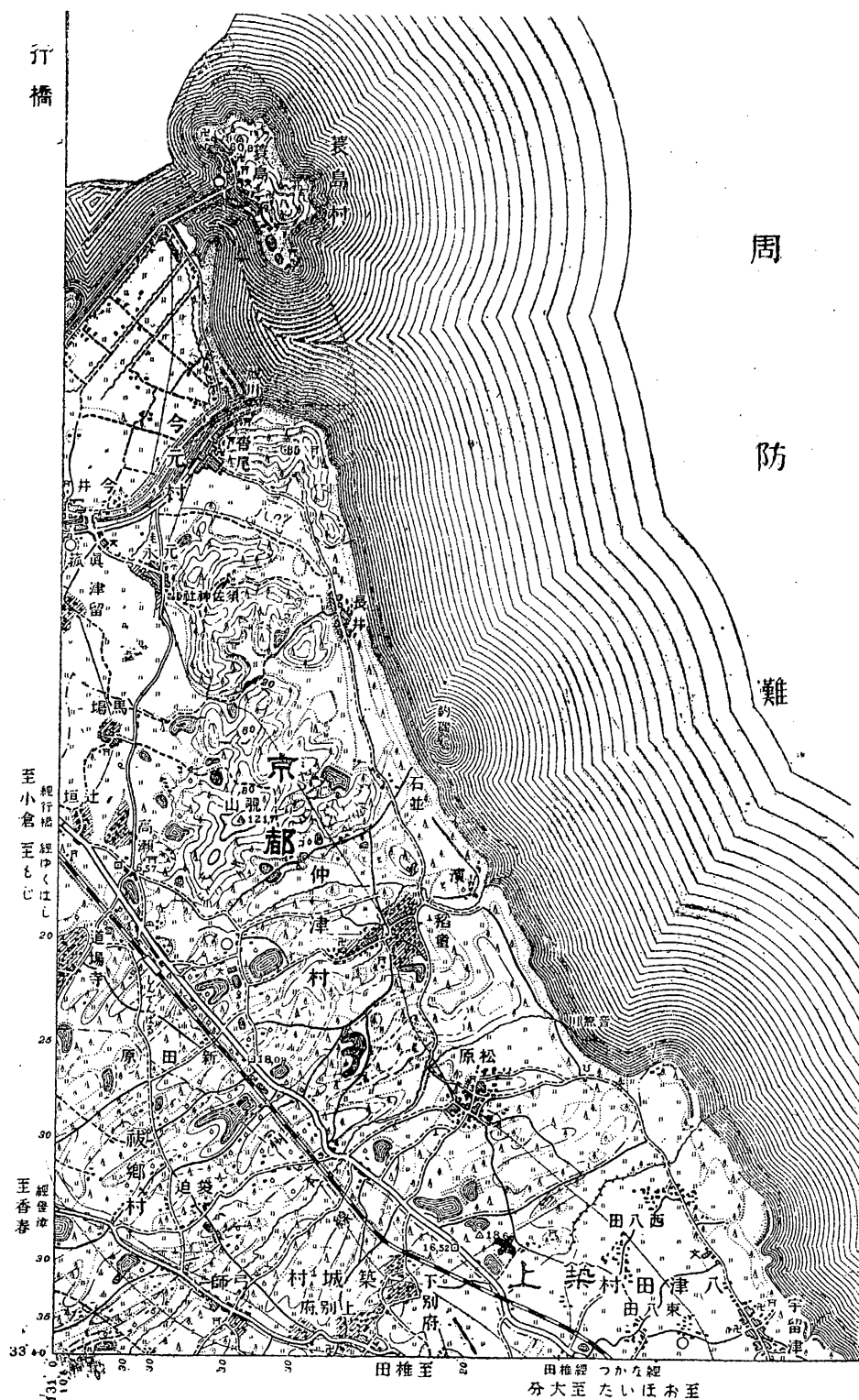
福
岡
縣

福岡縣史蹟名勝天然紀念物調查報告書 第十三輯

天然紀念物之部

豊前重箱池の鬼蓮……………	調査委員	萩原武平……………(一)
筑後御前岳及釋迦岳のつくししやくなげ群落……………	調査委員	木下盛枝……………(二)
豊前大富神社の黄心樹……………	調査委員	萩原武平……………(二)
筑前春日神社の社叢……………	調査委員	山崎又雄……………(二七)
筑後宮陣村將軍梅……………	調査委員	纈理一郎……………(三五)
筑前糟屋郡須惠村ザロンウメ……………	調査委員	纈理一郎……………(四三)
筑前上西郷村ナギの巨樹……………	調査委員	纈理一郎……………(四九)
豊前求菩提山及其附近鳥類一班……………	調査委員	安部幸六……………(五三)
福岡縣に於ける珍重すべき昆蟲オホカマリキリモドキ……………	調査委員	江崎悌三……………(九七)

豊
前
重
箱
池
の
鬼
蓮

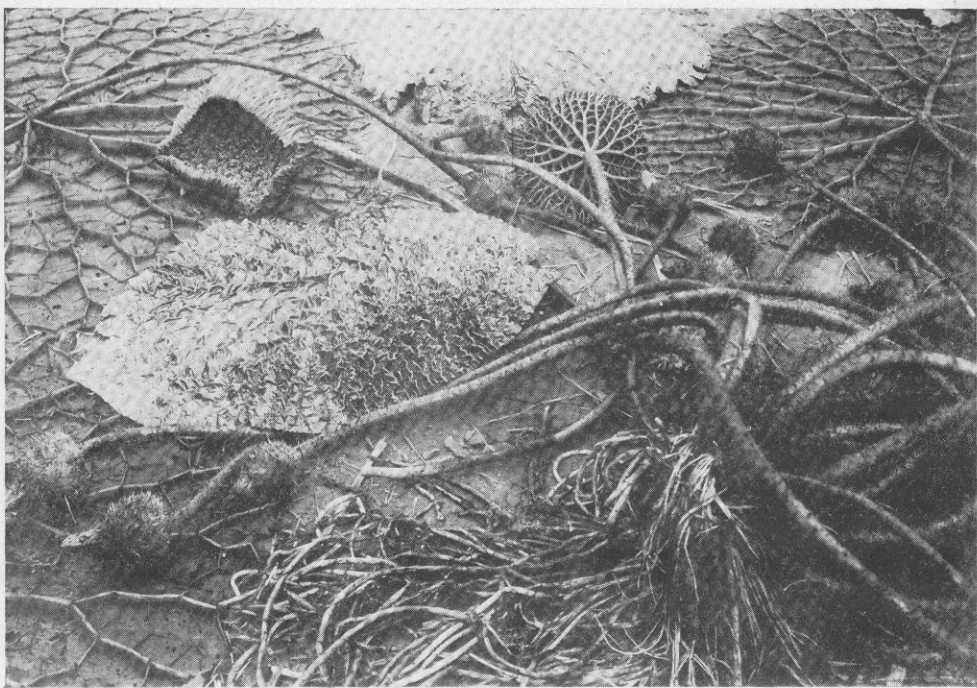


五萬分の一 薩島圖幅

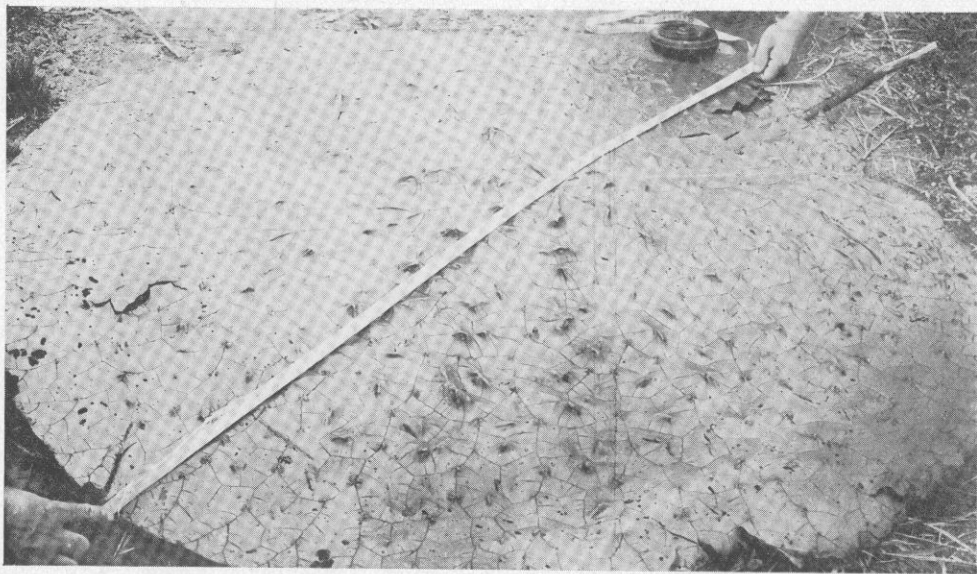
×印 重箱池所在地を示す



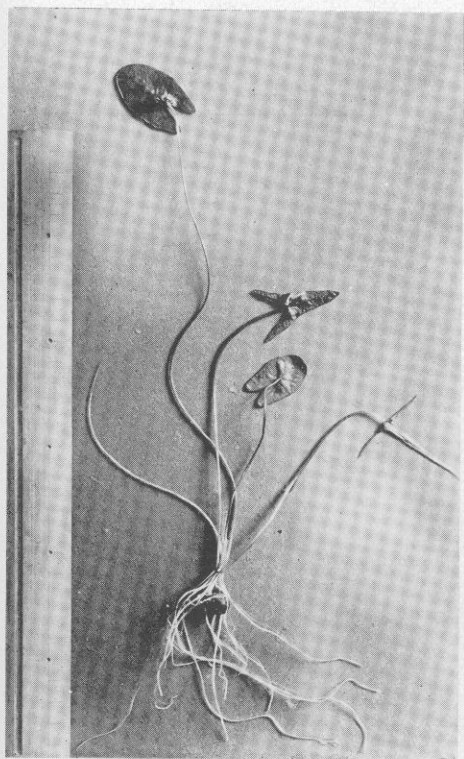
第一圖 重箱池全景 (山下龍男氏撮影)



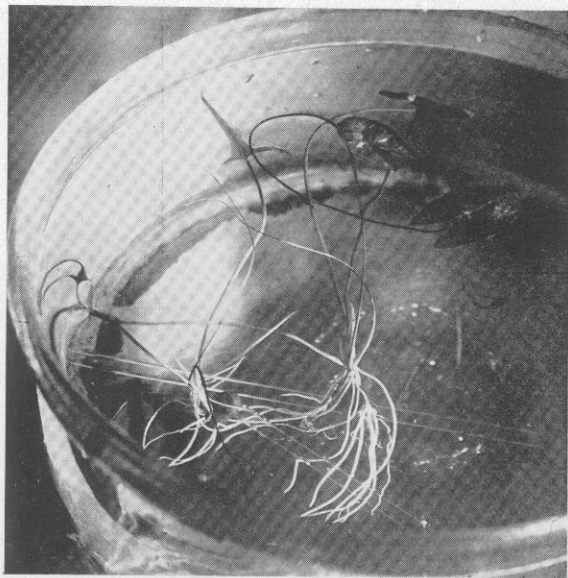
第二圖 おにばす一株陸上にあげたる所 (山下龍男氏撮影)



第三圖 おにばすの葉(一・四米) (山下龍男氏撮影)



第四圖
第五葉を生ぜしもの(水槽産)

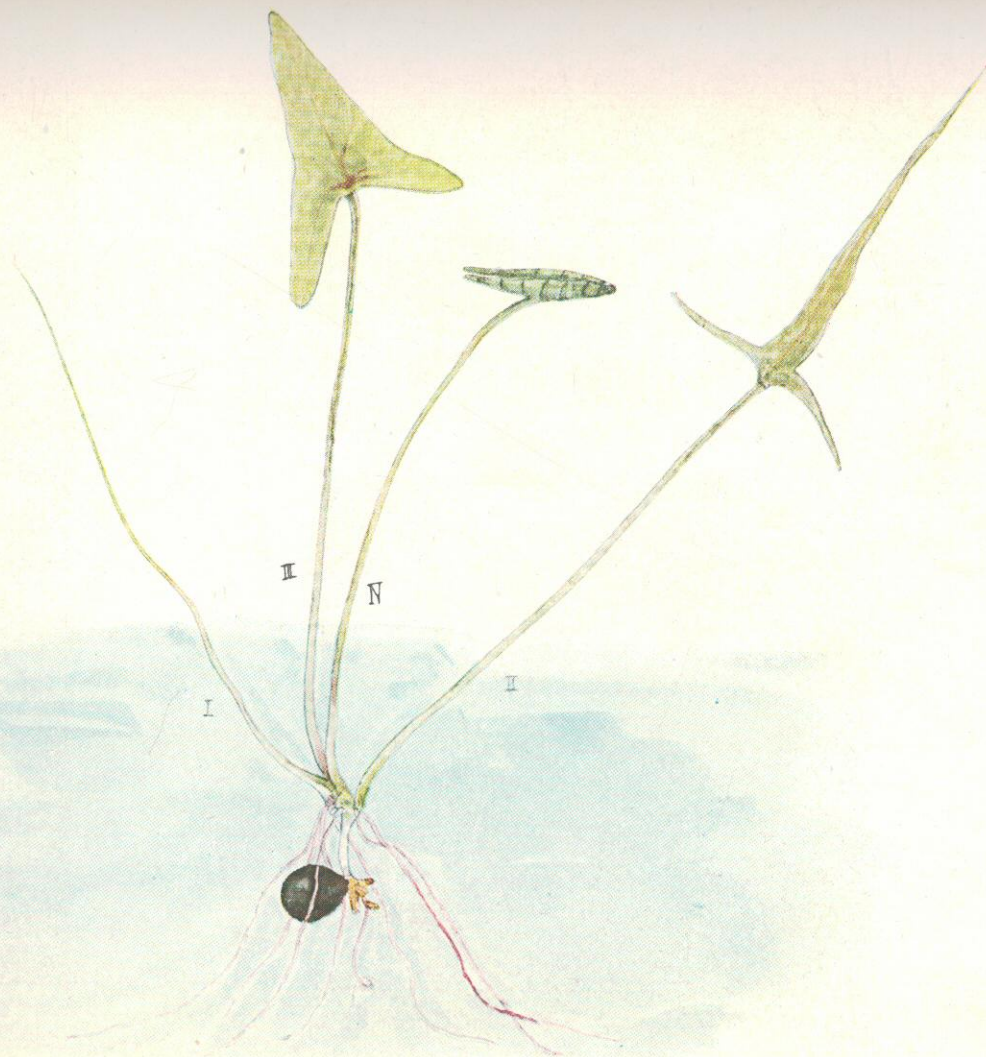


第五圖 水槽内の培養
(山下龍男氏撮影)

第六圖

葉の發生順序 (稍縮小)

(昭和十三年六月五日寫)

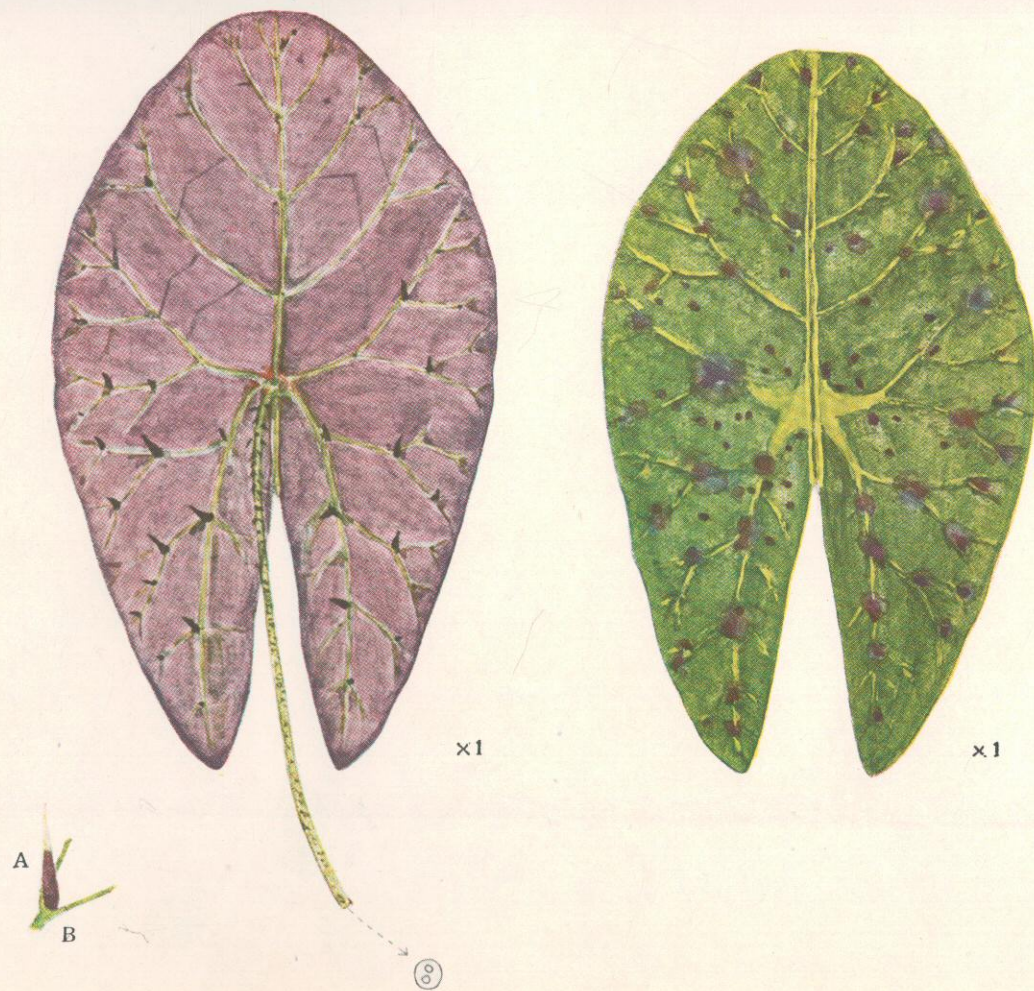


縦 4.5 cm

横 2.5 cm

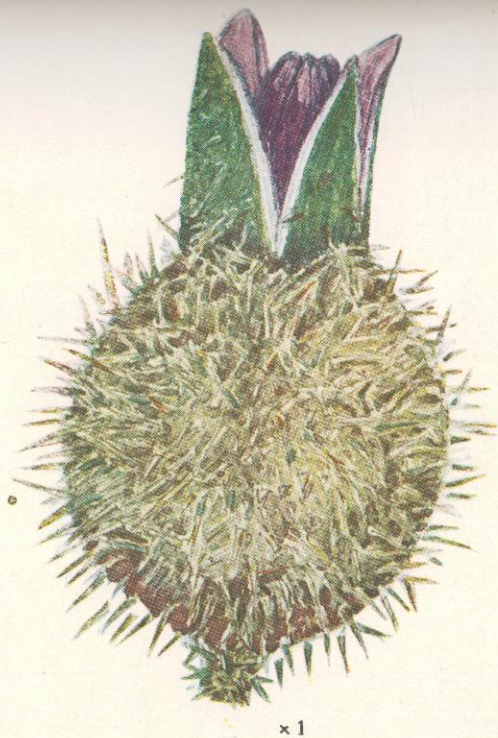
第七圖 第十葉 (昭和十三年七月十四日寫)

A 刺
(根元は黒紫色にして柔軟なり)
B 葉脈



第八圖 果實 重箱池産

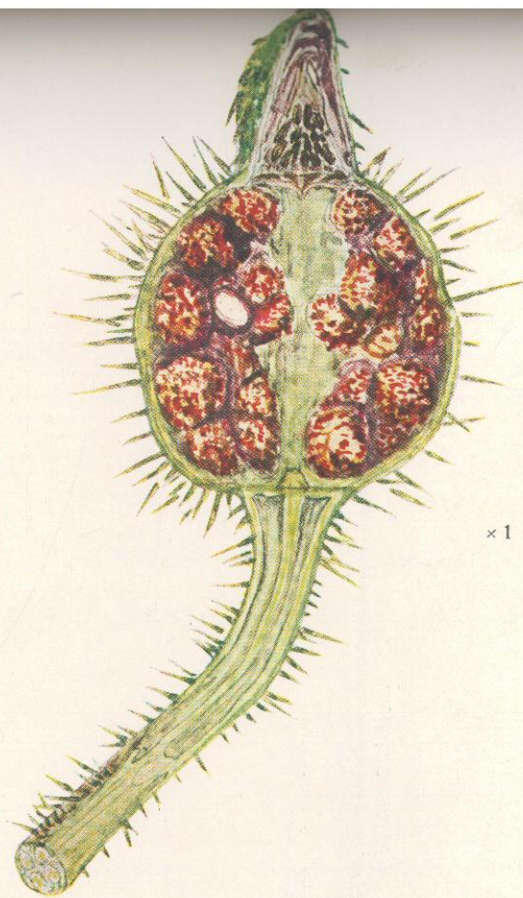
萼片を強いて少しく擴げたるもの
(昭和十三年十月二十三日寫)



第九圖 果實の縦斷面

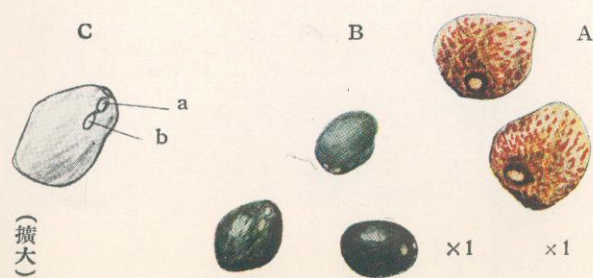
栽培結實せるもの

(昭和十三年十一月九日寫)



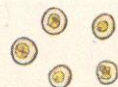
第十圖 種子重箱池産

(昭和十三年十月二十三日寫)



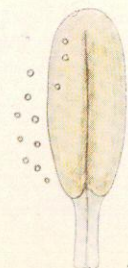
A 假種皮を被り浮游性のもの
B 假種皮を除きたる種子
C { a: operculum
 d: hilum

花粉 (擴大)



雄蕊

x8



花瓣

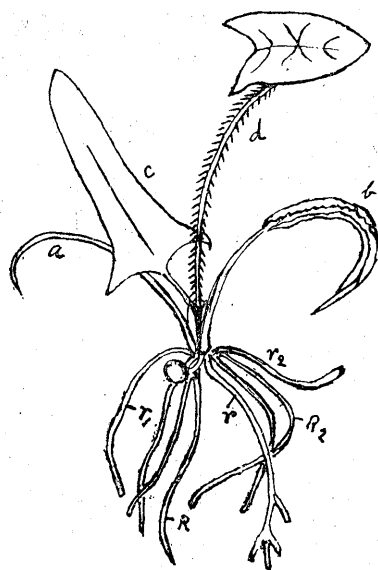
x1



〔 附 〕

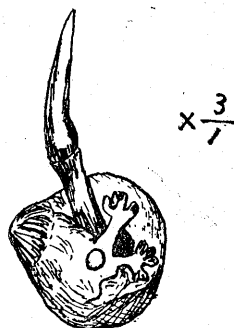
Victoria regia の發生

(稍 縮 小)



おにばすの發芽

(種子の形狀及發芽狀況は重箱池産のものと比して大に異なる)



(K. Gaebel による) (Engler, Prautl の書によるの)

豊前重箱池の鬼蓮

調査委員 萩原武平

一、調査年月 昭和十二年五月より

二、調査地 福岡縣築上郡八津田村俗稱重箱池

日豊線築城驛に下車して行橋、小倉方面に通ずる街道を北に徒歩數分にしてこの池畔に達す、池は稍楕圓形を呈しその一部はこの街道に沿ひ夏日鬼蓮の葉が池面一杯に廣がりその間を菱等の浮水性植物の點綴する様は實に一大偉觀なりと言ふを得べし。

三、分類上の位置

双子葉植物

睡蓮科

はす亞科
じゆんさい亞科
みつじぐさ亞科

かはほね類
四、萼類

みつじぐさ亞類
おにはす亞類

おにはす屬—おにはす
おほおにはす屬

四、名稱

1、和名 おにはす、みつぶさ

豊前重箱池の鬼蓮

- 2、學名 Euryale phelox salisb (屬名 Euryale は廣濶、種名 phelox は名刺の意)
- 3、古名 みづふぶき(三豆布々木、美津布々岐)
- 4、地方名 げとう(仙臺)いばらばす(丹波)地獄の釜の蓋越中)
- 5、漢名 芡、雞頭、鴻頭、雁頭、雁喙、蓂莢、蓂子等

五、形 態

- 1、全相 一年生草本。
- 2、根 泥土内に廣がる鬚根。
- 3、莖 花莖以外の所謂莖は極めて短小にして葉柄及花莖を叢出せしむ。
又、地下莖を出さざるを以て所謂蓮根を生ずることなし。
- 4、葉 本植物はその發生途上種々異なる葉を生ずべしと雖も茲には成葉につきてのみ述ぶべし。

a、葉片 この植物の葉は浮水性にして彼の蓮の挺水性なると異なる。殆んど圓形にして廣濶なること恐らく植物界の王座にあるものとも言ふべきか。重箱池のものにつきて測定したるものにはその直徑最大なるもの一四米に及びたり(第三圖)大正十一年十二町瀉産のものは實に二・七二米に達したるものありたりと言ふ。(的場氏測定)

この數字はアマゾン河産のおほおにばす(Victoria regia)よりも廣大にして、この意味に於ておほおにばすの名稱は寧ろこのおにばすに冠するを適當なりと言ふを得べし。

たゞ彼に比するに於てはすの葉縁は何等の奇觀なきも、彼に於てはその葉縁十糧位も上方に折れ曲りて、土人等のユルベと呼ぶ如く全形皿狀を呈するなどは彼に對し遜色あり。表面は深綠色を呈し葉面全體に小隆起を數多生ずる故平滑ならず。

葉脈は表より見る時は中央より放射狀に射出し漸次二分岐しつゝ葉縁に到る様は何等の奇異を感じざるも、一度之を裏返して見る時はその精巧の美人をして驚かしむ。

先づ葉柄のつけ根を中心として放射する六大脈と、初め葉縁の癒合によりて生じたる細脈一本とあり、全面赤紫色に美しく染められたる表皮の上に梁の高さ三糧（十二町湯産のものは六糧）に突起したる葉脈が淡黃褐色を呈して漸次その高さを減じつゝ多くは二分岐時に三分岐しつゝ葉縁に進み、更にその間細脈によりて連續する美觀眞に歎稱に價すべし。〔第二圖〕唯惜しむらくは葉の表裏を問はず殊に葉裏の脈上には到る所鋭き細刺を生じ之を扱えば手を刺傷す。

尙、花梗、葉柄、果實等にもこの種小刺を密生するを以て人之を忌みてげどう、地獄の釜の蓋等の惡名を附せしものなるべし。

又、この葉は頗る脆く、直に損傷するを以てかの刺の多きと相待ちて大なる葉を完全に陸上に上ぐることは困難を伴ふ。

氣孔は葉面のみに生じ、その形は双子葉型なり裏面の赤紫色は細胞内に含有せらるゝ色素に由來するものなるがこれ等細胞間には又、褐色したる特異の細胞を數多發見するを得べし。

嫩葉が莖より抽出したる頃は拳の形なるが水面に近づくや黄色より黄緑色に變じ碗形となる。Ⅱ(第二圖)

その内面には縮緬の如き細き襞を充し外面は他日裏面となる所なるが既に美事なる葉脈を表せり。Ⅱ(第二圖)

嫩葉一度水面に達するや襞を伸すが如く擴がり一週間乃至十日間にして二米の徑を有する葉となるべし。嘗て御旅屋氏が高岡公園にての測定によれば一日の伸長速度平均凡二五糎にして一時間約一糎の速さにて伸びたりと云ふ。

b、葉柄 細長き紐狀にして全面刺にて被はれ握ること能はざるも、その表皮は容易に剥ぐを得ることゝ、剥ぎたる後の狀態欸冬の葉柄の表皮を剥ぎたると相似たるによりみづぶさの名を得しものか。

その長さは水深に應じて一樣ならず、後出のもの程長くなりて葉は絶対に重らぬ様に配列す。増水等によりて四五糎位水面下に沈下するも凡一夜にして水面に達する様なり。

又葉が互に重る時は二―三日にして重りたる部分は黄變し四―五日にして腐蝕し始む。

葉柄の横断面は勿論圓形を呈しその徑五糎に達したるものもありたるが、何れもその中央に四箇の大通氣孔の外多數の小孔を通じたり。

葉柄の莖より抽出する所には薄き紙の如き半透明の苞葉を生ずその大なるものは長

八纏幅廣き處にて八六纏もありて開けば略等脚三角形をなし一本毎にその周圍を包む。
5、花 花は一株に多數を生ずるものにして第二圖に示したるものにては抽出せしもの二十四箇の外、葉間にその幼穉なるもの多數を藏せり。

何れも一花莖一花の單頂花序なること普通の蓮に似たれども時に雙莖とて一花莖に二花相接して生ずることありと云ふ。(的場氏觀察による)

花莖はその形及刺を生ずること葉柄と異らず、然して頂生する花は普通植物と同じく萼、花冠、雄蕊、雌蕊よりなる。

a、萼 四萼類なるを以て萼片四枚よりなり。元は合して合萼となる。

その一片は等脚三角形をなすを以て四片合する時は圓錐形を呈す。

外面は深綠色をなし多數の刺は皆下向きに生ず、又その内面は美しき紫色を呈し、萼片の互に接する所は薄膜となりて水分の浸入を防ぐものの如し。

b、花冠 花瓣は多數にして離瓣なり、その數十枚ありたるものにては外側の八枚はその内側のものに比して長大なるのみならず、美しき濃紫色を呈すれども内側の小なるものは形も漸次小となり色彩も淡くなる、或は先端のみ紫色或は全然白色のものすらありて縦に數條の條線を見ること第八圖の如し。

花は岡田博士によれば閉鎖花と開展花との別ありて、閉鎖花にありては水上に出でてより萼片の間若干離るゝ如くにして止り三―四日經過すれば水中に入る。かくて四十日を經過すれば成熟して再び水上に出づ、開展花にては毎日早朝開きて午後閉づること二

―三日にして水中に入るを常としこの花より生ずる種子はその數少きのみならず、然も完全なる種子を生ずることも少しと云ふ。

筆者の栽培したるものに唯一花開展花を見たれども重箱池のものは總て閉鎖花にして四萼片は堅く閉じて花瓣を外見し得たるものなしといふも過言にあらず。開けば美しさかの濃紫色の花を何故に閉ぢたるまゝに終るかハ訝しき事なり。

c、雄藥 多數(七三―七五)本花糸は短く、内側のものは全く之を缺くものすらありて萼の内面に附着す。(第八―九圖)

d、雌藥 柱頭は平圓盤狀にして淡紅褐色をなし微小溝を中央より放出して表面は八等分せらる、この点かの蓮の雌器柄(花托)を生ずるとその趣を異にする所なり。

下位子房を有し外面は刺多き花托に包まれ八室に區分せらる。卵子は子房内壁の到る所に垂下すること彼の「あつた屬」*Elaphoglossum* がその葉裏一面に子囊を造成するに類似し原始的なるものなるが「はなゐ科」*Butomaceae* も亦卵子の附着の方法蓮科に類似する點より察すればこの兩科は互に近縁にあるものならんか。

尙この花葉の特異とするは、その永存性にして果實既に熟し果皮破れて種子浮游し、甚しきは果肉腐敗し去りて原形を留めざるに至りても、萼、花冠とも著しき靄色を見せず雄蕊も完全に残り雌藥も圓盤形を保存して、全形ほゞ圓錐形をなして水上に浮游するを見ることなり。

6、果實 拳大乃至はその二倍大となる。重箱池産のものにては大なるもの縦一四糎周圍二七

種あり、殆んど球形に近くその先端に花部をつけたる様は、拳を上立てたる如く恰も鳥の頭部を見るが如き故鴻頭、雁頭等の名稱も自ら生ぜしことを首肯せしむ。

成熟するや漸次淡黄色を増し、表面に多少凹凸を生ず、内部は綿の如き軟き果肉につまみ、れて多數の種子を藏せり。Ⅱ(第八—九圖)(重箱池産の大なるものは、一三六粒の外に小粒多く、筆者が池に栽培したるものは四〇—五〇粒、水がめ栽培のものは五—一八粒)

その未熟なる内は「まさき」若くは「まゆみ」の種子の如き朱紅色を呈すれども成熟につれて假種皮著しく發達し外層面は淡黄色を帯び多くの紅色細胞の集合よりなる數多の小紅を生じて美しく、内層には漿液を充して軟かく、しかも瓦斯を含むを以て浮游性を生じ一點二日位は水面に浮游す、然してその表面は水に濕ふことなし。(第十圖)

重箱池産のものは種子一般に稍楕圓形にて普通長一二耗高さ一〇耗位ありて種皮は淡青綠色より灰綠色を呈し水中に置けば數日を出でずして黒變すその胎座に附着したる場所に二斑點ありその一は幼植物體が種皮より脱出する所なり。

胚は極めて小さき粒狀にして、多量の胚乳内外の胚乳を有すの中に存す。

六、發生(栽培史)

昭和十二年の秋重箱池産の果實を水槽中に入れ時々水をとるかへる位にして、その腐蝕に任せたるに八九十粒の種子(小粒のものも多數あり)は水底に沈みたるまゝ越冬せり。

翌十三年五月七日ふと見れば種子の一つは白點を表し數日にしてその白斑點より四突起を生じたり、五月中旬までには全部發芽を了し、四突起のもとより線狀をなせる第一葉を生ず

長大なるもの凡十一種なり、第二葉は三叉槍狀、第三葉は矢の根石に似たり何れも軟弱にして淡黄綠色を呈し水中葉に終る、第四葉となりて初めて浮水性を表して水面に浮ぶ、この葉の未だ水中に在る間は蓮の如く兩縁より卷込みたるも、水上に出づるや廣がりて橢圓葉となり長徑の方凡二分の一の切れ込みあり、恰も「かはほね」の葉を浮べたるが如し。(第六圖)

普通その縦四五種横二五種位にしてその表面滑澤濃綠色を呈し諸所に多くの黒斑あり、何れも葉脈の分岐點にあたる裏面は一面に赤紫色をなし頗る美麗なり。(第六圖)

以上の發生經過は「おほおにばす」と大差なく唯彼に於ては第四葉より小刺の多く生ずるを異りとする位なり。(附)

かくて日を経るまゝに胚乳のみにては葉色も黄變しかゝり根も日光のために赤色を帶ぶるに至りたるを以て六月十二日四斗入水がめ二箇を求め、一箇には田の泥土を他の一箇には校庭の土を入れたるものに移植したるに皆活着せり。

七月上旬に至る迄は葉の數を増すも、唯その大さを多少大ならしむるに留りたるに第十葉を數ふるやこの葉は中央の方より切りこみに癒合を見、これより一葉毎にその癒合も長くなり七月下旬第十四—十五葉にては全く圓形を呈するに至る。

かく癒合開始の第十葉に於ては表面黒斑のある點の裏葉脈の分岐點に葉柄の附着點に近き方より小刺を生じ、葉柄にも同點より下方に向け漸次刺を生ずるを見る。(第七圖)この間に於ける葉柄は極めて纖弱にして横斷すれば二大通氣孔を通ずるのみなるが既に孔壁よりは中央に向ひて無色の結晶性の刺を發生し居ること鏡檢によりて明視せらる。

圓盤狀葉となれば葉の發生する時兩縁より卷かず拳狀となりやがて碗狀となること既述の如し。

八月初旬に到りしにまだらみづめいが *Nymphula interruptalis* pyet. の幼虫に葉を貪食せられしに驚ろき他の小池に移植したるに莖根は完全なるも、水上葉片なきものはすべて腐れ去り、僅半葉片にても水上綠葉をつけたるものは全部活着せり。

かくの如く再三移植したれども十月初旬に於て、某株は

葉序		縦		横		備考	
第十五葉	一八、七、二	一八、七、二				(葉縁腐敗)	
第十六葉	二六、五	二七、〇				(同)	右
第十七葉	三四、三	三四、〇					
第十八葉	四一、四	四一、八					
第十九葉	四二、二	四二、〇					
第二十葉	三四、五	三四、五				(完全に廣がり居らず)	

註 癒合脈に添ひ中心を通るを縦、中心に於て縦に直角に交る方向を横とせり。

の葉を生じ、花序も小なれども二三の發生を見たり、重箱池にては、八月二十日に於て縦九五、八、八月廿八日の測定に於て一一〇、二に伸長、九月二日蕾を水上に出したるを見たり。かくて栽培したるものにばすも果實熟して十一月初旬までには全部自ら破れて種子を出し、十一月中旬に到りては全株枯死腐蝕しその影を留めざるに至りぬ。

昭和十四年に於て播種栽培したるものにては夏期旱天にて水殆んど地面に無き位までになりたるも、葉の縦約八五糧に達したるものあり、然れどもその多くは葉縁より枯損し完全なる形を有するもの殆んど稀なりき。

附 記

1. 分 布

東北大岡田博士の研究によれば本植物は亞細亞洲特産のものにして印度ベンガル、カシミヤより支那、日本、滿洲等に廣く分布し、本邦に於ては朝鮮の一部、臺灣、九州、四國、本州に跨り、就中本縣柳河地方、香川縣北部、琵琶湖附近、伊勢灣附近利根川の下流、松島灣附近等に多く分布しその北限は太平洋岸にありては $38.30^{\circ}N$ （宮城縣）日本海方面にては $37.55^{\circ}N$ （新潟縣（福島潟））にして何れも低平の地に存し高地には見られぬものなりと云ふ。

本縣に於ては、小倉市足立、粕屋郡中原村、同郡須恵村、鞍手郡古月村、嘉穂郡穂波村、（小正の池）、朝倉郡馬田村、三潯郡大溝村、八女郡水田村、山門郡柳河地方等各地にその發生を見れどもその數に於て、その偉觀に於て重箱池に及ぶものなく又天然紀念物として指定せられたる十二町潟産のものとも多少異なる特質を有する點及細刺のために取除かれる爲めと、この種子の食用となる爲めに孩童に採取せらるゝもの多く漸次その姿を没する等よりせめて本池の景觀をそのまゝ保存し度き希望を有す。

2. 發芽につきて

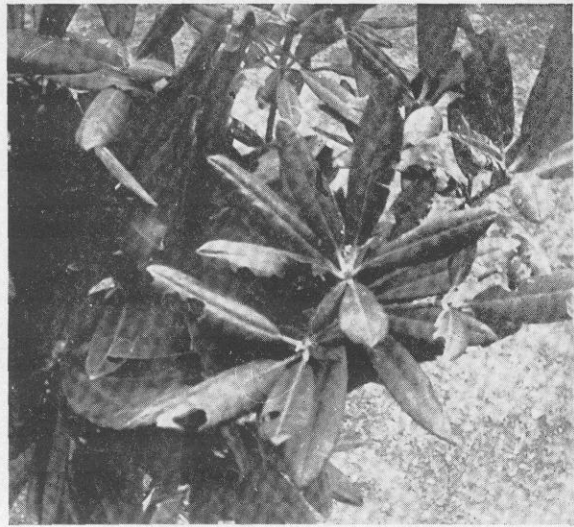
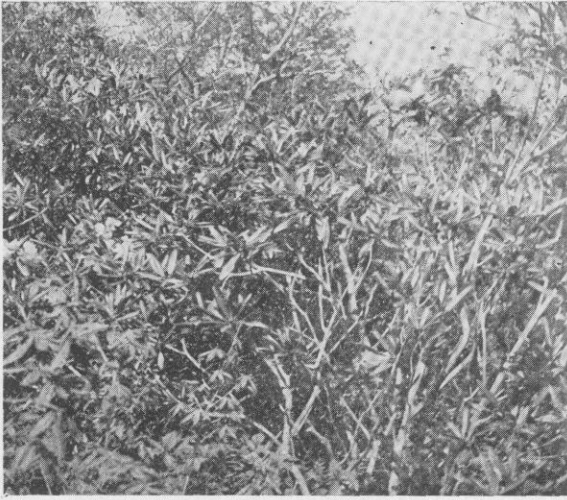
本種子は岡田博士の所謂「氣永き發芽」（delayed germination）により一躍廣く世に認められた

るが同博士の資料十二町潟産によれば、その種子の多くは二冬を経て發芽するものの如く、なれども、重箱池のものは氣永き發芽をなすもの殆んどなく、翌春みな發芽（しかも極めて細粒に至る迄）する如く、二回の經驗によれば水槽よりも水がめの泥中の方が發芽一齊に、又同じ泥中に於ては、日光のよく當らぬ方はよく當る方より早く發芽するを見たり。

終りに臨み本調査につき便宜を供與せられたる福岡縣史蹟名勝天然紀念物主任川上市太郎氏及び池田余氏並種々懇切なる御指導を賜はりたる東北帝國大學岡田要之助博士、九州帝國大學續續博士、江崎博士の三先生に對し深甚の謝意を表す

筑後御前岳及釋迦岳のつくししやくなけ群落

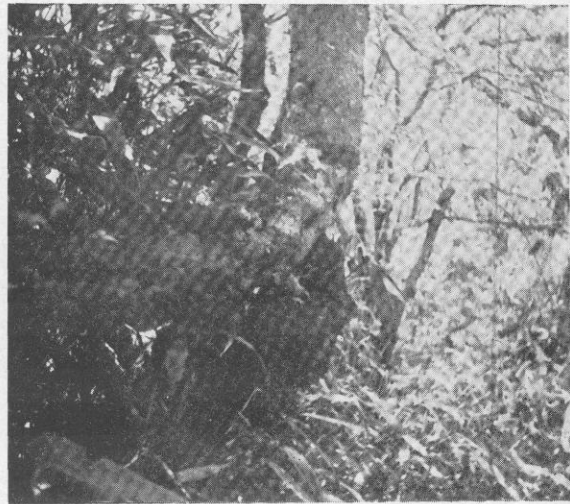
第二圖 つくししやくなげの群落（釋迦岳）



第三圖 つくししやくなげの葉



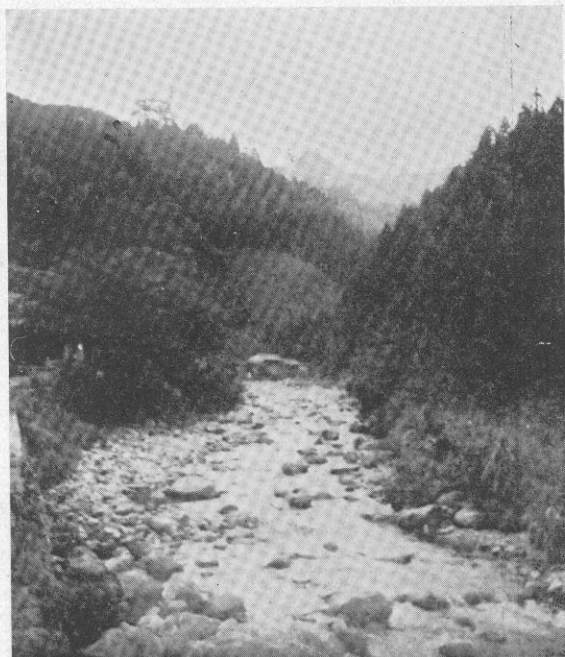
第四圖 雲間に見る群落



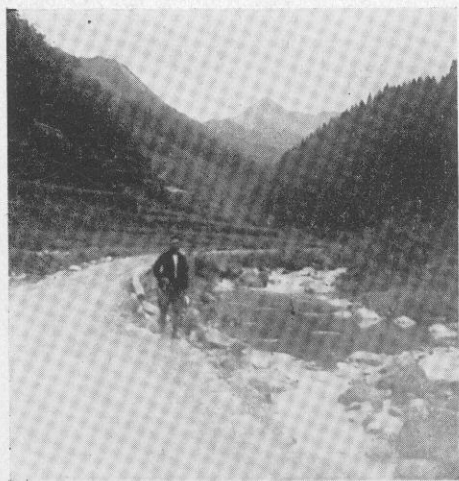
第五圖 つくししやくなげの大木



第六圖 つくししやくなげの幹



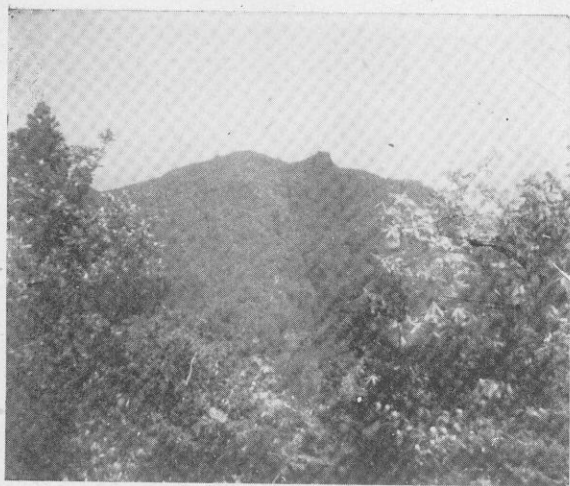
第八圖 御前岳と御側川



第七圖 御前岳の遠望
(御側川にて)



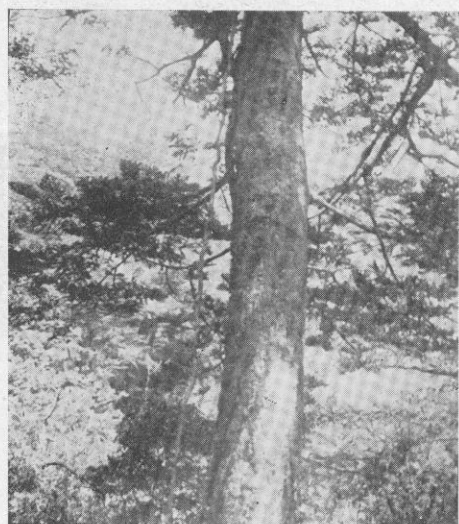
第九圖 御 前 岳
(釋迦岳より見たるもの)



第十圖 釋迦岳（御前岳より望む）



第十一圖 ハツ瀧（ハツの中の一）
上の橋は木材運搬用



第十二圖 森林帯の老樹
（蔓性植物が枝にからむ）



第十三圖 木材運搬の状況



第十四圖
木材を運らす



第十五圖 森林帯（ハツ瀧の附近）



第十六圖 森林の一部（雨中）（第一圖調査）



第十七圖 木材運搬の橋



第十八圖 山つゝじ林（花咲く）

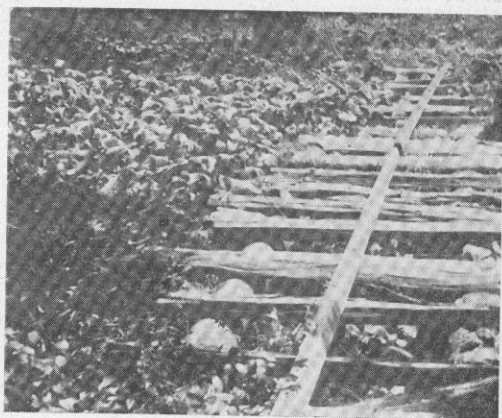


第十九圖 御前岳の頂上（權現堂）

案内者は堂に立てられし
武運長久の旗を持ちて



第二十圖 釋迦岳の頂上(釋迦石室)
(立てる人は案内者)



第二十三圖 わさび栽培と橋(釋迦岳)
(向つて左の葉はわさびの葉白い部分)



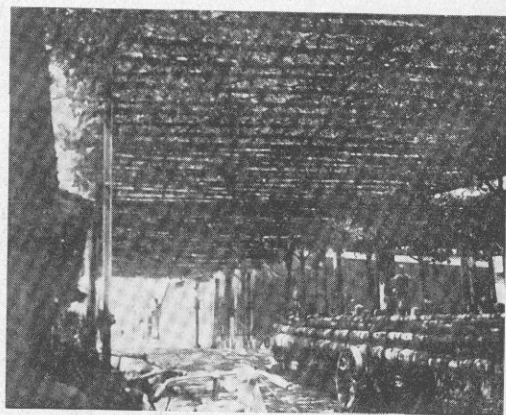
第二十一圖 つげの群落
(釋迦岳にて)



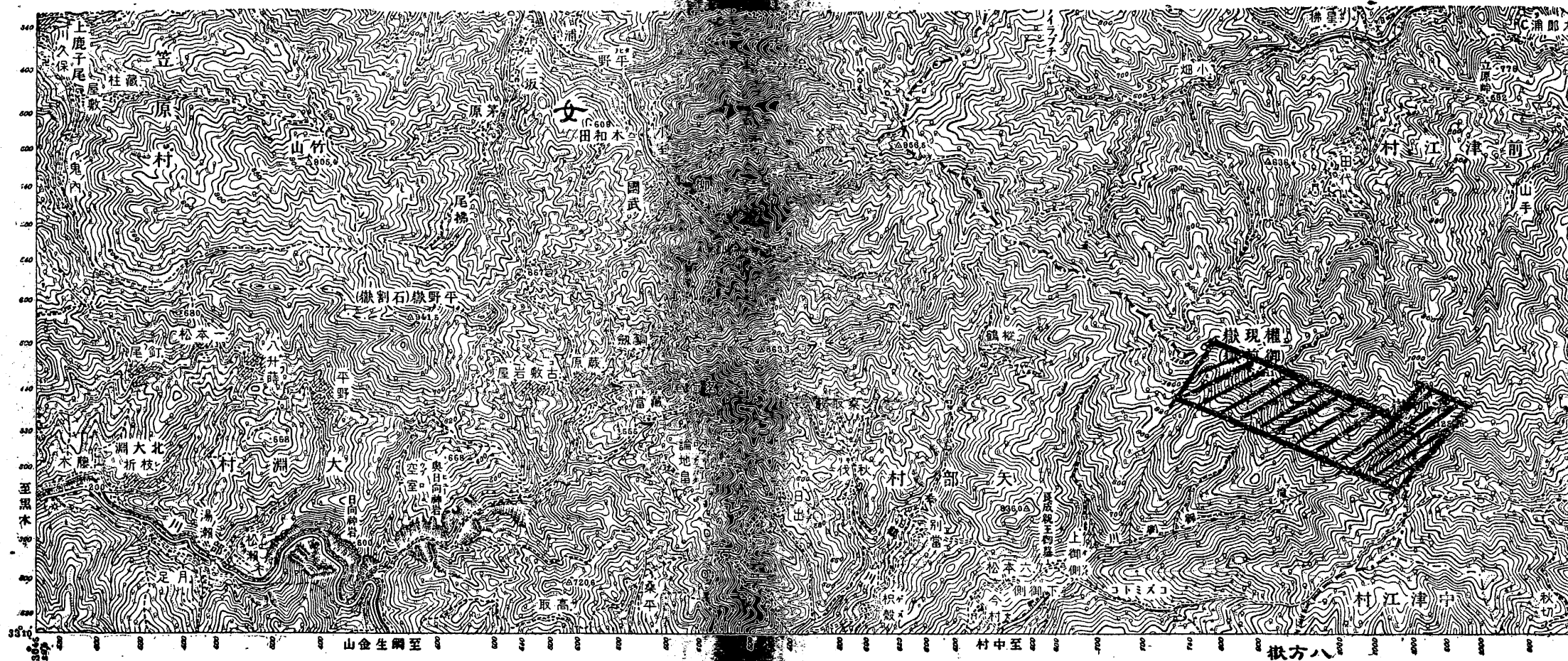
第二十四圖 黒木よりの自動車



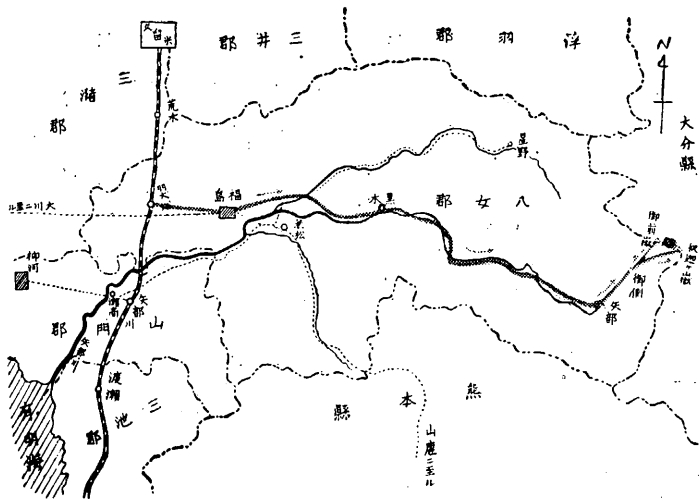
第二十二圖 わさび栽培地(釋迦岳)
(白い部分はわさびの葉に日光の直射せる所)



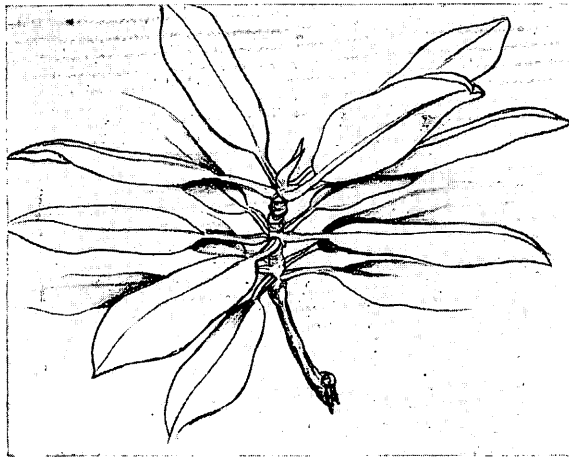
第二十五圖 黒木の藤



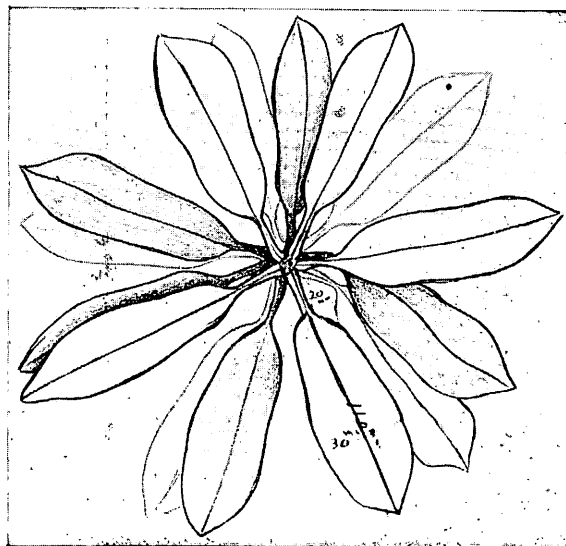
第二十六圖 縮尺五萬分の一(日田城の一部) つくししやくなげ群落地  は郡落區域



第二十七圖 御前岳釋迦岳に行く道程



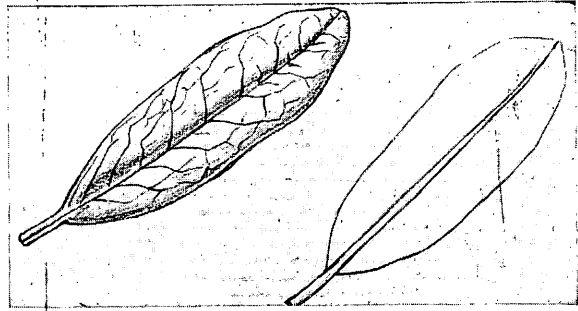
第二十八圖 葉序を示す



第二十九圖 葉の排列状況

表

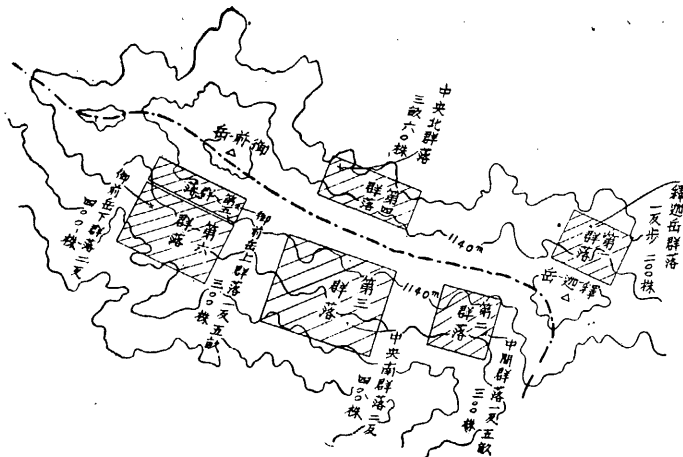
裏



第三十圖 一枚の葉



第三十二圖 花及其附キ方（繖形花序）



第三十三圖 しやくなげ群落

筑後御前岳及釋迦岳のつくししやくなげ群落

調査委員 木 下 盛 枝

◎ つくししやくなげ

つくししやくなげ (*Rhododendron Hymenanthus* Maxim. var. *heptamerum* Makino.) は、しやくなげ科に屬して、おほしやくなげとも稱し、多く九州地方の山地に自生しゐる常緑灌木である。しやくなげの名のつくものには、つくししやくなげ、しやくなげ、ほそばしやくなげ、やへしやくなげ、きばなしやくなげがある。福岡縣八女郡の奥の御前岳及釋迦岳には、つくししやくなげの大群落がある。

御前岳、釋迦岳及これを連ぬる峯は全部この木の群落があつて、覆はれて居ると云つてもよいほどである。これを二回調査した。第一回は夏であつた。第二回は花期を見計つて登山した。五月十日であつた。その概略を記して報告する。

◎ 御前岳、釋迦岳

つくししやくなげの群落地である御前岳及釋迦岳は、福岡縣八女郡の東端で、其峯は福岡縣、大分縣、熊本縣の境をなす所である。この地に行くには省線羽犬塚驛に下車して、黒木行の南筑乗合自動車によるものと、黒木行の南筑軌道によるものゝ二途がある。羽犬塚から福島を過ぎて長野に達する。此地は矢部川の二流、即ち本流と星野川の合流する所で、こゝから矢部川の溪谷と星野

川の溪谷との分れる所。これを矢部川本流の溪谷の方に行けば黒木に達する。黒木は南筑軌道の終點、羽犬塚、黒木間の南筑乗合自動車の終點である。こゝで鯛生行の堀川自動車に乗りかへて東に進む。黒木町は天然紀念物の藤で有名なる地で、其町の祇園社の境内から道路の上に蔓延して、春は美しい花房を垂れる。黒木町から上流の矢部川本流は、清い流が瀬となり、岩石、川の中央に散在して奇石となり、怪岩となり、兩側の山は珍らしい岩に木を寄り添へて全く一幅の繪のやうである。上流に行くに従ひ次第に溪谷は狭く美しくなつて、日向神の景勝地を作り出してゐる。道路が其河岸にあるので、道を行きつゝその景色を賞する事が出来る。

次に矢部村の中村に着く。中村は鯛生等に行く要地で、矢部村役場の所在地である。ここから北に折れて御側オツに行く。此間は定まつた交通機關はないので、徒歩か特別仕立の乗物によらなければならぬ。御側は後征西將軍良成親王の御墓所のある處で、高く石を敷きつめたる參道を登れば、鬱蒼たる森、玉垣を廻らしたる中に御墓所を拜する事が出来る。

この御側から眞の山路に入る。此山に登るには、釋迦岳に先に登つて、峯つゞきの御前岳に行つて下る事が容易であらうとの事に、先づ釋迦岳に登る。全體を垂直的に見て、山麓地帯と喬木地帯、次に灌木地帯に分ける事が出来やう。此喬木地帯は大喬木で大森林である。灌木地帯のつゞき地帯と頂上のつゞき地帯の中間にしやくなげの群落がある。釋迦岳には頂上近くに境界標が立つて居る。頂上は急に高く聳えてゐるから上るのに稍困難である。この頂上には釋迦如來を祀れる石室がある。此山の喬木地帯にはワサビの栽培が盛で、大きい葉が地面を蔽ふてゐる。釋迦岳から御前岳までの峯は、此山の頂上から五十米位下つた海拔千百四十米位の高さの續きで、直線距離二千

米位此峯一帯が殆んど全部しやくなげの群落となつてゐる。御前岳は其頂上に構現様を御祀りした堂がある。つげ等の灌木も見當るしそれから下りかけると、しやくなげも澤山見當るし、もみ等の大樹の森もあつて釋迦岳で記したやうな垂直的の分布がある。道なき急坂もある。それから麓に近くなると椎夫の家等がある。歸りには御側に下りて行く。以上は此山に達し、此山を涉破する概略である。

◎ 葉

單葉披針形で、葉身は中肋に沿ふて長さは九十耗位、發育のよいものになると百三十耗位であるが、普通は百耗位である。幅は基部が狭く先になるに従ひ廣くなり、後に又狭くなつてゐる。葉の基部より三十耗の點で葉幅十五耗乃至三十耗。葉幅の最も廣き中央部で三十耗乃至四十耗である。葉には二十耗位の葉柄がついてゐる。

葉の表面は光澤があり濃綠色で滑面となつてゐるが、裏面には褐色の縮毛のやうな毛茸が厚く密生して葉脈も見ることとは出来ない。只中肋の部分が高くなつてゐる位である。葉の表面から葉脈を見るに、主脈より左右に各々七つ位の明かな長い支脈が出で、其間に又一個の小脈が出てゐる。それを基として澤山の支脈が出で、網狀を呈して居る。

次に葉序であるが、此葉が莖に附着する様は輪狀に並んでゐる。其附着してゐる輪生は多く三段となつてゐる。時には四段となつてゐたのではなからうかと思はるゝ一二枚の残された葉があるやうだが、普通は三段以下で、上より第一、第二、第三段と名づけて見ると、第一段は多く三枚、第二段、第三段は多く四枚づゝであるが稀には三枚もある。然し發育のよい枝になると第一段四枚、第

二段五枚、第三段は五枚となつてゐるが上記の枚数を持つ枝は稀である。次に第一段と第二段の間の距離は五耗、第二段と第三段との間は十耗、第三と第四段との間は十五耗となつてゐるので、枝の先になるに従つて節間が短縮してゐる。

◎ 花

花は枝の頂上に群れて咲く。決して葉腋に咲くものではない。枝には葉の項で記したやうに十枚乃至十四枚の葉があつて、其先に八個の花が群がつて咲いてゐる。一つの花は花軸約三十耗の先に花辨が附着してゐて合辨花冠、先が七裂してゐる。花軸が必ず横に曲つてゐる爲、此花は上向のものではなく、横向か下向である。開いた花の側面は花托より花辨の先まで即ち辨の長さは四十耗で、その三十耗位までは合辨、其先は分れてゐるので、離れた花辨は十耗、合辨の部分が三十耗ある。花辨の開きは花辨の先端から先端までは五十耗である。雌蕊は一本で其長さは約四十耗であるから花の口まで多く出てゐない。雄蕊は十四本ある。花辨の色は淡紅色で、二米もある大樹の各枝に澤山咲いてゐるのは見事なものである。こんな大樹老樹の群がりに各木が花を附けてゐる五月十日頃に空から眺めたら、さぞ美しい事であらうと思はるゝが、此石楠花の林の中に入るとは、附近の數本を見上げて美しさを賞するのみで全部を見通す事が出来ない。それでも花も相當大きいし、花の群も多いし、一本を眺めても美しいものである。どこか此森の向側に適當な眺所を見出したいものである。

◎ 幹 及 其 適 地

莖は双子葉植物莖であるが、今迄あまり大きいものを見た事がなかつた。然るに御前岳及釋迦

岳のものは、目通りで莖の周り一米内外、それに苔等が附着して非常に古い。幹も枝も此植物の性質上、細く伸びるのに、周り、一米もある大きさになつてゐるから、よほど古いものであらう。高さも相當伸びて三米もあらう。直立してゐるものは稀で、多くは曲りくねつてゐる。地に這ふものもあれば倒れてゐるもある。然し枝と枝とは交叉して群落地の地面はしやくなげの葉に覆はれて、日影をもらす事が甚だ少い。此地は腐葉土に覆はれた山の斜面である。非常な急傾斜である。特に南斜面に多く生えてゐる事から、水の流れのよい腐葉土の地で、日光を受ける南向の地を好むやうである。

◎ 現 地 調 査

つくししやくなげの群落地は、釋迦岳と御前岳及この二岳を連ぬる峯である。

(一) 釋迦岳は其高さ壹千貳百參拾米、其頂上に釋迦如來を御祀りしてある三尺位の石室がある。案内者は酒を、この石室の扉を開いて供へた。此山は頂上が急に尖つた山であつて、登るに非常に困難する。これに登るには、御側川(矢部川の支流)に添ふた谷を登り、此山の五合目位にて八つ瀧といふ一仙境に達する。落ち口は森の中にあつて一幅の繪のやうである。邊りには奇岩があつて、瀧の水はあちこちに當つて八つ瀧をなしてゐる。眞に自然の絶景である。これから大森林となつて来る。大樹生茂り古木鬱蒼たる様、それに蔓性植物の大きいものが絡みついてゐる様等本當に古き森林を思はしむ。その蔓性植物が幹に絡み附かずして離れ、高い枝に絡んで居るのから考へると、此樹の小さい時に枝に絡んだものが、此樹の成長すると共に伸びたのであらう。そうとすれば非常に古いものである。此山の五合目から七合目迄は大樹が茂つてゐる。もみは目通りの高さで

周り四米、高さ七十米位のは稀でない。しほぢけやき等も略等しい大きさで茂つてゐる。途中一米の間に置いて一米位の長さの丸太を横たへてあるのを見受ける。これはこの森林から伐り出した木材を迂らして麓に送る爲のものである。寫眞のやうな運搬してゐるのに逢ふた事も幾度かある。七合目から九合目迄位は、ぶな、つくし、かへで等の老樹が生えてゐる。山つゝじ林は、樹の高さ三米位、それに花が咲きこぼれてゐた時に丁度登山して非常に美しかつた。つくしがこんなに大きくなるには多くの年數を経てゐることであらう。次に熊笹が多い。低いものもあるが人丈よりずつと伸んでゐるのが多くて、登山にはそれを押し分けて行かねばならぬ。ぶなの樹は、周り三米位のも見受ける。九合目より頂上に近くなるに従つて、つげが多い。この樹も周り一米に近いものもある。釋迦岳の頂上は禿然と聳えて居て一米以下の樹のみである。

(二) 御前嶽は釋迦岳の西北、約二千米離れた處にある峯で、其頂上はやゝ圓い姿の山である。高さは一千二百十一米で權現岳とも云つてゐる。頂上には木造の權現堂がある。第一回調査には、雨と風であるのを押して登つたので、この頂上についた時は權現堂は吹きとばされて轉んでゐた。これを見た時は薄氣味悪かつた。第二回目には靜かに落ついて建つてゐて、此山の頂上の神々しく山威の強さを感じた。釋迦岳のやうな突禿たるところはないが、落ちついた大きい穩かな山である。頂上には矮性植物しかない。例へばつげしやじやんぼ等である。山を降りるに従つて、熊笹があることや、山つゝじがあること、それにつくししやくなげが多いとか、次にもみ、しほぢ等の大樹の林があること等、垂直的分布がはつきりしてゐる。

(三) つくししやくなげの群落は、今迄述べた釋迦岳、御前岳及此兩山を連ぬる山の峯に多い。釋迦

岳では東北斜面頂上より九合目まで約一反歩位のしやくなげ群落がある。老木が多く高さ二米乃至三米で、調査した五月十日には花より蕾の方が多かつた。次に御前岳では、九合目の處に一反五畝歩の群落があり、それより下れば二反位の群落、山の南側にあつて、こゝのはこぼるゝ程の花が満開してゐた。釋迦岳と御前岳との中央の地に大群落がある。これは二反餘で峯によつて二つに分たれてゐる。南側は二反位、北側は三畝位で、其樹の大きい事は他の群落に比類のないやうに思はれる。樹の周りも一米に近いものもある。しやくなげが其幹を山路に横倒して澤山の花をつけてゐる様等は仙境でなければ見られないと思はるゝほど古色がみなぎつてゐる。次に釋迦岳に近く一群落がある。峯の南側で約一反五畝位あらうと思へる。案内者山口幸三郎氏は一反に二百本位は生えてゐるだらうと云つてゐる。群落の場所、反別及本數の概略を圖にすれば次のやうである。

第一回の調査の案内者轟氏と第二回調査の案内者山口氏との株數の異なる点は、中央群落に於て山口氏は四百六十本位と言ひ、轟氏は千株もあらんと言はるゝが、見るところ五百株位のものではあるまいか。要するに群落は峯の南側に最も多く北に少い。御前岳群落及中央群落は最も樹として大きく反別も廣い。

◎ 結 び

前後二回に御前岳、釋迦岳のつくししやくなげの調査を行つて其概略を知ることが出來た。此山のつくししやくなげは

(一) 非常に大きい老樹であること。

高さも三米、周りも一米もある。

(二) 花期はよほど後れてゐること。

平地では四月には咲くが、山が高い爲か五月十日頃が咲き初めである。

(三) 群落の非常に多いこと。

釋迦岳、御前岳及それとを連ぬる一千米の峯は全部しやくなげに包まれてゐて、最も少く見積つても一町歩はあり株數も二千株位はあると思ふ。

(四) 此高山植物であるつくししやくなげの大群落が高さ約一千米の地点で溫暖なる九州にあること。

以上要約によるも天然紀念物として保護する價值があると思ふ。

終りに此調査に便宜を興へられたる矢部村役場に感謝の意を表す。

豊前大富神社の黄心樹



五萬分一 中 津 圖 幅 ×印は大富神社の所在を示す



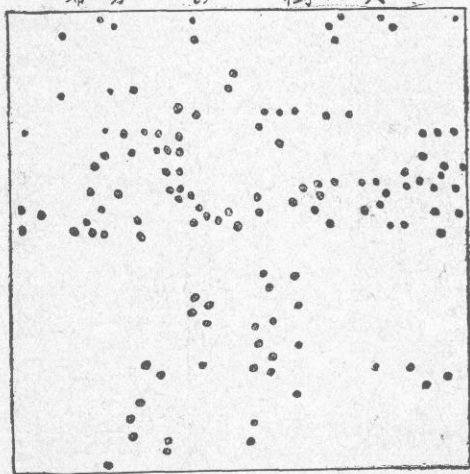
第一圖 大富神社本殿



第二圖 社殿より東方の参道を望む
左側石燈籠の所に勅使井ありその附近分布最も密なり

第三圖

黄心樹の分布



方間、密度最大なる場所

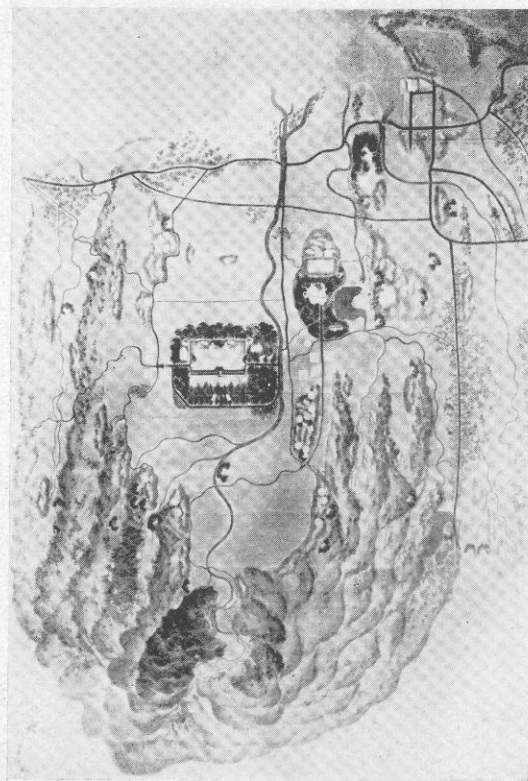


第四圖 林中の黄心樹

黄心樹に結びつけてある番号は白布に記入してある



第五圖 巨大なる藤



第六圖 昔の大富神社

現在の境内の數倍の面積を占め居たるものなりといふ。下方淡黒色の部は八屋の海なり。

豊前大富神社の黄心樹

調査委員 萩 原 武 平

一、調査年月 昭和十三年八月八日

二、樹 種 をがたまのき、黄心樹、烏石心、*Michelia Comprensa Maxim.* (本邦特産樹)

三、所 在 築上郡山田村大字四郎丸字甫起山縣社大富神社境内

四、分布及樹相

大富神社は山田村役場より西北凡四―五町距りたる田園の中にある。千木高々として神さびたる社殿は鬱蒼たる森の西の方に偏して建てられてある。境内は凡そ東西に長方形で面積一丁餘歩に亘る。その中には老杉、古椎、其の他の巨樹、老木枝を交えて空を蔽へ、森嚴莊嚴の感を深くし、足一度境内に入らば神氣胸に迫りて肅然として自ら襟を正さしむるものがある。

社殿より東に、西方より來りて東南に偏してこの森を貫流する一條の小溝があり、參道の兩側にはこの小溝を利用して造られた池の跡らしき凹める濕地の如きものがある。黄心樹の分布は此の溝より東方に多く、その西方にあるは、唯、東西に通ずる參道の北方、溝と社殿前庭との間に限られ、その他には本境内を通じて自然發生のものは一本も見當らぬのである。就中最もその分布の密なるものは、勅使井を中心として參道を挟みその南北の林中にある。

黄心樹の密度の大なる所は、林中でも、最も高い杉の木、椎の木が多くあり、尙やぶにつけい、くすどいげ、ゆづりはなどの樹木が長く伸び、その下には椿、みづばへ、ゆづりは、やぶにつけい、たらえふなどの常緑樹が茂り合ひ、この藪を潜り抜けるのが容易でない。此藪の中に黄心樹は、さも虐げられかの様に、あの狭長な葉を廣げて居る様は優にやさしくも亦可憐である。（第四圖）

本境内の黄心樹は皆倭小の幼樹ばかりである。高さ二丈に達するものは林中僅か二本あるのみで、その一本は地面に接して樹周を測りしに八寸、眼通りにては五寸、他は地面側にて七寸、眼通りにて五寸であつた。これは林中特に叢中にあることゝて何れも樹がひよる長くなる爲で、しかも枝を出すことが少い。高さ五―六寸位のものは四―五葉をつけて居るに過ぎぬ。

別表樹長調査について見るに、その樹長計測三三、六本中最も多きは一―二尺臺のもので平均三尺餘を示してゐる。一般に云ふと五寸毎にその数の多きを見、又長さを増すにつれて樹数を減じてゐる。

五寸毎に数の多きは發芽の同時を示し、その中間のものは環境の相違から發育の遅速があつたのかもしれない。唯、尺以下の一九といふ數は餘りにも少いのであるが、丁寧に見たつもりでも、やぶにつけい、椿、ゆづりは等の幼植物と見違られてその數を逸したのかも知れないが、又種子の散布が少なかつたか、若くは發芽狀況がわるかつたのかも知れない。

樹 長 の 調 査 (一)

樹	株數	樹	株數	樹	株數	樹	株數		
五寸長	一九	一〇寸長	五一	一寸長	一	一二寸長	七	一三寸長	二

一五	四五	一七	二	一八	二	二〇	三八	二二	六
二四	二	二五	二三	二七	二	二八	三	三〇	二六
三二	一	三三	一	三四	一	三五	一〇	三七	一
三八	一	四〇	一五	四二	一	四五	六	五〇	一一
五二	二	五四	一	五五	三	六〇	一二	六一	一
六二	一	六五	六	七〇	一〇	七二	一	七五	五
八〇	一一	八五	一	九〇	三	九五	一	一〇	一
二〇〇	一	株數總計 三三六		平均樹長 三〇寸四一〇七					

樹 長 の 調 査 (二)

長 さ	本數	長 さ	本數	長 さ	本數	長 さ	本數
一尺以下	一九	一尺臺	一一〇	二尺臺	七三	三尺臺	四一
四尺臺	二二	五尺臺	一七	六尺臺	二〇	七尺臺	一六
八尺臺	一二	九尺臺	四	一丈臺	一	二丈臺	一
計	三三六						

備 考

第四項樹相の記事中二丈臺のもの二本とあるはこの森林中に二本ある意にして、本表にある一本は特別區域を限つてその密度と長さを調査したる三三六本に含まるゝものなることを附記す、従つて三三六本もこの森林中に生ぜし黄心樹の總本數を示したるものでなく一區域に過ぎないのである。

五、附 記

境内には右黄心樹外にの自然發生の巨樹が多いのでその一つ二つを附記する。

豊前大富神社の黄心樹

a. 藤 *Krauhia floribunda* Tsub var *Typica*

恐らくこの境内の森の王座を占むるものであらう。神殿の後の林中にある、目通り七尺もあつて何回かねぢれてはゐるが、大體眞直に伸び傍の椿の木にて體を支えつゝ高さ一丈七八尺の所から西方へ大きな分枝を出してゐる。それが數間の間空中に撓む様にして下つた後他の樹に匍ひ上つてゐる様は熱帶の大蛇を思はしむるものがある。晩春新緑に映えるこの森林の一帶に紫雲を棚びかせ里人の眼を喜ばしむるものはこの藤である。

たゞ惜むらくは幹の中が腐蝕して空洞化せんとしてゐる事で餘命の幾何かを氣遣しむるものがある。(第六圖)

b. まき *Podocarpus Macrophylla* D. Don

神殿の東竹林の傍にあるのが最大で眼通り九尺五寸ある、林中これに次ぐものが所在にある。

c. 檜 *Chamaecyparis obtusa* Endl.

神殿の西北にある樹周八尺九寸あるのが最大である。

d. 杉 *Cryptomeria japonica* D. Don.

あまり太いのはないが數が最も多く樹皮に黄又は白の斑點を生じた様は如何にも神秘的な感を與へ、神社にはなくてはならぬ木である。

e. ばくちのき *Prunus macrophylla*

樹周三尺五六寸ではあるが特異の樹皮が眼につく。

f. くすどげ *Xylosma apatis*

これも太くはないが凡そ眞直ぐに伸び老木巨樹に伍して頂端を森の上に出して日光を受けて居る。樹皮の剝離して下よりはね上つて居る所は雄雞の頸の羽毛を逆立した様で一偉觀である。

g. 樟樹 *Cinnamomum camphora*

勅使井の所に最も太いのある、恐らく林中第一位の太さであらう。

h. ゆづりは *Daphniphyllum macropodum*.

仰ぎ見る程高くその樹頂の一部は矢張り森の上層に出て居る。細長い葉の中には、かくれみの様に先の方が一つ乃至二つの小さい切れ込んだものもある。

i. こばんもちのき *Elaeocarpus japonicus*.

多くはないが巨大なのが人目を引く。

j. みみつばへ *Symplocos glauca*

數間の高さになり特異の果實を澤山つけて居る、神殿の裏にあるのが最大であらう。細長いすつきりした葉を澤山つけて居るのは見るからに氣持のよい木である、一丈位の高さのものなら林中到る所に生ひてゐる。

k. うねびは *Fatoua erecta*

神域の外側日當りのよい所には澤山あるが、神殿の裏にあるのは高さ二丈餘に達し葉も薄く尺餘に伸びたのを繁らせて居るのは森の景を一層引立たせて見える。

くわがつゆ *Vaneria cochinchinensis* var. *perontogea*

これは灌木で、拇指大の莖が二米足らずに細長くのびて居る。樹相特に葉に趣がある。林中に數本見當つたのみであつた。

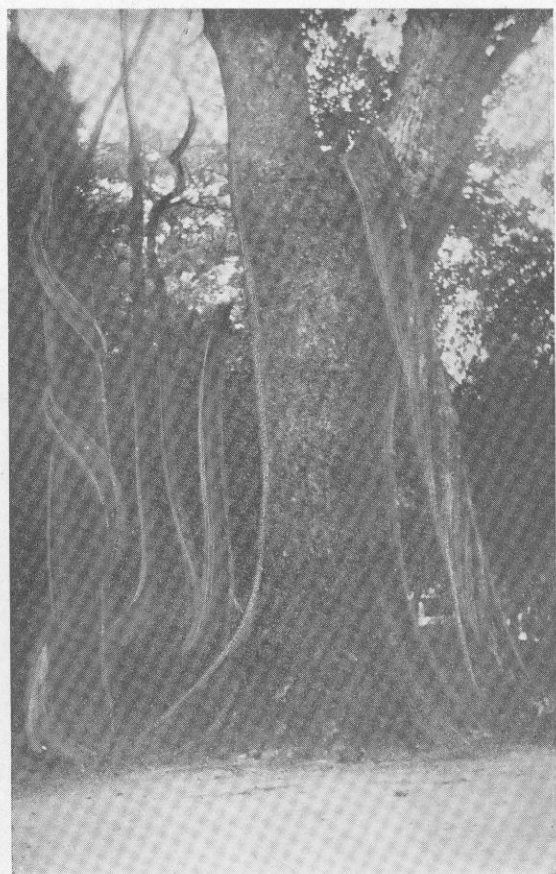
終りに此の調査に當り便宜を供與せられた當社司清原正彦氏、縣史蹟名勝天然紀念物主任川上市太郎氏及び山田村長の各位に謝意を表す。

筑前春日神社の社叢

樟、藤の巨樹老株
榊、センリヤウの群落



第二圖 春日神社の神木（大樟の群生と藤の纏繞）



第三圖 春日神社の大藤

筑前春日神社の社叢

調査委員 山崎又雄

一、所在地

福岡縣筑紫郡春日村大字春日にあり。

二、位置

福岡市の東南約一〇粁。

鹿兒島本線雜餉隈驛より南二五粁。

九州鐵道急行電車春日原驛より南一八粁。

三、春日神社の縁起舊記文獻による昔の神苑樹相

神社の御縁起を尋ねれば、齊明天皇七年（一三三二年）九州御下向の時、中大兄皇子は大和の奈良春日大明神をこの地に勸請せられ、奈良の三笠山を模し、御前なる池は鶴龜の形を表はし、萬代不易の相をあらはし、反橋高くかかれり、其影池に映じ、池のめぐりには古松枝をつらね、白藤紫藤はひ纏はり、常盤の松も春ごとに千代萬色を爭ひ、藤の鳥居ことにいちじるく、猿澤の池御宮の左右にあり、御拔川いさぎよく御宮の前を南北に流れ汚を拔ふ。

春日山より遠望するに、北に春日野（今の春日原）廣く三笠の森猶遙に望めり。（三笠の森は大野村宇山田にあり）

神苑の神木の葉をだにおしみ給ふなれば、古より此御山にて木を伐る事はいふに及ばず落葉を拾ふ人もなければ分け入るべき道もなし。

かく恭しき御宮所にて神威も益々嚴かなりしが、天正の頃薩摩の島津氏豊臣秀吉に叛き岩屋城主高橋紹運と屢々戦ひて春日神社も炎上し神域も狭められ、其後神職も多くやめて農民となれり。

慶長五年（三六〇年）黒田長政入國せられ、黒田美作の所領となり、神を敬ひ神殿を補修し、寶永七年には石の鳥居を建立せらる。元祿の頃までは境内も廣く樹木も多かりしことは貝原益軒著筑前續風土記に春日神社を祭れる故に村の名も春日といひ、社は林の中にあり、境内廣く、社前に池あり、林木茂り殊に喬木あり大なる藤多し、春花の盛には遊覽するに堪たりとあり。

神木の樟は一坐の株根より叢生し其周圍八丈九尺に達し、其外二丈餘の樟十數本又目通り四尺の大藤數十本ある如きは他の社に其比を見ず。

藤の鳥居は石門の内にありし由なるも今はなし、奈良の春日神社に往古藤の鳥居ありし故に此處にもこれを模して植えられたるものなり。かく藤の多きは藤原氏の御祖先天津兒屋根命を祭られたる春日神社にて藤原氏の藤を取りたるなるべし。

太宰府廳の司等には藤原氏多く、又都より來れる人々なれば太宰府に近きこの地に春日神社を祭り參拜して京師を偲ばれしなるべし。

四、現在。の神苑

今も神苑廣く千三百五十坪もありて社領の山林も亦廣し、猿澤の池は埋められて今はなし、老

樹巨木多く鬱蒼と茂り、山鳩、鶉、鶉、四十雀、繡眼兒等の諸鳥は枝間に囀り、廣大なる庭園は掃き清められたるは一層神域の嚴かなるを覺ゆ殊に樟の巨木多く藤蔓の纏絡するもの多し。

〔樟〕 十株以上ありていづれも目通り幹圍五米位のものにて大なるは六米に達するものもあり、いづれも古木にて千餘年を経たるものもあり、神木と稱するは中央階段の右にある大樟の五株集り生ずるものにて北の二株は同じ根より生ずその根廻り二十米あり。

〔イチキガシ〕 庭園に十一株、山林には多數あり皆大木なり、幹圍二乃至三米あり。

〔榊〕 神苑に十數本あり、幹圍一米以上のもの五本あり最大なる一八米あり。

〔藤〕 十六株あり、最大なるは幹圍一八米最小なるものにて〇六米あり、クスノキ、クロガネモチ、モクコク、エノキ、イチキガシ等に纏繞し、高さ十數米に達し自然のままに生長し、枝梢の間に擴がり高くかゝりて仰がざれば見るを得ず、いづれも古株のみにて根部は半ば枯れて僅に残れる幹皮にて生存するものあれど、枝葉は割合に勢よく繁延せり、花穂も長く垂れて美觀なり。藤の名所といふべし。

〔棟〕 二株あり、幹圍二四米。

〔ムクノキ〕 幹圍一二米。

〔ユヅリハ〕 同 一七米。

〔モクセ、イ〕 同 一二米。

〔クロマツ〕 同 三六米。

〔イヌグス〕 同 一五米。

其他ナナミノキ、クロガネモチ、アラカシ、サンゴジュ、ヤブツバキ、スギ、マキ、イテフ等あり。

五、現在 の 社 叢

神社の背後の山林は三笠山に模したる所謂春日山にして、自然の森林より樹木は暖帯性の植物にて、本州の中南部より四國、九州、沖縄、臺灣に分布する即本邦南帯に屬する植物なり。樹種に富み山岳にもあらざる丘陵地にして福岡市附近としては珍らしき樹相を呈す。

社叢の普通樹木を列舉すれば左の如し。

裸子植物

まつ科 アカマツ、クロマツ

被子植物

雙子葉植物

ちやらん科 センリヤウ

やまもも科 ヤマモモ

殻斗科 シリブカガシ、イチキガシ、アラカシ、ツブラシヒ

にれ科 ムクノキ、エノキ

くは科 イヌビハ、オホイタビ

もくれん科 サネカヅラ

くすのき科 クスノキ、イヌガシ

いばら科 ザイフリボク、フユイチゴ

單子葉植物

禾本科

メダケ

ヘンルウダ科

ミヤマシキミ

たかとうだい科

アカメガシハ

うるし科

フシノキ、ヤマハゼ

もちのき科

イヌツゲ、ナナメノキ、クロガネモチ

つばき科

ヒサカキ、サカキ、モクコク、チャ、ヤブツバキ

いいざり科

クスドイゲ

ぐみ科

アキグミ、ツルグミ、ナハシログミ

うこぎ科

カクレミノ、キヅタ

しやくなげ科

シヤシヤンボ、ネヂキ

やぶかうじ科

マンリヤウ、カラタチバナ、ヤブカウジ、イツセンリヤウ

はひのき科

ミ、ミズバヒ、クロギ、ハヒノキ、カンザブラウノキ

ひひらぎ科

ネズミモチ

けふちくたう科

サカキカヅラ、テイカカヅラ

くまつづら科

ムラサキシキブ

あかね科

アリドホシ、ジユズネノキ、クチナシ

すひかづら科

サンゴジユ、ガマズミ、ハクサンボク

アカマツ、クロマツ、シヒ、イチキガシ、アラカシ、クスノキ、ヤマモモ、ナミノキ、クロガネモチ、サカキ、モクコク、ヤブツバキ等の喬木生茂り、其樹下にセンリヤウ、ミヤマシキミ、マンリヤウ、カラダチバナ、ヤブカウジ、ハクサンボク、ガマズミ、アリドホシ、ジュズネノキ、クチナシ、イヅセンリヤウ、ムラサキシキブ等の灌木ありて紅色、紫色等の果實を結び、其間にサネカヅラ、テイカカヅラ、サカキカヅラ、ツルグミ等の蔓生植物は喬木に蔓延す。ミヤマウヅラ、コ克蘭等もあり、神社の裏の崖にはミズスギの群生せる中にサカキの幼苗夥しく自生し居れり。

この森林内にて特筆大書すべきはサカキ(榊)の無數に自生せることにて、大なるは幹圍一米以上の喬木にして其數多く、其果實は落ちて發芽し大小無數の株を生ぜり。次にはセンリヤウ、草珊瑚の自生多く、樹下に紅果を綠葉の間に綴りて美觀を呈するは福岡近郷に於てかゝるセンリヤウの群落は決して他に見出されず。

六、結

び

當社叢の特有はサカキとセンリヤウの群落にあり、然るにその誇りとするセンリヤウの群も近時これを生花として坊間に販賣愛用せらるるを以て無斷に持去るもの多くなり、今や幼株のみ加之も數も少なくなり果實の熟せるもの頗に減少し、折角の社叢の美觀も昔日の面影なく自然の美を取り去られつゝあり。(昭和二年十二月初めてその美觀に接したるより年々逐次減少しつゝあるを認む)

サカキも近頃神事愈々多くなり使用益々多くなり、敬神の念として使用の多くなるは喜ぶべきことなるも亂伐は慎むべきことにて、隨分巨大なるものも切りて供すことなきにあらずといふ。其の他の樹木も古へは木を伐る事はいふに及ばず、落葉さへも拾ふ人もなければ分け入る道

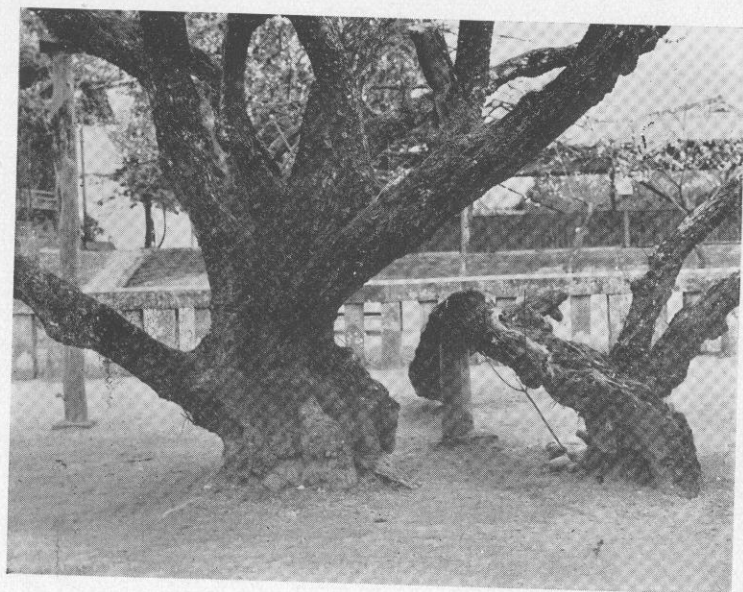
もなかりしといふに引換へ、今は樹木をも伐採することなしとせず、根さらへ間伐さへも行はれるが如き有様なれば、この自然林の社叢も次第に變化し荒らされつゝあるは誠に遺憾の次第なり。

この春日神社の神苑に於ける樟の巨樹、藤の古株と社叢に於ける榊の喬木とセンリヤウの群落とは天然紀念物として保存保護すべき充分の價值ありと信ず。神苑の樹木は神社當局の保護にて充分なるも、社叢に至りては早く適當の保護を加へざれば自然林は毀損され、センリヤウの如きは絶滅の悲運に遭遇すること明なり。サカキに於ても同運命にあり、其他の植物に於ても充分の保護を加へて千古の斧鉞を免れ來れる植物を保存し、社叢を有意義に神ながらの道にそい奉り、奈良の春日神社のナギの自然林と同じく筑紫の春日神社の社叢もサカキとセンリヤウの自然林を天然紀念物に加へて永久に保存せられんことを祈る。

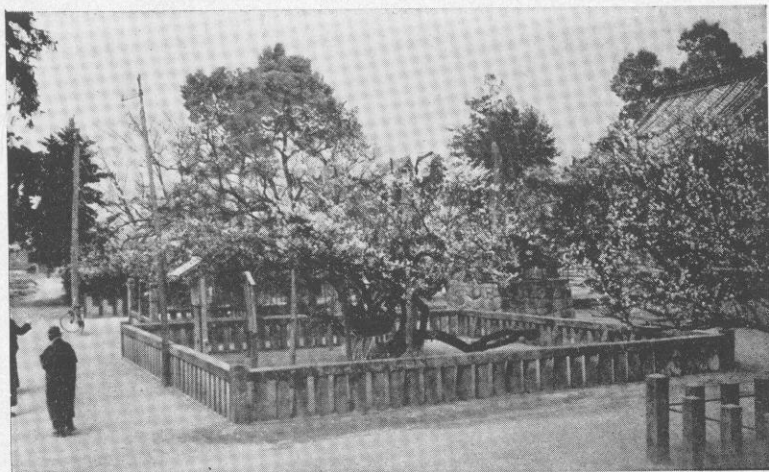
終りに此調査を爲すに當りて、社司星野清丸氏の御厚情に對し深謝の意を表す。

筑後宮陣村將軍梅の調査

宮陣村將軍梅（其二）



宮陣村將軍梅（其二）



4



5



6

筑後宮陣村將軍梅の調査

調査委員 額 額 理 一 郎

一 前 書 き

三井郡宮陣村宮陣神社境内に將軍梅の名によつて廣く人口に膾炙する老梅樹がある。後醍醐天皇の皇子一品式部卿征西將軍懷良親王御手植の木と言傳へられ、文化年間久留米有馬藩儒樺島蓮溪「宮陣梅記」を作つて之を世に紹介せし以來、勤王憂國の志士の注意するところとなり、本樹を圍りて地方人心の感奮興起するところ鬱然たるものがある。

本樹を保護して往年追懷の資となし、其附近に征西將軍の尊靈を奉祀して御遺徳を顯彰せんと企がその當然の歸趨として地方の有志及び廣く九州志士の間に擡頭し、明治初頭以來幾多の紆餘曲折を経て今日の宮陣神社御鎮座となつた。その御主神は後征西將軍懷良親王で、相殿神として前征西將軍懷良親王を合祀し奉つてある。懷良親王の御尊靈は別に熊本縣八代町に官幣中社八代宮として奉祀してあり、同宮には良成親王の御靈をも配祀してある。

以上の宮陣神社及び將軍梅に關する言説は、主として同社社掌田中九八郎氏の編纂にかゝる「宮陣神社縁起」から採粹したもので、一層詳細な來歴を知らんとする人士は同誌に據りたい。

本調査員は福岡縣の委嘱により、天然紀念物調査の立場から昭和十三年三月十五日及び同年

五月二十日の兩回に亘つて該將軍梅を調査する事になつたが、調査當日は九大農學部植物學教室小島均助教授及び玉井虎太郎副手に一方ならぬ援助を受けた。また調査の都度社掌田中九八郎氏は極めて眞摯な態度を以て調査の便宜を與へられ、其他筑後史談會幹事黒岩萬次郎氏、宮陣村有力者宮崎久次、花田伍平、中川庄太郎、原貞藏、宮崎音次郎、吉田次郎八の諸氏が調査に立合はれた。此機會に於て特に之を記して諸氏の好意を多謝する。

二 梅 樹 の 現 況

將軍梅は宮陣神社境内中央部に東西一〇三五米、南北九七〇米の方形をなせる石造玉垣を以て圍まれた平坦地に所在し、その中央部に約〇九米を隔て、東西に並立する大小二株の梅樹をなしてゐる。其中東なる小株は其主幹が現在枯死腐朽して北方へ倒れ、その基部から二本の新支幹が伸びて相當に旺盛な發育を遂げてゐる。(圖版寫眞第二參照)

西なる大株は基部は一幹となつてゐるが、基部間際に於て複叉狀分岐をなし、九本の相當大なる支幹となつて四方に向つて伸び、互に枝を交へて全體として一大枝叢をなしてゐる。此株は現在の將軍梅の主要部をなし、枝葉によつて廣い空間を占有し、ために東株に生じてゐる生存幹は東に向つて枝を擴げ、西株の枝に壓倒され氣味である。

西株東株何れも八重咲の紅梅であつて、あらゆる點に於て互に類似の性質を示し、もと／＼同一株から分蘖分離したものと解せられ、兩株とも往時の親木から蘖生したものだと言はれてゐるのは一應首肯される。何れも幹から「ヒコバエ」を簇生させる傾向著しく、幹の基部附近から出る藥生新芽は努めて之を除去し、以て幹枝の上部に於ける活力を養ふ方針を以て手當が行届いて

ゐるため、樹冠部は比較的旺盛な分枝着花状態を示してゐる（岡版寫眞第一參照）。けれども分幹上部の可なり太い枝の切斷されて居るもの少なからず、之は近來害虫其他不明の原因によつて樹勢衰へ、樹梢の枯死を來したためであり（岡版寫眞第三參照）。遺憾な事と言はねばならぬ。田中社掌の言によれば、現在の神社社殿の建立されし以前には、梅樹の前に比較的深い溜池があつて、梅樹生育地の排水は良好であつたが、現在は排水不良であつて、樹勢を衰へさせる一ツの大きな原因になつてゐるらしいと。現在では東株の腐朽幹のみならず、兩樹の生存幹にして菌害及び蟻害を受けて腐損してゐる個所少なからず、加ふるに介殼虫の害ありて、樹勢衰弱に拍車をかけてゐるやうである。

なほ田中社掌の言によれば、枝は下方に垂れる性があり、之が地に接すると發根して獨立の木となる癖があるとの事である。之は現在の手入れの行届いた状態では實證を得る由はなかつたが、世に臥龍梅の名を附せられてゐる梅樹に此種の性質の存するを見れば、之も恐らく事實なるべく、なほ横臥せる枝に根を生じて獨立木となる事實もまた臥龍梅に普通に見ることである。さればこの將軍梅は臥龍梅的な性質を帶び、藥生的獨立木を生ずる傾向顯著なるものの如く、隨つて現存する東西兩株が往時の親木からのヒコバエとして分生したものと云ひ傳へられてゐる事は、信すべき理由がある譯である。現在本樹の支幹には支柱を何本も立てて枝の下垂を支へ、以て樹相を整へるに努めてあるのを見ると、之を自然のまゝ放任するときは、枝が匍匐して樹相を變へて臥龍梅的のものとなる虞があるやうである。なほ現在樹冠部に旺盛に生じつゝある新枝は、舊枝の下側から出る傾向著しいのを見るのであり、之も本樹の臥龍梅的な分藥性を物語る一

事とも見られる。

なほ聞くところによると、本樹は果實を着ける事少く、而も出来た果實に畸形なものが少ないとの事であるが、之は本樹が八重咲である事に伴ふ當然な結果であらう。其他本樹は普通の梅に比して花期が遅いと言はれてゐるが、之も八重咲のものに普通な事であつて、特に異とすべき事ではないであらう。三月十五日調査のため現地を訪ふた時には、満開に入る少し前の状態であつた。(圖版寫眞第一參照)

三月十五日花期に於ける調査當時の状態では、東の小株の生存幹は樹形寧ろ細長貧弱の感を呈してゐたが、小枝の着花状態は割合に良好であり、西の大株では、西寄りの幹枝のみ着花旺盛で東寄りの幹枝即ち將軍梅全樹叢の中央最高樹冠部の着花貧弱で、枯死幹の切斷部のみ徒らに目立つて、樹勢の衰退を憂へしめる事少なからぬものがあり(圖版寫眞第三、第四參照)、小枝に着生する介殼虫の除去及び蘖生枝の合理的整理を行ふことによつて、枝の上部の愛護方を關係者諸氏に慫慂するところがあつたが、樹勢の良否は着葉状態によつて判斷するに如くはないので、越えて五月二十日樹勢視察のため再び現地を訪ふ事とした。

この着葉當時の状況は圖版寫眞第五、第六によつて見られる如く、甚だ良好にて、樹勢なほ旺盛なるを思はしめられる。随つて本樹は害虫の除去蘖生新芽の整理等の處致よろしきを得れば、樹勢衰退の挽回、樹相の保持等は比較的容易なるものの如く、更に土壤過濕の被害如何に就て十分な注意を拂ひ、必要な對策を講ずる用意を以てすれば、本樹保護の完璧を期する事が出来るであらう。なほ調査當時に果實の着生せるものは極めて少數であつた。

三、梅樹の大きさ其他の測定

現在の將軍梅は既記の如く約〇九米を隔てて東西に並立する大小二株からなり、互に枝を交へて遠望では一株から成る如き纏つた一つの樹相を成してゐる。樹冠の廣がりには東西に長く南北に短かい。即ち全體の枝張りは東西一三五米南北一〇四米であつて、樹高六一米である。この樹高は西の大株の中央や、東寄りの最も高い枝の高さであつて、全樹叢から見ても略中央に位してゐる。

西の大株は既記の如く基部近くから分散する九本の支幹から成り、最基部は一基の共同幹をなしてゐるが、之は寧ろ甲乙兩蘖生株の合着したもののやうである。この甲乙兩株は地上〇七米の所で南北に分離してゐるのであり、今假に南側のを甲株、北側のを乙株と稱する事とする。この甲乙兩株の共通幹は地上約〇二米のところに多數の瘤狀隆起部を持つのであるが、之は蘖生新枝の除去に伴つて出來た癒合組織瘤と見るべきもので、此の種の瘤狀隆起物は幹や枝の隨所に見るのであり、以て本樹の分蘖性大なるを物語つてゐる。

甲乙兩株の共通幹の太さは地上〇一五米のところ、周圍二三五米、地上〇二米瘤の多いところで周圍二五五米、甲株は地上〇六五米の所で、太さ周圍〇六米の第一支幹を西方に分派して幾分細くなつてゐる。この第一支幹を分派した後に於ける甲乙兩株の共通幹の太さは、地上〇六五米のところ、再び周圍二三五米を算する。

甲(南株)は乙株と分離したのち周圍二三五米の太さで上向し、地上〇八米のところ、南方へ太さ周圍〇六六米及び〇五五米の第二、第三、二本の支幹を出し、主幹は周圍一一〇米の太さを維持

して上向し、地上一〇米のところ、東寄りに上向する太さ周囲〇六五米の第四支幹を分派し、地上一三米の個所に至つて北寄り及び南寄りに上向する太さ周囲〇五二米及び〇六米の第五及び第六支幹に分岐し、結局甲南株は六本の略同じ太さの支幹に分岐して、本樹の主要部を形成してゐる。

一方乙(北)株は甲株と分離してから周囲一三五米の太さで上向し、地上一〇米のところ、南寄りに上向する太さ周囲〇四二米の第一支幹を出し、主幹は周囲一二二米の太さを持つて上向し、地上一三〇米のところ、太さ周囲〇六六米及び〇八五米の第二及び第三支幹に分岐し、前者は東寄りに後者は北寄りに上向して本樹の北西部を占居し、かくて甲株は合計六本、乙株は合計三本、總計九本の支幹を以て西の大株を成立せしめてゐる。

一方東の小株は既記の如く腐朽横臥してゐる主幹と、之から蘖生したものと思はれる二本の生存支幹とから成り、地表部では全體が合着して一基となつてゐる。この部の太さは周囲一五米、地上〇一五米のところ、腐朽株と生活株とに二分し、腐朽株は太さ周囲〇七五米、生活株は太さ周囲〇七〇米を算する。生活株は地上〇四五米のところ、太さ周囲〇五七米及び〇四二米の第一及び第二支幹に別れ、兩支幹共東に斜向してゐる。腐朽株は基部から急に曲つて北に向つて低く弧狀を書いて横たはり、長さ三六五米にして太さ周囲〇五米、〇四八米、〇三〇米の三枝に分岐し、其中の最小枝が地中に突入して幹を支へ、他の二枝は長さ一七米及一六米のところ、で切斷されてゐる。弧狀をなして横臥してゐる幹の基部から長さ二六米の個所で太さ周囲〇六七米を算し、この部に短い支柱が立てられて幹が支へられてゐる。この幹は全體が腐朽してゐるのだから、

遠からず消滅の運命にあるものである。

次に本樹の花は八重咲であること既述の通りで、花瓣及び雄蕊の数は重瓣花としても多い方で、咲いた有様は豊満な感を與へる。任意に採取した十花に就て試みに調査したところによると、萼片は五個のもの八花、六個のもの二花で、花瓣の数は十七瓣から二十四瓣の間に變異し、平均二十瓣であり、雄蕊は四十九本から八十一本の間に變異し、平均七〇五本であり、雌蕊は總て一本であつた。

四、結

辭

以上將軍梅の觀察及び調査の結果の有りのまゝを述べたところによると、本樹は梅樹としては藥生能の甚だ旺盛な樹種に屬し、現在では樹勢衰退の徴を見ると雖も、適常な處致によつて愛護よろしきを得れば、保護保存は比較的容易であらう。併し臥龍梅的な傾向が多分にあるのだから、保護上に不斷の人爲を加へないと、匍匐性を發揮して、現在の見事な樹相を損ずる虞があるから、此點注意を要する。

本樹は將軍梅の名によつて歴史的意味を持つと同時に、勤王精神の興起涵養の資となつてゐる點に於て、國家的名木として愛護し之を後世に傳へる價值大なるものがある。本樹は幸に旺盛な藥生能に恵まれて居り、保存梅樹としては極めて好都合であるから、天然紀念物としてその使命を十分に果させることが出来るであらう。なほ本樹の生育地が現在神社境内であるのは、本樹の保護及び保存上、好條件に恵まれてゐる譯である。

圖版寫眞説明

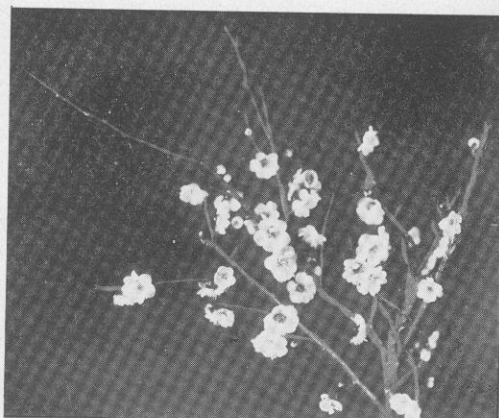
- 一、西の大株の一部の枝の出方及び花の着生状態。
- 二、西の大株及び東の小株の基部の状态。
- 三、開花期(三月十五日)に於ける南方より見た樹相全景。
- 四、同上東南より見た樹相全景。
- 五、着葉期(五月二十日)に於ける南方より見た樹相全景。
- 六、同上一部の廓大。

筑前須恵村ザロンウメの調査

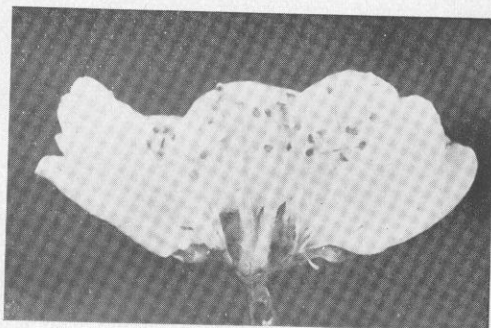
1



2



3



4



5



梅 論 坐 村 惠 須

筑前須恵村ザロンウメの調査

調査委員 瀨 理 一 郎
補助員 玉 井 虎 太 郎

一 前 書 き

ザロンウメ(坐論梅)は一花に數個の雌蕊を有し、従つて花後に一花から數個の果實を結ぶを以てその特徴とする。この種の梅は廣く全国各地に存することが知られ、福岡縣下に於ても二三所在地在が知られて居り、珍中の珍とするものではないが、その特異なる形質は植物形態學上の貴重なる參考資料となるものであり、また必ずしもその所在地殊にその老樹の生存地は多いのでなく、従つて資料保存上是等の老樹の所在を記録し、之を愛護保存することは無意義ではないであらう。

本調査員は曩に縣下宗像郡西鄉村西法寺に所在するザロンウメを調査し、之を報告するところがあつたが(福岡縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書第五輯昭和五年三月參照)、同所には八重咲紅梅の坐論梅の相當の老樹一本の外に、三本の坐論梅若木があり、何れも八重咲であるが、うち二本は紅梅他の一本は白梅である。

今度調査の糟屋郡須恵村の坐論梅は同村大字須恵三一八番地個人所有の屋敷内に在り、添田

七次郎氏の所有するところのものであつて、白梅の可なりの老樹である。本樹はその珍奇な特徴によつて早くから郷黨に關心を持たれてゐたものの如く、昭和六年二月八日東京文書堂發行、石田傳吉「梅のもつ興國性」なる小冊子中、珍らしい梅の巨木なる題下に、本樹の性質來歴等が紹介されてゐる。その考證の確否は不明であるが、記事中の要點を採録して見ると、

こゝに天下に二本とない珍らしい梅の木がある。福岡縣粕屋郡須恵村大字須恵、天神畑の天満宮のほとりにある幹の周圍三尺位の梅の木がそれで……この梅の木の花瓣は二十五あり、普通一つしかない雌蕊がこの梅には五つ宛ある……この梅の木は三十有餘年を経た老木なので……實を結ぶころになると一つの花のあとに五つ宛丁度普通の梅の花の様に實を結ぶ。この梅の樹の持主は同村の藥師商添田七次郎さんで……昔から同村の共有であつた天満宮が明治維新のころ天満宮の資格なしとて同村に之が處分方を命ぜられた。時偶天満宮の信者であつた七次郎さんの實父利八氏が氏神様を取毀すのはもつたいないといふので、自分が天満宮を買ひ受けてその儘元通り村の氏神様として祀つてゐた……古からのしきたりで近郷のものは梅のさねをこの天満宮のほとりに捨てゝゐた……春になるとそのさねから一齊に嫩葉が芽ばへて來るので、七次郎さんは毎年それを刈取る仕末に手を焼いてゐたが、その内社のそばに一本すんなりと形のいい梅の若木が芽ばへてゐたので、氏は無心にそれだけ残して置いた。この嫩葉の梅の木が後年二十五の花瓣、五つの實を結ぶ世にも珍らしい梅の木と生育したもので、その原種は何處から來たものか知らない……なほ此の梅は今までの道の専門家の手で接木や蕃殖を幾度もやつたが接木や蕃殖に成功しても結實には不成功で、普通の梅花と何等異なるものが出來ず、同種のは絶対に出來ないといふことである。

昭和十一年十月二十七日附け須恵村長田原篤氏より、縣學務部長宛本樹調査方の申請があり、

その申請書には梅樹一本、目通周囲三尺、高さ一丈五尺、特性花瓣二十五、白色、花一個に五個結實し、香氣高し、開花期毎年二月中旬とあり。之が調査方を依頼され、翌昭和十二年二月十六日玉井虎太郎調査補助員として現地に向ひ開花期に於ける調査を行ひ、更に結實期に於て追加調査を行ふ豫定であつたが、同年は結實極めて不良との通信を得たので之を延期し、翌昭和十三年五月二十日額嶺玉井兩名現地に出張し、結實期に於ける状態を調査した。

本調査に際しては、須恵村長田原篤氏、所有者添田七次郎氏、本樹敷地の昭和十三年現在居住者松本熊一氏、其他村の有志數氏から一方ならぬ好意を寄せられた。之を特に茲に附記して感謝の意を表したい。

二、梅 樹 の 調 査

問題の梅樹は須恵村大字須恵三一八番地添田七次郎氏宅の南庭一畝歩内外の空地に祀られてある天満宮小祠と母屋との間に在り（圖版寫眞第一参照）。地上一〇糎のところにて樹幹基部の太さ周圍一二三米、地上四〇糎のところで周圍一三〇米、基部近くで多數の枝に分岐するも、全體としての樹形は寧ろ立枝形で、樹高五〇米を算し、枝張りは東西五三〇米、南北五二〇米、昭和十二年二月十六日調査當時の開花状態は、老梅樹としては普通の程度であつたが、聞くところによれば、同年は例年に比して花着き少く、例年は今少し見事な開花状態を示すとの事であつた。圖版寫眞第二は花着きの割合に多い枝を撮影したものである。

本樹の分岐状態及びその大きさに就て詳記すると、基部の太さは前記の如く地上一〇糎のところ、周圍一二三糎、地上四〇糎のところ、周圍一三〇糎、此部にて甲乙二大支幹に分岐し、甲支幹は太さ周圍九五

纏、分岐點から約五〇纏にして、周圍五五纏五〇纏、一五纏の三枝に分岐、その中の最小枝は枯死し、他の二枝は上向して多數の枝を出し、本樹の主要部をなしてゐる。一方乙支幹は太さ周圍六五纏、分岐點から約一〇纏のところで相當に太い第一枝を分派し、主幹は更に上向すること二〇纏にして、四本の相當大なる枝に分岐してゐる。

花は白色なるも花瓣の先端僅かに紅色を帯びたものがあり、芳香高き方である。任意に採取した五九花に就て調査したところによると、萼片は多くは五片で六片のものを混じ、平均五三片であり、花瓣は一五乃至二七瓣の間に變異し、平均一七七瓣を算し、雄藥は六七乃至八八本の間に變異し、平均七五五本、雌藥は五九花の中五本のもの三花、四本のもの二六花、三本のもの二一花、二本のもの六花、一本のもの三花で、平均三三本となつてゐる。花瓣にして葯の痕跡を有し、雄藥との中間型をなすもの稀でなく、この種の花瓣を持つもの五九花の中二一花に及び、一花に一乃至三個を持つてゐた。

結實は調査を行つた昭和十二年及び十三年は何れも不良の方であつたが、聞くところによると、昭和十一年には約二斗の收穫があり、味は普通の梅と變りなく、鹽漬即ち梅干として食用に供し、信仰上から多く地方の希望者に分與しつゝありとの事である。一花の結實數は一花中の雌藥數に支配される外、果實生長中の競争によつて一部の落果を見るのが當然である。随つて一花に五個の果實を結ぶものは僅少である事が想像されるが、兎に角一花からの結實は一個乃至五個と見られ、坐論梅としての主要な特徴を十分發揮してゐる。

昭和十三年五月二十日の調査當時の結實狀態は、前記の如く不良であつたが、寫眞(圖版寫眞第四)の

如き二個乃至三個の良好な發育を遂げた果實が一花から生じてゐるのが少くなかつた。果實は一般に幾分小形で、一花から一果を生じたものに比して、一花からより多數の果實を生じたもの程、より小形となる傾向が歴然と見えてゐるが、之は養分配給の關係から來る當然な事であらう。五月の結實期即ち着葉期に於ける本樹の狀態は、蚜虫の寄着甚だしく、加ふるに幹に腐朽の個所が少くなく、本樹保護上の注意が行届いてゐない憾みがあつたが、葉の着生狀態は割合に良好であつて、この際腐朽部の手當、害虫の驅除に相當に注意を拂へば、樹勢を挽回させ、着花結果を良好ならしめる事は難くないであらう。

三、結

辭

本樹は前書きに記した如く、縣下に必ずしもその例が多くない坐論梅の一種で、地方に於ける天然物に對する信仰上の問題は別とするも、植物形態學上好個の參考資料であつて、之を保護保存する事は、少くとも地方的に見て有意義なことである。なほ本樹調査に立合つた關係者の言によれば、本樹の枝は接木が極めて困難で、接木による繁殖に成功したものなく、又種子を蒔いて生へたものは何れも普通の梅であつて、坐論梅を生じないとの事であるが、これは植物學的に見て重要な研究事項で、責任ある試験を行つて、其眞僞を明かにしておく必要があるであらう。

昭和十三年五月現在の狀況は、前記の如く害虫害菌の被害少なからず、本樹の傍に祀られた天満宮祠の南側及び西側には最近に植込まれたらしい庭木が密生して、梅樹への日光照射を不良ならしめてゐる虞があるようである（圖版寫眞第五參照）。本樹保護を全くせんためには、これ等の關係事項に就て細心の注意を拂ひ、處致に遺憾なきを期せねばならぬであらう。

圖版寫眞說明

一、昭和十二年二月十六日現在に於ける梅樹の狀況。傍に立てるは所有者添田七次郎氏。右に天満宮の小祠。左に母屋の屋根を見る。

二、同日に於ける梅樹の枝の一部の着花狀態。

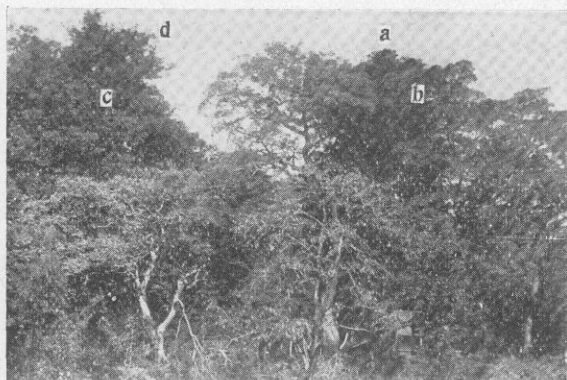
三、雌藥四本を有する花の解剖圖(廓大)。

四、昭和十三年五月二十日に於ける枝の一部の結實狀態。

五、同日に於ける梅樹附近の現狀。マキの植込みを隔てて梅樹の着葉時狀態を見る。左に母屋の屋根、中央近くに天満宮祠の屋根を見る。

筑前上西郷村舍利藏觀音境内ナギの巨樹

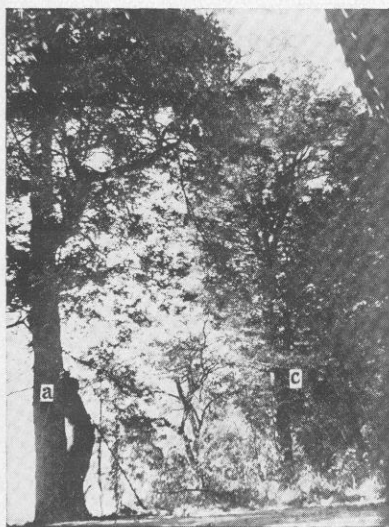
1



2



4



3



上西郷村舍利藏觀音境内ナギの巨樹
(説明は本文中にある)

筑前上西鄉村舍利藏觀音境内ナギの巨樹

調査員 瀨 理 一郎

補助員 玉 井 虎 太郎

縣下宗像郡上西鄉村は郡の南隅糟屋郡に接する地域を占め、舍利藏區はその東南隅に位置する高臺地を成し、東に山岳を負ひ、西方玄海の展望雄大を極める景勝の地であつて、山裾性丘陵と凹谷地とからなる複雑な地表彫刻によつて一種特有な幽玄境となつてゐる。

此地には曾て舍利山觀音院勝寶寺なる古刹があつて靈域として知られたところであつたが、其後兵火のために數々の堂宇寺坊は烏有に歸し、現在存在する一小堂宇と形ばかりの鐘樓は其後の建立に成れるものとの事で、堂には十一面觀音を安置し、鐘樓には可なりの巨鐘を懸けてあるが、寺としての體裁を全く失つてゐる。勝寶寺の來歴は舍利藏區長北崎資三郎氏方に傳はる縁記一卷に記されて居り、重要な研究資料となつてゐる。

現在の堂宇敷地は大字舍利藏字水上三百三拾三番地官有地壹反五畝九步、東から西へ延びる一丘陵の南側面に南面する觀音堂宇前の廣場と、之を北から抱擁する林叢とから成り、この林叢は本調査の目的樹たるナギの外、イチキガシ、タブムクシ、ヒイス、ボダイジュ等の巨樹老木を交へて見事な社叢景觀を呈し（圖版第一圖参照）、比較的人爲の加はらない北九州模範的社叢の一として現

狀保存の價值十分なものである。

ナギの巨樹は境内に點在五樹を算し、何れも元氣旺盛で高く聳え、見事な樹相を示してゐる。勝實寺開基として傳へられる行基が手植の木と言ひ傳へられてゐるとの事なるも詳かでなく、何れにしてもこれだけのナギの巨樹は他に類少く、珍重するに足るものである。昭和十二年十一月十日各樹に就いて大きさその他を測定調査したところによると、

第一號樹(圖版中a樹) 調査當時果實を見ず、恐らく雄樹にて、堂宇前廣場の南端鐘樓の傍に在るもの(圖版第二圖第三圖及び第四圖a參照)主幹高く立ち、直立するイテフの如き樹相を呈し、二個所に相當大きな枝の切痕があつて腐蝕し初めてゐる。

地上一米の所にて幹の周廻 二一九〇米

樹 高 二二一〇〇米

第二號樹(圖版中b樹) 調査當時多數の成熟果實を着け雌樹。前記一號樹に接近して並立第二及び第三圖b參照)主幹高く立ち、分岐比較的多く、主幹の基部に巾一三纏長さ一〇〇纏に亘る枯死部を現はし、腐朽し初めてゐる。

地上一米のところで幹の周廻 二二三五米

樹 高 二二一〇〇米

第三號樹(圖版中c樹) 果實を見ず、恐らく雄樹。境内の西南隅林叢中に偏在し(第四圖c參照)主幹よく發達して高く聳え、所々にヒコバエ式な枝を分岐。生育地は斜面をなし、その上側へ境内整理の際に土寄せしたるため、主幹基部上側は〇五米強だけ埋没してゐる。下側最基部の露出部には大小二個の空洞があり、大は長徑五五纏短徑四三纏の短橢圓形、小は徑二〇纏の圓形をなしてゐる。この大空洞は嘗ての主幹又

はヒコベエ式の側幹の切株の腐朽したものゝ如く、現在の外觀から見ると、只今の主幹は切斷された主幹から生じたヒコベエの生長したものであるかの如き觀を呈してゐる。

上側地上から一米のところ、
下側地上から一米のところ、
即ち上側では地表に近いところで幹の周囲 四、二〇米

樹 高 一、四・四〇米

第四號樹(圖版中d樹) 果實を見ず。恐らく雄樹。境内西部斜面林叢中にあり。その上側に近くタブの巨樹があつて、やゝ之に壓迫され氣味で、高く伸びてはゐるが、比較的下部から分岐が多く、樹相が亂れてゐる。其上巨枝の切斷された跡があり、その部に腐蝕の徴候を見る。

地上一米のところ、
樹 高 二、五五米

樹 高 二、五〇〇米

第五號樹 果實を見ず。恐らく雄樹。境内西北部斜面上部林叢中にあり、密林中で樹相の全貌を視ひ得ないが、分岐割合に多くて主幹の發達が良好でない。下部の枝が切除されて痕を残し、地上約一・五米の個所にある長徑二〇糎、短徑五糎の切口は腐朽し初めてゐる。

地上一米のところ、
樹 高 一、九八米

樹 高 一、八七七米

以上第一乃至第五號樹何れもナギとししては稀に見る巨樹で、現在のところ樹勢は何れも旺盛であるが、何れも既に露出腐朽部を持ち、それが多くは枝の切口に生じてゐるのを見ると、從來樹木保護上に何等の考慮が拂はれず、不用意な枝の切除のために禍根を残しつつある状態で、今

にして之が保護の對策を講じて置かないと、さしも元氣な樹勢も次第に衰微する事必然であらう。

ナギ(チカラシバ)は暖國産の裸子植物で、我國本州南部四國九州琉球臺灣に産し、マキと共にイチキ科マキ屬に屬する。雌雄異株で喬木性のものであるが、北九州の地に斯くの如き偉大な發達を遂げ、樹勢優秀な老巨樹を成してゐるのは珍とすべきに足るもので、學術上生きた標本としての貴重な存在である。随つて之が保護保存の方法を講じ、一には學術上に資し、二には地方郷土の持つ誇としての天然紀念物たらしめたいと思ふ。

なほ前にも一寸と言及したやうに、本觀音境内の林叢は我國暖國の模範的社叢としての價値があり、北及び東南に溜池を控へ、水濕關係良好なると同時に水源涵養上にも役立つ事、殊に境内一體が官有林である點などが、全林叢現狀保存の企圖を實行する上に有利な條件となるであらう。で出來得べくば當局及び郷土人士の力によつて、境内のナギの巨樹を全林叢と共に保存すべく適切な方策が講ぜられん事を希望したい。

終りに本調査に關し多大の便宜を與へられた上西鄉村助役水上茂氏及び舍利藏區長北崎資三郎氏に對し謝意を表する。

豐前求菩提山及其附近鳥類一班

調査委員

安

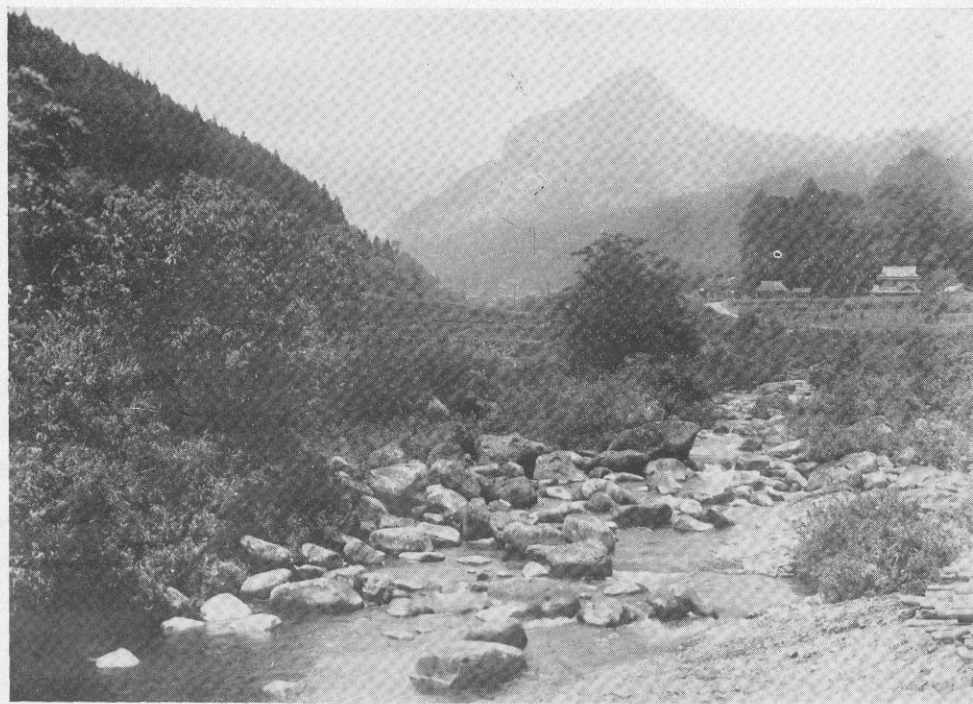
部

幸

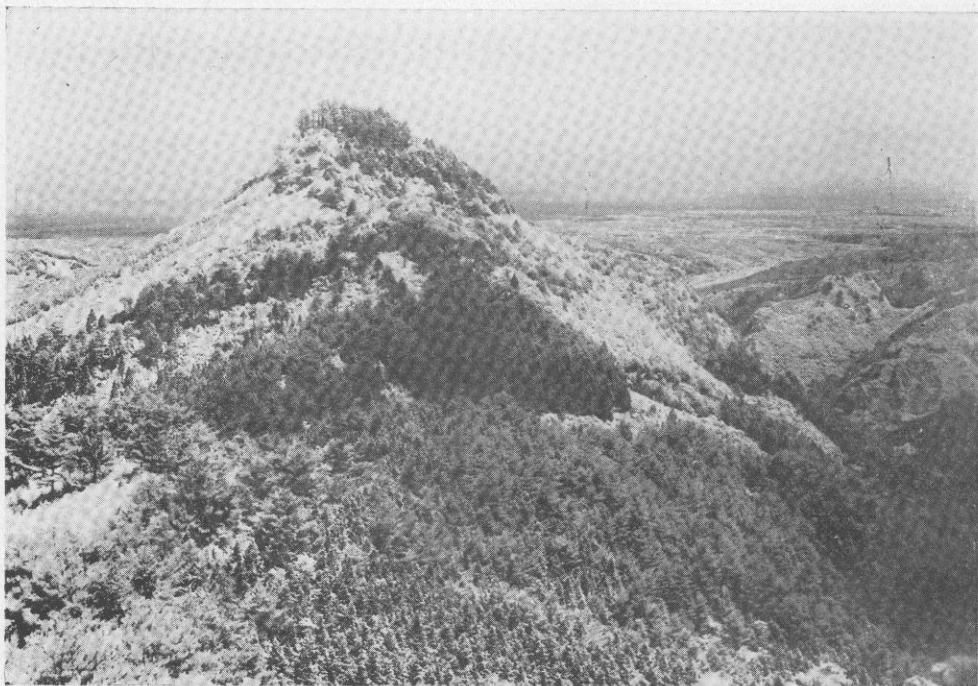
六



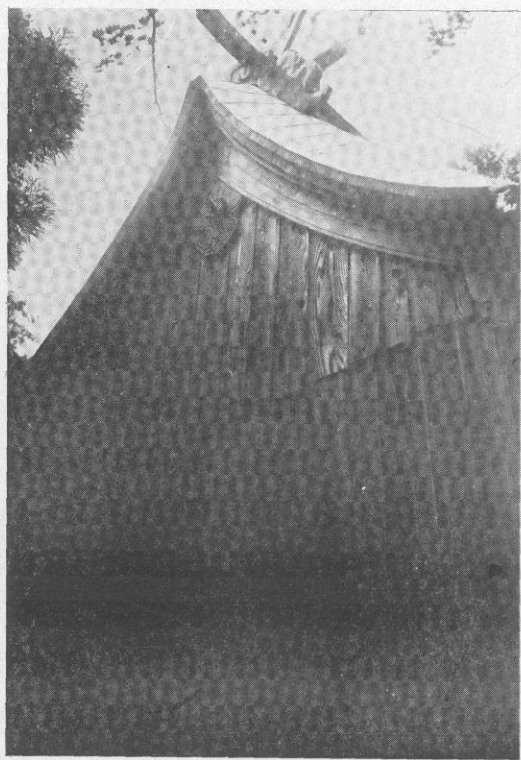
1 佐野岳より望みたる犬岳の全貌



2 篠瀬より見たる求菩提山と河鳥の棲む岩瀧川



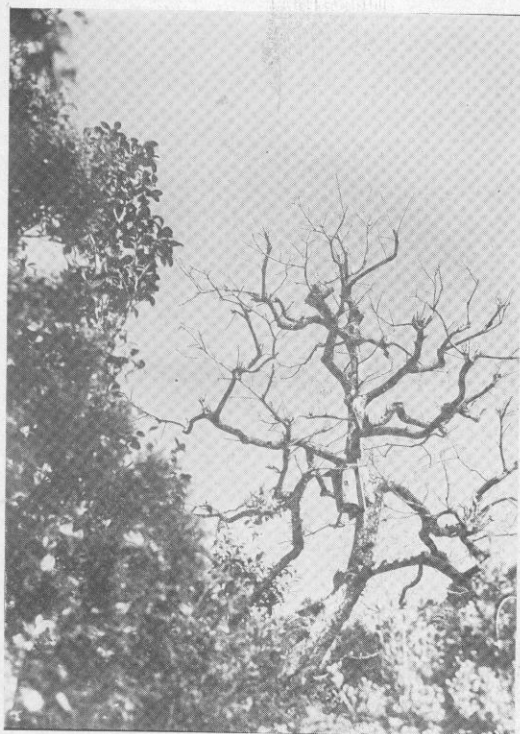
3 札打木より見たる求菩提山の林相



4 求菩提山上宮社宇板壁に穿ちたる鹿児島青啄木鳥の孔



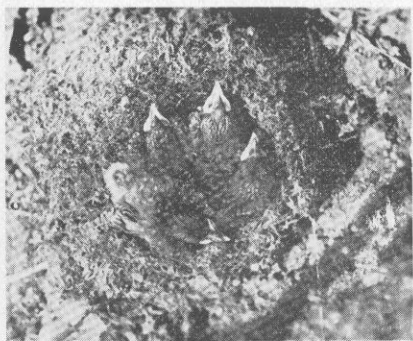
5 鹿兒島青啄木鳥



7 求菩提山（鹽田香取氏宅前チ
シャノキ）に架設する巣箱



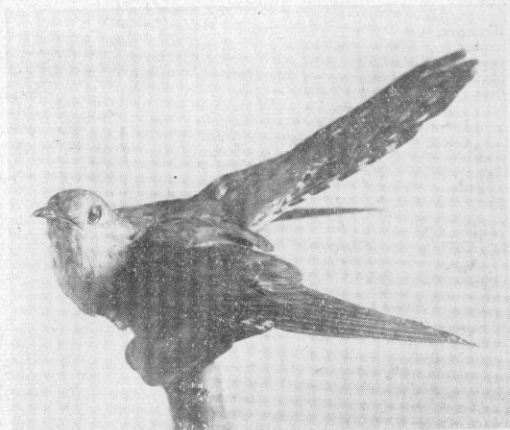
6 求菩提山護摩炊跡附近に於
ける梅の枯木と鹿兒島アオ
ゲラの穿ちたる巢孔



10 大瑠璃の雛
(求菩提山籠水にて)



11 黄鵠鴿の雛
(求菩提山大木の切株上)



8 杜鵑 (ホトトギス)
(求菩提山の景物)



9 コノハヅク (木葉木兎)
上 (♂) 下 (♀)



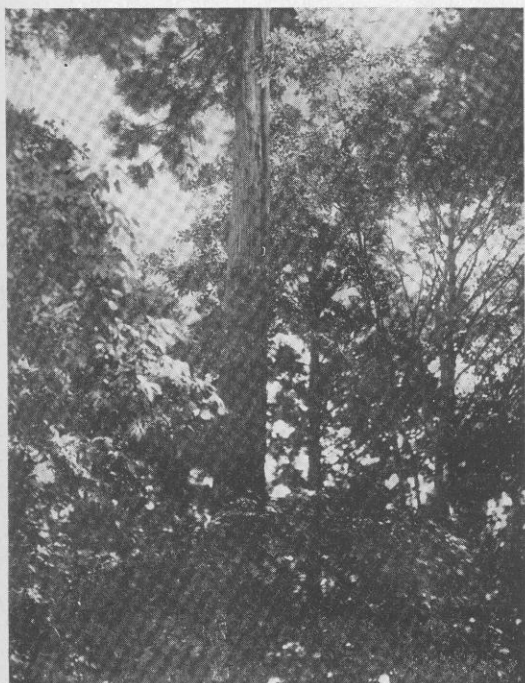
12 雲雀の巢と卵 (國見岳山麓にて)



13 雲雀の巢と雛 (國見岳山麓にて)



14 鵲の巢と卵 (岩屋村鳥井畑にて)

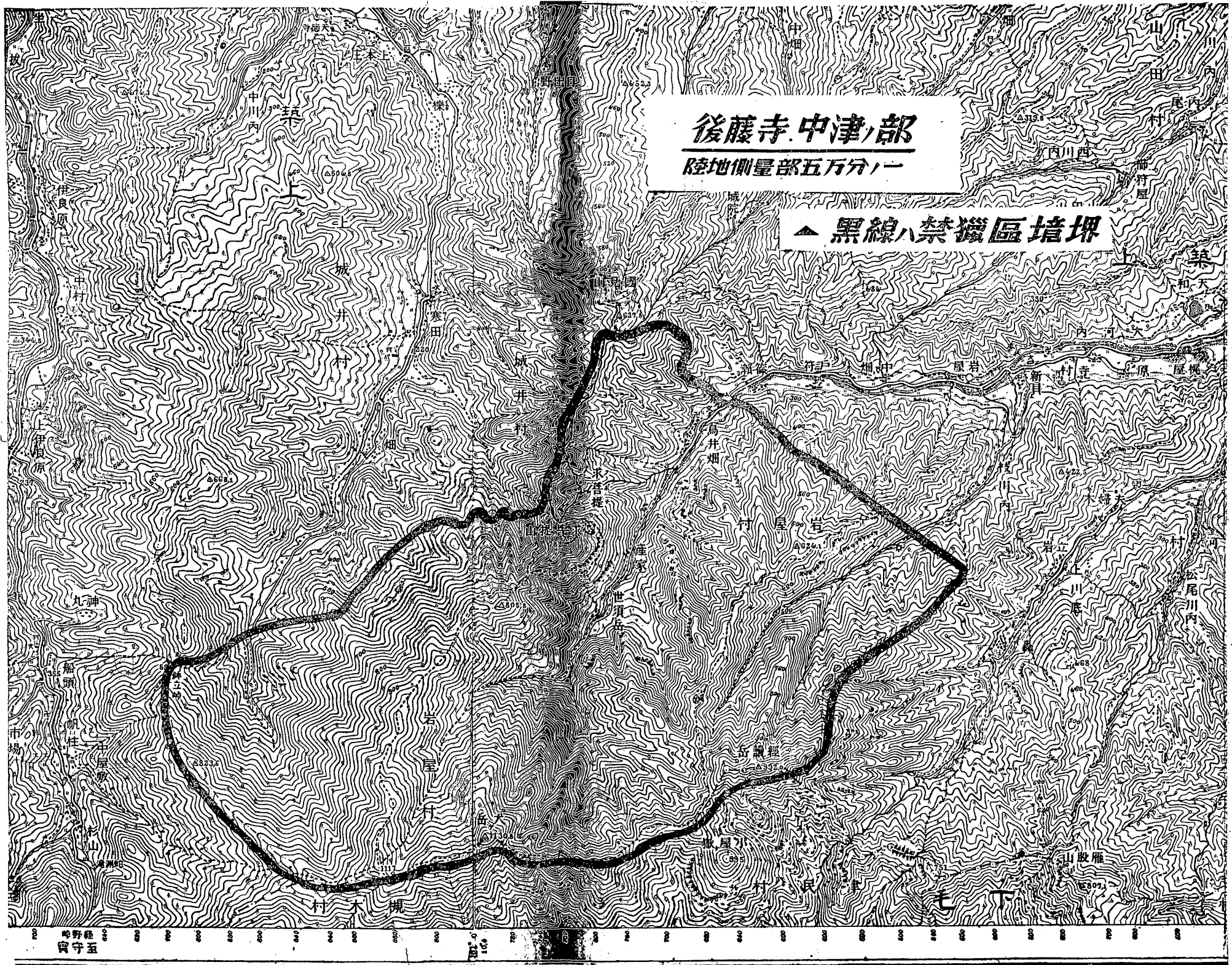


15 鼯鼠(ムササビ)の穿ちたる空洞
(上宮附近にて)

後藤寺中津部

陸地測量部五万分一

▲ 黒線ハ禁獵區境



叙

昭和九年三月福岡縣史蹟名勝天然記念物調査委員會の席上で、求菩提山を抱擁する所謂犬岳山麓の鳥類を調査することになった。

抑も犬岳山麓は福岡縣の東部大分縣の北西部の兩縣堺に跨り、北緯三十三度三十分東經約三十一度に位置してゐる。此の山麓は最高峰犬岳(一一三一米)を盟主として、東へ連る經讀岳(九九二米)、雁股山(八〇七米)南に小屋岳(九九五米)の秀峯を控へ、北に國見岳(六三八米)が聳へて、其中に靈峯求菩提山を抱擁してゐる。之等連山中に畫尙暗き鬱蒼たる森林があり、四時雲を呼ぶ有様で、自然渡鳥の目標となつてゐる。又犬岳の恐淵を始めとして、各所に瀧或は落水が散在し、又谷々から流るゝ溪水は集つて岩瀧川、上城井川の清流となつてゐる。之等地理的環境は自然鳥類の棲息乃至蕃殖に適してゐることは言を俟たざる處である。況や求菩提山には縣社國玉神社の鎮座あり、古くは慶雲の頃には役行者の修驗道場あり、之等の坊屋軒を並べ、自然殺生禁斷の靈地として珍禽の棲息に富み、全く鳥類の樂園であつたらしい。然るに明治初年狩獵が自由となつて、鳥類の著しく減少したのは甚だ遺憾であつたが、其後心ある地方有志の希望もあり、昭和十年五月國設禁獵區が設けられ、引續き巢箱の架設などが行はれて、之が保護蕃殖及びその宣傳に努めたので、年を追ふて再び鳥類の増加を見る様になつたのは寔に喜ぶべき現象と思ふ。

犬岳山麓鳥類調査が決定して以來、自分は努めて機會を作り調査を進めたが、何分他の調査と異り、鳥類は飛翔すること、大部分の鳥が渡りをする、こと、又留鳥にしても、近距離に移動すること、季節々に依つて其習性が異なるので、其調査も頗る困難であつた。然し幸ひに前記禁獵區、及び巢箱に關する鳥類調査等の爲、此地に出張の要件が多くなつたので、是等の機會を此調査に織り込んでなるべく四季を通じて登山した上、古老狩

獵者等を訪問して此地鳥類の傳説迷信方言を聴取し其分布習性を明にすることゝした。これを集成したのが本書である。

勿論本調査を以つて本區域の鳥類を盡せりとは云へないので今後引續き研究調査を進め増訂したいと思ふ。尙之が調査に當り特に調査に助力せられ若しくは種々の便宜を與へられた豊前山岳會長今吉政吉博士、岩屋村々長鹽田香取氏、上城井村々長大島直次郎氏、國玉神社々掌廣澤義彪氏、八屋新聞社々長大江俊明氏、岩屋村友松龍吾氏等に深甚なる謝意を表する。

昭和十四年三月

調査委員 安 部 幸 六

凡

例

一、本稿は求菩提山を抱擁する大岳山彙の鳥類目錄の延長に過ぎざるも、少しく記述の手法を變へて之等鳥類の此地に於ける分布、習性、其他に關して觀察したる事項及び迷信、傳說等を附記したものである。名付けて求菩提山及び附近鳥類一班とした。

二、調査區域は自叙に述べた通りであるが、便宜上求菩提山禁獵區を主體とし、之に接續する山々及び築上郡岩屋村及び同城井村の平坦部を含めてゐる。

三、求菩提山禁獵區境界は昭和十年五月二十一日付農林省告示第五十三號に依る即ち福岡縣築上郡岩屋村大字篠瀬須佐神社鳥居を起點とし、之より林道を岩屋村大字大平(八一八番地)及び同村字タブノ木(一八九八番地)を経て同村大字向平(二〇〇七番地)に達し、之より岩屋村及び合河村の村境を南下し岩屋村字經讀岳(一八九九番地)に達し、之より大分縣及び福岡縣の縣境を境とし西に進み福岡縣築上郡上城井村奥山(一番地)に達し、之より京都郡伊良原村及び築上郡上城井村との村境を北上し、上城井村鉾立峠(二一八番地)に至り、之より里道を境として同村大字牧の原に至り、此地より林道を同村大字畑浦(二〇五一ノ一番地)に至り、之より右折して里道に移り岩屋村大字求菩提に至り、此地より岩屋と上城井村との村境(林道)を北上し上城井村大字國見岳展望臺に至り、此地より里道を南下し須佐神社起點に達する線内の區域である(地圖参照)。

四、記載鳥類は過去五ヶ年間に亘り、余が實際に目撃し鳴聲を耳にした鳥及び信用ある地方有志の報告中確實性あるもののみを挙げ、苟も曖昧なるものは全然之を省いてゐる。

五、記事中なるべく鳥類の鳴聲を多く取入れ、以て讀む者をして其鳥類の種名、習性の理解上便利に供してゐる。

る。然し同じ鳥にも地畝を占有する爲めに鳴く場合、友を呼ぶ場合、雌の歡心を求むる場合、餌を漁る場合、手負の場合等で異つた鳴聲を發するもので、又一面聽く人の環境によつて様々に變化がある。随つて單に一通りや二通りで鳴聲を言ひ現すのは至難のことゝ思ふ。それで此處では普通の場合誰にも聽き易いものを擧げたに止まつてゐる。

豊前求菩提山及び其附近の鳥類一班

調査委員 安 部 幸 六

杜鵑目

杜鵑科

- 一、ほととぎす
- 二、かつこう
- 三、つつどり

佛法僧目

翡翠科

- 四、かはせみ
- 五、みやませうびん

鳥鵲目

鳥鵲科

- 六、あをばづく
- 七、おほこのはづく
- 八、このはづく
- 九、きうしうふくろふ

蚊母鳥科

豊前求菩提山及其附近鳥類一班

雨燕科

- 一〇、よだか

啄木鳥科

- 一一、あまつばめ
- 一二、かごしまあほげら
- 一三、きうしうこげら
- 一四、ありすひ

燕雀目

雲雀科

- 一五、ひばり

鶺鴒科

- 一六、びんずい
- 一七、はくせきれい
- 一八、せぐろせきれい
- 一九、きせきれい

鶉科

二〇、ひよどり

鵲科

二一、おほるり

二二、きびたき

二三、こさめびたき

二四、さんこうてふ

鵲科

二五、とらつぐみ

二六、こまどり

二七、のどま

二八、つぐみ

二九、しろはら

三〇、じょうびたき

三一、るりびたき

鶯科

三二、きくいたらき

三三、こむしくい

三四、うぐひす

三五、せつか

河鳥科

三六、かはがらす

鶯科

三七、みそさざい

燕科

三八、つばめ

山椒喰科

三九、さんせうくゐ

連雀科

四〇、ひれんぢやく

鵲科

四一、もず

四十雀科

四二、やまがら

四三、きうしうゑなが

四四、しじうがら

四五、ひがら

鴉科

四六、はしぶとがらす

四七、はしぼそがらす

四八、みやまがらす

四九、かけす

繡眼兒科

五〇、めじろ

雀科

五一、すずめ

五二、くろじ

五三、あをじ
 五四、いかる
 五五、しめ
 五六、こかはらひわ
 五七、まひわ
 五八、うそ
 五九、ほほじろ
 六〇、みやまほほじろ
 六一、あと
 六二、かしらだか

阿比目

鰈鰻科

六三、かいつぶり

鰻型目

鰻科

六四、ごゐさぎ
 六五、ささごゐ
 六六、みそごゐ

雁鴨目

雁鴨科

六七、まがも
 六八、こがも
 六九、おしどり

鰈鰻目

鰈鰻科

七〇、とび
 七一、のすり
 七二、ゑつさい(雄)、つみ(雌)
 七三、このり(雄)、はいたか(雌)

鰻子目

鰻子科

七四、きうしうきじ
 七五、あかやまどり

鰻型目

鰻科

七六、たしぎ
 七七、やましぎ
 七八、たましぎ

鳩鰻科

七九、あをばと
 八〇、きじばと

鰻型目

秋鰻科

八一、くゐな

一、ほととぎす (杜鵑科) *Cuculus poliocephalus poliocephalus* (Latham)

杜鵑、郭公、蜀魂、杜宇、怨帝、不如歸、時鳥、勸農鳥、種蒔鳥、冥土鳥

求菩提山、犬岳、續讀岳、國見岳等何れの山々にも渡り来る鳥で、例年此地方の麥刈頃(六月)になると大字求菩提の六地藏の松の樹に来てよく鳴くと、さも意味ありげに此地方の人々は云つて居る位で、此鳥は慥かに此山の初夏の景物の一つになつてゐる。此鳥の鳴聲を此地方では「ホゾンカケタカ」又は「ブンゴノタケダ」又は「ミツチャン」(假名「ドケタカ、アッカツカア」などと眞似して居る。最初の二つは各地でも云ふことであるが、第三番目の分は始め人名を入れて何處に行つたか、最後に笑聲を加へた處に面白い處がある。今の鳥學者間に使用する語で云ふと「轉り」の章句假充法に該當して居る。然し之を翻譯すると「キヨツ」、キヨツ、キヨツ、キヨ」となる。此地方でも此鳥の黒焼は酒の癖を直すによいと傳へられてゐる。

二、かつこう (杜鵑科) *Cuculus canorus telephones* (L.)

郭公

此地の人は例年眞竹の筍の生ゆる頃(六月下旬)、杜鵑より少し遅れて渡つて來ると云つて居る。大字求菩提に傳はる毬突き唄の一節に「カツボウ」と鳴く鳥は深山の「ホトトギス」と云ふのがあゝる。之から考ゆると、昔は此鳥を時鳥と混同して居たものと思はれる。

三、つつどり (杜鵑科) *Cuculus canorus telephones* (L.)

筒鳥

岩屋村邊の人の談に犬岳に行くと「タイ」(鯛々)と鳴く鳥が居ると云ふ。余は久しく此鳥の正

體を疑問として居た。遇々昭和十年五月十一日、犬岳の石楠花の頃天然紀念物調査員一行と共に同村有志の案内で同山に登つた時、恰度地藏の尾に差しかつた頃、案内者の一人が今此上の峯の尾の方向に鳴いて居る鳥が先年來お尋ねをして居る鯛々鳥であると云ふ。耳を聳て聞いて居ると、だん／＼聲は近くなつて來たが夫は筒鳥であつた。それで自分は大笑ひをして詳しく筒鳥の説明をしたことがある。蓋し此鳥が鳴き始めると周防灘に鯛が漁れ始まると云ふ傳説からタイ／＼鳥の名が出たのであらうと思ふ。

英彦山では此鳥の名をボンギスと云つて居る。之は勿論「ボン／＼」鳴く杜鵑の意であるが何れも鳴聲から來た良い方言と思ふ。「タイタイ」よりも「ボウボウ」の方が眞の鳴聲に近いと思ふ。太宰府で販賣して居る玩具の鳥笛に之を模するに都合のよいものがある。

四、かはせみ (蜚翠科) *Alcedo atthis Japonica* (Bonaparte.)

蜚 翠

岩瀧川、築城川の支流附近によく見る。脊の青い嘴の長いあの鳥が河椽の朽ちた杭、又は柳などに止つて水を覗いて居る姿は、慥に山間の風致を添へて居る。普通絶壁又は河の岸などに穴を穿ち、其中で蕃殖する鳥であるが、不思議にも蕃殖期になると、大字求菩提の竹藪に多く集まり雌雄互に追ひ廻し「ツイ／＼」と鳴いて居る習性がある。此地方でも此鳥の黒焼は淋病の妙薬と云ふので昔はよく密獵したものといふ。

岩瀧川の邊りで此鳥の優しい姿を見て吟んだ駄句がある。

蜚翠を寫して澄める春の水

五、みやませうびんⅡ（一名アカセウビン）（蜚翠科） *Enlonothera cromanda major* (Temminck et Schlegel)

緋蜚翠、深山蜚翠

岩瀧川の上流沿岸及び大字篠瀬字古屋敷など稀に見る鳥である。昭和十年五月岩屋村の鳥井畑の寶壽寺に泊つた時、住職の矢嶋勇猛氏から名稱不明の鳥として剝皮を貰つたことがある。此村の一部では此鳥のことをクルマ鳥と呼んで居る。蓋し此鳥の「キヨロロ、キヨロロ」と鳴く聲が恰度雨戸を操る音に似て居る處から此方言がついたのであらう。

因に此鳥の名を漢字で現したのに蜚翠の字を用ひ、普通のカハセミと混用して居るが、支那では蜚は「ミヤマセウビン」を指し、翠は普通のカハセミを云ふのだと傳へて居る。面白い解釋と思ふ。

六、あをばづく（梟鴟科） *Ninox scutulata scutulata* (Raffles)

青葉木兎

岩屋村大字求菩提及び上井村の字鶴などの杜に毎年五月上旬頃になると「ホウ〜」と所謂章句反復法（囀りの型名）で鳴く鳥が居る。夫は此アオバヅクである。蓋し此アオバヅクの名は青葉の頃から來て鳴く木兎の意である。大字篠瀬宮の森にある木の空洞に何回も蕃殖したことがある。幼鳥は「ヒュル〜」と恰も昆虫の鳴く様な聲を出す。又此地方でも此鳥を梟の仔など云ふ人があるが夫は誤りである。

七、おほこのはづくⅡ（一名ミミック）（梟鴟科） *Otus bakkanoena semitorques* (Temminck & Schlegel)

大木葉木兎

岩屋村大字篠瀬の古屋敷の宮及び村社七社神社の森の木に晝間じつと止つて居るのを見た。

始めはアオバヅクと思つて居たが、持ち合せた雙眼鏡でよく覗くと慥に耳羽があつて色彩なども正しく大コノハヅクであることが判明した。此鳥の啼聲に就ては諸説あるが、アオバヅクに似たとして少し甲高い「ホウ〜」と思ふ。然し時によつて狐の雌の様な「ギャア〜」と鳴いて居るのを聞いたと云ふ人もある。

八、このはづく (梟鴞科) *Otus sunia japonicus* (Temminck & Schlegel.)

木葉木兎、柿木兎

求菩提山では屢々夜禽の調査も行つたが、コノハヅクの聲は一聲も耳にせない。此鳥は居ないものとして居た。處が昭和十二年七月豊前山岳會長今吉政吉少將から、犬岳に近頃聲の佛法僧(コノハヅク)が鳴いて居ると慥かな人からの報告があつた。調査して呉れと請求が何回もあつたので、直に出張、岩屋村廣澤義彪氏外二、三の人々に案内され犬岳の中腹俗稱雪溜に赴き、此附近の溪流に沿ふて上下し木炭焼小屋等に陣取つて調査すると、前記雪溜の上方に當つて二、三聲、夫も低く鳴いたので大に力を得、腰を卸して二時間餘り待つて居たが一向に鳴かない。其内雨も降り出し只聽ゆるものは瀧水の岩に激する音。鼯鼠の叫聲位で鳥類の聲はさつぱり聞へなかつた。仲嘉三郎氏等の談によると、平素はよく佛法僧、佛法僧の聲を聞くが、今晚は天候の爲め鳴かぬのであると思ふ。夫にしても此邊で鳴くとする。此鳥の聲を聞く爲めの風流人等が容易に寄り付く處でなく、英彦山の様に比較的簡單に此鳥の鳴くのを聞くことは此地ではむづかしい。然し、犬岳に棲むと云ふことは慥かである。

九、きうしうふくろふ (梟鴞科) *Strix uralensis fuscescens* (Temminck & Schlegel)

九州 梟、梟

昭和十二年の秋大字求菩提の鹽田香取氏宅に泊つて居ると、屋後の山に盛に「コウゾウ／＼」と「コトコウ」九州梟が鳴いて淋しい感じがした。此地方では方言で「コウゾウ」と云つて居る。其鳴聲から云つたものである。此地方では梟が明亮に鳴くと其翌日は晴天「グズル」と曇天又は雨天になると云つて居る。グズルとは不明亮に鳴くのを云ふ、此鳥が家鼠を捕る爲め、よく人家の草屋根をこはすのには困るとこぼして居た。

一〇、よだか (怪鷗科) *Caprimulgus indicus jotoka* (Tenninck & Schlegel.)

夜鷹、蚊母鳥、蚊吸鳥、怪鷗

初夏の頃、求菩提山に登り大字求菩提に泊つて居ると、夕刻から樹上に「コ、コ、コ」又聞き様で「キヨ、キヨ、キヨ、キヨ」と章句反復法で鳴く鳥が居る。之は夜鷹で嘴は三角形をなし太く短かく、全身の羽毛が黒と淡黄色の斑點になつて居る。嘗て智性坊の處で手負になつた此鳥が捕獲されたことがある。廣澤義彪氏の談によると求菩提地方では五月の始めに來る。數年前であつた國見岳の處に春蘭の花採に行つた時不圖此鳥の抱卵して居るのを發見した。鳥は恐れて飛び去つたがあとで巢を覗くと卵は三個であつたと、又數年前學校の運動場に降りて遊んで居るのを見たことがある。

因に地方によつては此鳥をナマスバタキなど云ふ處があるが其鳴聲から來た方言と感服した。

一一、あまつばめ (雨燕科) *Microtus pacificus pacificus* (Latham)

雨 燕

岩瀧川の上流犬岳と求菩提山の間、峡谷とか、發電所の上空などで稀に見る大形の燕の様な鳥であるが、飛ぶのを下から見ると其翼の恰好は恰度三ヶ月の様に見へ腰の所に白い羽毛がある。之が雨燕で其鳴聲を注意して居ると飛びながら「ビーン、ビーン」ときこゆる、此地方でも岩燕など云ふ人があるが此鳥は燕科の鳥ではなく雨燕科の鳥で燕には縁の遠い種類である。岩屋村の隣村合河村に來る腰赤燕を岩燕と云つて居るのでよく間違ふことがある。

一二、かごしまあぼげら（啄木鳥科） *Picus awokera takatsukasae* (Kuroda)

青啄木鳥、鹿兒島青啄木鳥

求菩提神社上宮及び鬼神神社の社殿の板壁には無數の穴がある。之は勿論青啄木鳥の穿つたもので卷頭寫眞の通りである。此山には此鳥が特に多く、愛宕神社及び胡麻炊跡附近の枯木などにも屢々見受くる。四月頃此山に登ると「クエー、クエー、クエー、クエー」と高く鳴く、栗斗の名は蓋し此「コロ」と嘴で音を立てるのが樹で栗を斗る音に似て居る處から來た名稱と思ふ。岐阜縣飛彈地方では枌斗の名があるのも面白い、又此飛彈地方では此鳥のことを「テラソ」と云ふさふであるが、テラソの語源は明でないが余は山寺等に穴を穿つ處から寺鼠又は寺襲の意と思ふ。果して然らばここではミヤソと云ひたい位である。

岩屋村大字岩屋友松龍吾氏には以前此地方で捕獲したと云ふ此鳥を籠飼にして居らるるが、よく見ると後頭部が赤く背面は黄綠色で腰は橙黄色をして居る處から見ると慥に雄鳥である。尙大字篠瀬地方では此鳥が大きな眞竹に穴を穿けて居るのを幾つも見た。尤も若竹が多く始め

から少し虫喰になつた竹質の弱い處から穴を大きくしたものらしい。古老の言によると昔は頭の赤い脊が黒と白と飛白になつたアカゲラも多かつたが現在では全く居ないと云つて居る。思ふに此赤啄木鳥と云ふのは多分ナミエゲラと思ふ。

一三、きうしうこげら (啄木鳥科) *Yungipicus Hizuki Kizuki* (Temminck)

九州、小啄木鳥

犬岳、求菩提山、國見岳、經續岳等で普通に見る鳥であるが、就中求菩提神社下宮、同中宮附近が多く、一度などは下宮の菩提樹の枝に止つて「ギィ〜」鳴きながら斜に廻つて「ヨッ〜」啄いて居るのを目撃したことがある。なか〜愛らしい鳥である。啄木鳥中最小の種類で脊は白と黒の飛白になり、頭部は灰褐色で後頭の左右の處に一條の鮮紅色の縦斑がある。

一四、ありすひ (啄木鳥科) *Jynx torquilla japonica* (Bonaparte)

蟻吸

犬岳の地藏窟の處で石楠花の木に此鳥の斜に走り登る姿を見た。雀大の鳥で背面の地色は灰色で風切羽は褐色で一部に數個の赤褐の横筋がある。體の下面は淡黄褐色で尾に近い處は白い。此鳥は蟻の蛹を好んで食する。英彦山では嘗て巢箱に入つたことがある。

一五、ひばり (雲雀科) *Alauda rvensis japonica* (Temminck & Schlegel)

雲雀、告天子

求菩提山、犬岳等では一向見當らない。上城井村の平原地方では何回となく高く雲間に囀つて居るのを聞いた。古老の言によると昔は多かつたが今は著しく減少した。夫でも國見岳の麓の麥

畑や草原などには巢を折々発見するとの事である(寫眞参照)。巢は雜草又は麥畑等に巢の半分位は地中に埋る位に營み、巢材は雜草が多く、卵は三個乃至五六個の場合が多い。築上郡八屋地方では毎年二月中旬になると雲雀の囀りを聞くが、岩屋村等では四月頃にならないと初鳴を聴くことが出来ない。此地方の人々の話である。

一六、びんずい (一名キヒバリ) (鶉鴒科) *Anthus, trivialis hodgsoni* (Richmond)

便 追、木 鷄

昭和十三年七月十八日であつた、大字求菩提の神社參道の側に臨時に架設された丸太で作つた林道の上に、脊黒セキレイの雌らしい鳥が林道の丸太を尾で叩いて居たのを認めたので、早速雙眼鏡を出し近づいて見ると顔が白色で嘴の處から眼を過る黒色の過眼線があるので、始めて白鶉鴒であることを知つた。

一八、せぐろせきれい (鶉鴒科) *Motacilla alba grandis* (Sharpe)

脊 黒 鶉 鴒

此地方ではセキレイの何種とを問はず「イシタタキ」と云つて居る。岩屋村の鳥井畑の水田の石垣の中に蕃殖して居たことがある。

一九、きせきれい (鶉鴒科) *Calobates cinereus caspicus* (S. G. Gmelin)

黃 鶉 鴒、黃 鸚

此地方では普通に見る種類で勿論「イシタタキ」で通つて居る。殊に神社の下宮及び社務所の前の小さい池端などに多いので神話のセキレイを偲び一層神社につきものの感がする。又下宮の

戸樋又は戸袋の上などに營巢して居ることがある。昭和十二年に廣澤義彪氏から貰つた二つの此鳥の巢は、通稱ネゴヤの大きな杉の切株の上に二つ並べて營んで居たものである。巢材は主として禾本科植物の枯草が多かつた(寫眞参照)。

二〇、びよどり (鶇科) *Microscelis amaurotis* (Temminck)

鶇

鶇は候鳥で毎年此地方にも九月末に來て四月中旬には北の方へ歸るのであるが、夏季此山に登ると尙谷々に「ジィー」の鳴聲を聞く蓋し小數である。此地方でも「残りビヨ」と稱して居る、勿論之は餌又は一族一門の中に負傷した鳥が居るとか、又は棲息上氣候の都合などが關係して居るものと思ふ。是等小數の鶇が蕃殖期の晩春から初夏にかけて此地で蕃殖するか否かは多年疑問として居た處、昭和九年の初夏大字クボテの廣澤義彪氏宅附近の竹藪の中に一本の山漆樹があつて之に營巢蕃殖したことがある。又昭和十二年六月十七日に登山した時、同山道石門下舊道から少し入つた杉山の中で同じく廣澤氏の案内で此鳥の巢を観察した。地上數尺の杉の枝の上に架けた徑一尺位の巢で、底部は杉の葉で其上に小枝を組み合せ中には潤葉樹の葉片などを敷いて居た。巢立後のことで勿論卵殻も羽毛もなく鑑定に困つたが、其巢の大きさ、材料、位置等から見て肯定出来る。況や、廣澤氏、鹽田氏等か親鳥の出入して居るのを目撃したと云はれて居るに於てをやである。

二一、おほるり (鶇科) *Cyanoptila cyonmelana* (Temminck)

大瑠璃、竹林鳥

大ルリは其鳴聲がよく其羽毛が美しいのとそれが此山に相當多いと云ふことで、クボテ山、犬岳の一景物となり、昔は此鳥の雛を遠方からよく捕りに來たものである。中にも、槍タシ、雉子の小屋、籠水、地藏谷、犬岳の笈などが最も多い。神社の社宇の隅角、石燈籠の火袋、稀に岩の上などに巢を營む、最も珍らしかつたのは或年石壘の炭竈に營んで居たのを見た。尤も其時は此竈は使用されて居ない時であつた。

巢材は蘇苔のみで別に窪みもなく扁平の上に數個の卵を産下する様で、育雛の時も其雛の位置丈け幾分低くなつて居る位の程度である（寫眞參照）。

夏季此山に登ると此鳥の朗かな囀りを耳にすることが出来る。嘗て大字求菩提の鹽田香取氏宅に泊り朝早く眼を覺すと、家の前後此鳥の鳴聲が盛んに聞へて一種云ひ得ぬ山の氣分を味はつた。其時手帳を出して其啼聲を翻譯して認めたものは次の様である。勿論家の中で遠近のもの老幼各種を聞いたもので様々に聞へた。

其一 ポーピー、ピー、ピー

其二 ビー、〜、〜、ビー、ピー（最初は早く終りは長く曳く）

又或人の高山で聞いた翻譯によると、

ピーヒリリン、ビョ〜、ピー、ピー、チヨコ、ピー

駄句あり。

山晴れて一際高しルリの聲

山の宿家を巡りて鳥の聲

二三、きびたき (鵲科) *Zanthopygia narcissina narcissina* (Temminck)

黄鵲、水仙花鵲

大字島井畑から求菩提山に登ると、途中新道の曲つた處に小さい瀧がある。其上の小さい灌木に「コッ」音を立てて居る鳥が居るのに氣がつき、見ると、黄鵲で翼一部分白く、腰の處の黄色迄見へた。又昭和九年の秋、外宮の處でも見たことを明に當時の日記に駄句迄添へて誌して居る。

「きびたき」や求菩提神社の側近く

元來此鳥は山の高處に棲む鳥であるが割合に低い處にも棲むことがある。此鳥の囀りは格別で大阪の鳥學者榎本佳樹氏の翻譯は次の様である。

其一 ビヨシ、コ、ビヨシ、コ

其二 チツホツリイ

其三 ビイ、ボウリ、ビポーリ

(榎本氏が口眞似して居らるゝのを余が聞いて手帳に控へたもので或は實際と掛離れて居るか知らぬが其罪は余にある斷つて置く)

二四、こさめびたき (鵲科) *Alconax Latirostris* (Raffles)

昭和九年三月に登山した時、大字クボテ神社の參道に植へてある櫻の木に小さい雀大の鳥が盛に虫を漁つて居るので、雙眼鏡で見ると、コサメビタキであつた。しばらく觀察して居ると山雀の様に「ジイ」^{／＼}と鳴いて居る。然し此鳥も囀る時にはメジロに似たよい高音で鳴く。

二四、さんこうてふ (鵲科) *Terpsiphone atrocaudata, atrocaudata* (Fyton)

三光鳥、練雀

古老に就て三光鳥のことを聞いて見ると一向要領を得なかつた。夫で雄鳥は雀大の鳥で脊が黒く頭部に聊か冠毛のあること、尾の非常に長いことなど説明すると、曰く、其鳥ならば今から十三、四年前迄は非常に多かつた、人家近くに來て居た。又居合せた一人は更に語を高めて今も夫岳の笈では慥に二、三回目撃したと、余は此古老の言を信じ茲にあげて置く。

因に三光鳥の鳴聲は此地では聞いたことはないが、嘗て霧島山に登山した時親しく耳にしたことがある。即ち「ヒーホケ〜チヨイ〜」と翻譯して手帳に控へて居る。又當時一緒に登山した梶木營林署（今は大分縣廳林務課勤務）の大旗勘太郎氏は之を例の章句假充法で「ガージョー、ツキヒ、ホシ〜」と聽いて居らるるのも面白い。

二五、とらつぐみ（鵲科） *Oreocinclla dauma autca* (Horandre)

虎鵲、鵲、鵲

此地方では虎鵲のことをヤネキジと云つて居る。本年（昭和十四年）三月登山した時、廣澤義彪氏の談に同家附近で夜中に盛に鳴いたそうである。此山續きの英彦山ではヤネキジと云へば山鵲のことを指して居る。大正十年頃廣澤氏は鳥井畑の寺の後山で一羽狩獵されたことがある。此地方でも老人はニエと稱へ、夜中と朝方に「ション、ヒョン」と鳴く、そして此鳥が鳴くと村中又は親類に死人があると云つてゐる。蓋し醍醐天皇の御宇源三位入道頼政が射捕つたと云ふ故事の鵲から來た訛りと思ふ。其鳴聲の「ション、ヒョン」と云ふのも徳川時代の博物書三才圖會などに記された「聲如レ曰休戲」と略ぼ一致して居る。鳥體は鵲より一寸大き位で、脊は黄褐色で各羽毛の末端には三ヶ月型の黒斑がある。大字鳥井畑、西廣澤などにも此鳥を見受くると云ふ人がある。以前はよ

く毘に掛つたので食べたが、なかなか脂の多い鳥でありましたと語つた人もあつた。

二六、こまどり (鶉科) *Erythacus, akahige akahige* (Temminck)

鶉 鳥

岩屋村仲嘉三郎氏及び同村某氏の談によると、犬岳の笈及び雪溜等には今も棲んで居るが稀である。以前は相當多かつた、大變に減少したので「ヒーヒョロ、ヒョロ、ヒョロ、ヒーガシャ〜」のよい聲を聴くことが出来なくなつた。

二七、ごま (鶉科) *Calliope, calliope calliope* (allas)

野 鶉

發電所の前を過ぎ吉原を過ぎて犬岳に登ると、最初の木炭小屋の横手の藪中に喉元の赤い此鳥の雄鳥を見たことがある、此鳥の囀りは又格別である。

二八、つぐみ (鶉科) *Merula eunomus* (Temminck)

鶉

此地方では俗に「キィ〜ガチ」と云つて居る、勿論其鳴聲から來た方言である。毎年十二月頃山に來て三月頃になると、田や桑畑などに降りて來る。四月頃になるとどこにか去つて居なくなる。其去る前には谷山の麓の杜などに集つて騒がしく鳴く、此時の鳴聲を遠くから聞くと其啼聲の一部に「ヒャア〜」云ふ處があつて杜鵑に似た處がある。

二九、しろはら (鶉科) *Merula pallida* (Gmelin)

白 腹

此地方ではビルガチ、ヤブガチ、單にカチドリなどと云つた方がよく判る。此地方普通に見る鳥で毎年十月の初旬に渡つて來て翌年の四月上旬には去る様である。大字クボテ地方では南天の實や、ユヅリハの實、青木の實、蚯蚓、其他の昆虫などを喰ひ、地に下りて食物を漁る時は落葉を頭上にはねあぐる習性がある。味は鶉より良味がある、鳴聲は色々の場合で異なるが次の様である。

△グチユ　　／＼　／＼　クワツ　／＼　／＼
△チツ　　／＼　／＼　（ミンサザイの鳴聲に似た點がある）

陽春の頃になると、

△チイロン　／＼　／＼　キユヨ

然し此鳴聲は此地方では未だ聴いたことがない。

三〇、じょうびたき（鶉科） *Phoenicurus, aureus aureus.* (Pallas)

迎客鳥、鶉

此地方ではヒンコツ、モンツキドリと方言して居る。前者は其鳴聲から、後者は翼の紋様から名づけたものである。神社參道を鳥井畑の製材處の處から登ると、石門迄の間に左右何回となく此鳥を路傍で見る。體を前後に屈伸して「ヒンコツ」を繰り返す様は如何にも登山者を迎へ慰むるの觀がある、駄句がある。

△上　び　た　き　求　菩　提　の　山　の　登　山　口

因にヒタキの名は鳴聲が昔燧石で火を打ち出す音に似て居る處から來た名稱と思ふ。

三一、る　り　び　た　き（鶉科） *Lanthia cyanura* (Pallas)

瑠璃鵲

上城井村大字鶴で一度見受けたことがある。虫喰位の大きさで其鳴聲も「グワツカ」と鵲の様に體を屈伸して鳴いて居た、因に此鳥の雌は虫喰の様な色彩で腹部及び腰の部に一寸雄に見る様な瑠璃色の羽毛がある丈でなかなか見別けが困難である。

三二、きくいたらき (鶯科) *Regulus regulus japonensi* (Blakisto)

菊戴

此地方ではブラサガリと云つて居る。先年四國を巡つた時、高知縣の或處では此鳥のことをマツサガリと云つて居たのを思ひ浮かべた。松の心葉に止つて蚜虫や其他松の害虫を捕食して居る様から付けられた方言と思ふ。岩屋村の一部地方ではエナガを此方言で云ふ處がある、雄鳥の頭上にある黄色の羽毛は實に美しく、菊戴の名も之から來たものである。

三三、むしくひ (鶯科) *Acanthopneuste borealis borealis* (Blasius)

小虫喰、鳩

毎年八月の末になると大字クボテなどに來て、例のジュ／＼、又は「ゼツ／＼」の鳴聲を聴く、此地方でも此鳥を鶯の雌鳥など云ふ人があるが、夫は間違で鶯によく似た鳥である。

三四、うぐひす (鶯科) *Hororis cantans* (Temminck & Schlegel.)

鶯、春告鳥、經續鳥

盛夏の候、犬岳、經續岳、求菩提山、國見岳の奥深く行くと、艶麗な此鳥の啼聲を聞き一層山の清涼さを感じる。或人は夏季深山に鳴く鶯は春季里近くで鳴く鶯とは別種だと云ふが夫は間違ひで、

此鳥は渡鳥ではないが、盛夏の頃などは涼しい山間部に移動する鳥で、鶯の鳴聲に就ては世の觀賞者は其付子を吟味しては三段の鳴聲などを品騰するものであるが、深山での此鳥の自然の鳴聲は又格別だと思ふ。

嘗てクボテ山の西谷で杉のテッペンに止つて喉元を膨らして一生懸命で囀つて居るのを見たが、普通の場合と全然其趣を異にして居た。之こそ近頃鳥學者間にやかましいテリトリ(地區占有鳴)だと思つた。鶯の巢は普通笹又は茅で作つた横向の巢で地上低く藪などに營むものであるが、國見岳の一部で見たのは地上數尺の松の藪の上に笹で作つて居た。勿論横向の巢であつた。大字クボテ地方では毎年二月十日前後は初鳴を聴くと同地の人は語つて居た。

尙此地方では鶯の初音を狭い處で聞くと一年中病氣に罹ることが多く又年中陰氣で暮らす、反對に廣々した處で聞くと一年中壯健で陽氣で暮すなどの傳説がある。英彦山では杜鵑に就て之に類した話がある、求菩提から國見岳に通ずる道を行くと途中芭蕉の塚がある。此邊又鶯が多い、ここで佇んで駄句つたのが次の様である。

△芭蕉塚春の經讀む小鳥あり

△鶯の初音ゆかしきクボテ山

三五、せつか (鶯科) *Cisticola, cisticora brunniceps* (Temminck & Schlegel)

雪加、雪下

此地方の人に雪加と聞いても知る人がない、然し茅野などに雀大の一寸黄みのある鳥で「ヒヒヒ」と章句反復型で鳴き、又飛ぶ時は「ツェツ」と鳴く鳥と云ふと、直に國見岳の野原や、篠瀬の河邊

などに居ると答ゆる人が多い、巢は四月頃茅や蓬などを綴り合せて作る。

三六、かはからす (河鳥科) *Cinclus pallasi* (Temminck)

河 鳥

山間部丈けあつて河鳥は割合に多い、岩瀧河の上流發電所の近く及篠瀬附近、夫から上城井村の寒田から求菩提山に登る途中の溪流などでよく目撃する。茶褐色で鳩より少し小型である、岩の上に止つて「チツ、チツ」と鳴きながら大きな岩を尾と翅と一緒に叩いて居る情景は如何にも山間の風致を添へて居る。嘗て岩屋の川邊で塩田香取氏と同行の際此鳥の囀りを聞いた、當時の日記に其囀りを、メジロに似た處もある、又ミソサザイに似た處もあると記して居る。昭和十二年の秋、廣澤義彪氏が豫て報告せし(同年五月)岩屋村抜川の岩壁の上に營んだ河鳥の巢を同氏の案内で觀察した上採集して歸つた(此巢は目下英彦山九大生物學研究所に寄送保存)。巢は全部蘚苔で徑二尺位の大したもので、勿論出入口は最も小さい普通河鳥の巢は瀧水の裏、又は川の堰などの附近石垣の中などに營巢するものなるが、こんな乾燥した場處に見るのは稀である。但し此位置たるや下は二メートル乃至三メートル位の深さの淵で、其岩の上には容易に寄り付き難い處である。案内の廣澤氏の談によると、當時(五月)卵は四個で卵の色は白色に褐色の斑點があつた、親鳥が私を恐れ「チツチツ」と鳴きながら附近を飛び廻つて居たのには氣の毒であつた。此地方では此鳥の黒焼は婦人病の妙藥だと云ふことなども囁して居た。

三七、みそさざい (鷓鴣科) *Troglodytes troglodytes fumigata* (Temminck)

三十三歳、雀、黄匠雀、鷓鴣

犬岳の熊笹の中、求菩提山の登山道兩側のウラジロ、オカメザサの藪中に「チャ／＼／＼」とミンサザイが尾をあげて鳴いて居るのも可愛らしい。昔はよく獺で捕り籠鳥にしたものである。此鳥の常鳴は左程でもないが囀りは實に美聲である（一寸細眼兒の高音に似た處がある）。此地方では此鳥の巢を一向に發見せないが巢材は蘚苔類のみで營んで居る。

三八、つばめ（燕科） *Hirundo, rustica gutturalis* (Scopoli)

燕、乙鳥

犬岳、國見岳、求菩提山等では一向に見受けないが、岩屋村及び上城井村の平坦部ではよく目撃する。此地方でも毎年三月下旬に來て十月一杯位居ると云つて居る。因に腰赤燕は岩屋村の隣村合川村迄は來て居るが、此區域には全然渡り來ぬのが不思議である。

三九、さんせうくひ（山椒喰科） *Pericrocotus roseus divaricatus* (Raffles)

山抄喰、山椒鳥

中宮の上部邊に行くと「ヒリリン、ヒリリン」と鳴く頭の半分白い半分は黒い脊の鼠色で腹の白い雀大の鳥が居る、之は山抄喰である。

四〇、ひれんぢやく（連雀科） *Bombycilla garrulla centralasiae* Polyakov.

緋連雀、朱連雀、十二紅

永年、クボテ山、犬岳には登山するが連雀は全く見たことがなかつたので本調査にも省くことにして居た。すると昨昭和十三年十二月、岩屋村大字岩屋の大棟及同地友松龍吾氏宅の大棟に緋連雀の一群を見た、友松氏の談によると黃連雀も來るらしいが、然し夫は未だ研究を要するもの

として残して置く。

因に緋連雀の翼の次列風切先端が紅色で又大雨覆の先端及び下尾筒も紅色であるが、黄連雀の方は翼の風切羽は黒色で、初列風切外辨先端は黄白色で、次列風切では白色で羽軸の先端には小なる赤色蠟様物が附着して居る。頭のトッキンは雙方共ある。

四一、も ず (鵲科) *Lanius bucephalus* (Temminck & Schlegel)

鵲、百舌鳥、伯勞

此地方ではムズ、ムーズなど云つて居る。普通に見る誰でも周知の鳥である。本年(昭和十三年)四月岩屋村の産下で鵲の巢を見た。巢は地上一メートル位の野イバラのある藪の中に禾本科植物を主材として營み、内部にはシユロの毛、小鳥の羽毛、紙屑などを敷いて居た。次に夏季鵲は平地では見ることは出来ないが、犬岳等では折々目撃することがある。然し秋空高く此鳥が尾を振つて喧しい聲で「キチ———チュン———」などと高鳴を聞くことは出来ない。此地方にも鵲のハヤニエ(指餌)はよく見受くるが、先ずバツタ(昆虫)蛙位で別に變つたものは見當らない。

四二、や ま が ら (四十雀科) *Sittiparus varius varius* (Temminck & Schlegel)

山 雀

神社の下手及横などの杉の茂つた中に「ジィ——」鳴きながら嘴で「コッ——」コゲラの様な音を立てて居る鳥がある。之が山雀で、時によつて「ツツピーン、ツツピーン、ツツピーン」と鳴く。求菩提山に架設した巢箱を調査して見ると主として此鳥と四十雀であつた(口繪寫眞及び調査表参照)。

鹽田香取氏(大字求菩提)宅前のチシャの樹に架設した巢箱に山雀が營巢し育雛をして居ると、雀

が來て其親鳥の山雀と鬭爭した揚句、山雀の雛は皆巢箱外に咬ひ出され斃れて居たとの事であるが、果して此雛を出したのは山雀の所爲なるか雀なるかは不審なるも、兎に角此二つの鳥が巢箱を中心として鬭つたことは疑ひもない。處で雀と云ふ鳥は此方面から考へて如何にもにくい鳥である。と鹽田主人の談である。

尙面白いのは此巢箱による調査の時見たのであるが、下谷の結城氏宅前の大きな柵に巢箱を架設して居た。すると之にも山雀が來て蕃殖して居た。そして其樹の麓近く三寸位の柵の實生が簇生して居たが、之は山雀の集めて居たものが生へたものだとは結城氏の談である。山雀は藝當をするので人に知られてをり、額から眼先にかけて耳のあたり迄帶褐白色部があるのが此鳥の特徴である。

△巢箱に依る鳥類調査表 (但し求菩提山の分)

區域名	架設數	利用數	摘要
下谷區	一九	一四	内三個の中に雛あり
杉谷區	二三	一七	二個破壊
西谷區	七	六	
上谷區	五	四	
鬼神上宮區	二五	二一	三個調査未了

備考

一、利用鳥類の種類は山雀四十雀の二種で其利用の割合は巢立後のもの多く不明なるも殆ど半々位らしい。

一、巢箱は木製箱型を使用し一切の管理を廣澤義彪氏に一任して居る。

一、巢箱中に運ばれた巢材は蘇苔類を主とし、雞の羽毛、小禽の羽毛、杉皮、糸屑、ゼンマイの綿毛、馬毛、野兔の羽毛等があつた。

一、巢箱の中に鼯鼠及び雀蜂が利用して居たのがあつた。

四三、きうしうゑなが (四十雀科) *Aegithalos. caudatus* Kins. *hiuensis* (Kuroda)

九州 柄長

此地方では菊戴と共にブラサガリの方言があるが、之は習性上から來た混同で已むを得ぬことと思ふ。松の心蒔に止つて「ツユ〜ジュ〜」と鳴いて松の心喰虫や、蚜虫などを捕食して居る。菊戴と共に日本産野鳥中の最小種である。尾羽が體の割合に長いので柄長の名がついたのであらふ。而して此鳥の巢は此地方では未だ見たことはないが樹の股等に深い出入口の小さい巧妙な巢を営むものである。巢材は蘇苔類、鳥類の羽毛、蜘蛛の巣などである。

四四、しじうがら (四十雀科) *Parus. major minor* (Temminck, & Schlegel)

四十雀、荏雀

四月頃求菩提山に登山すると雀大の鳥で、頭上、後頭部、頸側、喉及び胸の上部は黒く、頬及び耳羽が眞白な鳥が「ツツペイ、ツツペイ、ジュク〜」又は時としては「ジュク〜」チツチロ〜と愛らしく異音組合法で鳴いて居る。之が四十雀である。前にもよく云つた様に巢箱によく入る鳥である。

四五、ひがら (四十雀科) *Parus ater insularis* (Hellmayr)

日 雀

大字クボテの鬼神神社附近の松葉樹の中に「チ^ヨチン／＼」と同音を反復して鳴いてゐる鳥を見る、之は日雀で頭上から後頭は光澤のある黒色で、嘴の基部から頬、耳羽頸側に亘つて白色の部がある。背面は青灰色で翼は淡墨色に灰白色の縁がある。嘴は黒褐色で脚は鉛色である。

四六はしふと鳥 *Corvus, coronoides japonensis* (Bonaparte)

嘴 太 鳥、 鴉

岩屋村大字岩屋全鳥井畑などに嘴の特に大きな鳥が居る、此邊では地鳥と云つて居る。大字クボテ地方では此鳥が鶏の雛や卵をさらつて行くと聞いた。鶏の卵を嘴細鳥が奪つて行く話はなから如何に此種の鳥が嘴の大きいか判る、尙筑前邊では鳶が鶏の雛を奪つて行くことはよく聞かぬが鳥が雛を云々とは餘り耳にせない、此鳥は柿や玉蜀黍にも相當害をすると當地の人は語つて居た。

嘗て鳥井畑で苗代の一隅に竹片に吊して此鳥の剥皮を見たので、其處に仕事をして居る人に聞くと雀の害を防ぐ爲めの威（案山子代用）であると、又鳥の黒焼は血の途の妙藥だと云ふが中にも此種の鳥がよく効くと云つて居る。

四七はしほそからす（鴉科, *Corvus corone interpositus* (Laubmann)

鴉、 嘴 細 鳥

昭和十二年の五月上旬、岩屋村大字クボテの字産下の松を山の持主が伐り倒した處、其松に鳥が營巢して既に雛が三羽居たそふである。大字篠瀬の戸府などにも多く、有名な篠瀬梨などもよ

く害されたものだ」と老人の話であつた。此地方でも烏啼が悪いと村内に凶事がある、烏啼がよいと村内に良いことがあると傳へて居るが、烏啼の良いとは「カア／＼」と軽く連呼するを云ひ、悪いと云ふのは「カァー」と語尾を長く引くを云ふ様である。

四八、みやまからす (鴉科) *Trypanocorax fugilegus pastinator* (Gould)

深山鴉

ミヤマカラスのことを此地方ではムレカラス又は寒鴉などと云つて居る。前者は群れて來る意、後者は冬になつて來る意である。昔は求菩提山の中腹などに埒があつて澤山の烏が泊つて居た。そふである、然し今でも大字岩屋などの麥畑などに二、三百位の群は來るが、決して泊る様なことはない。昨年の秋、クボテ山からの歸途篠瀬の附近の麥田で此鳥が犬をからかつてゐるのを見た。

四九、かけす (鴉科) *Garrulus glandarius japonicus* (Schlegel)

掛子、櫃鳥

此地方ではカシドリと云つた方がよく判る。犬岳、求菩提山、經讀、何れの山々にも普通に見る鳥である。犬岳で吉原某に此鳥の巢を取つて貰つたことがあるが、巢材は小枝を粗末に組み合せて居た。此鳥は色々の物眞似をすることは人の普く知る處であるが、此地方では犬猫、鷹、鴨などの鳴聲を摸し、中にも木挽の鋸音、鳶の鳴聲は連も上手であると云はれて居る。靜かな山道を一人で行く際、突然頭上に此鳥の「ギャツ／＼」を聞くと誰でもビツクリする位である。求菩提の金比羅神社の處などには最も多く、又翼の一部にある青い羽毛は殊に眼を引いてゐる(寫眞参照)。

五〇、めじろ (繡眼兒科) *Zosterops palpebrata japonicus* (Temminck & Schlegel)

繡眼兒、眼白

大字クボテ等では毎年椿の花、山茶花の花の季節にはよく是等の花の花蜜を慕うて来る。大字クボテの繡の樹に巢を營んで居たので、巢立後採取して歸つた。巢は禾木科植物の枯草、杉苔などをクモの網で巧みに綴合せて作つて居た。當時巢の中には水色の卵が三個入つて居た。さふである(眼白の卵色は白いのもある)。大字岩屋の友松龍吾氏宅には淡黒い體色の眼白が養つてある。附近で以前子供が採つたものと聞いたが全く變り毛の珍種である。

五一、すずめ (雀科) *Passer. mantchus*. (*Saturatus*)

雀

岩屋村、上城井村の平坦部には勿論普通に多く見る鳥であるが、求菩提山などの上部では殆ど見ない。茲に珍らしい話は大字求菩提には人家はあるのに雀は非常に少ない。鹽田香取氏の談によると、昭和十年迄は雀は一番(二羽)しか見なかつたが、昨年(昭和十一年)頃から杉谷に一番、下谷に一番、都合此クボテに二番となつた。元來此地に雀の少いのは第一人家が少なく、其營巢の場處が少ないのと、餌が少くないとか、氣候が寒いとが關係してゐると思ふが、どうも禊會の家(今講堂と稱す)が出来て其白壁を目標に來たものと思ふと云はれてゐた。尙同氏は談を續けて、去る昭和七年岩屋村の今の役場が建つた時、其年は逆も雀が多く、巢をかけた、其翌年からだん／＼減つて來た。あれから考ゆると或意味に於て新らしい處を好む習性があるらしいと附言されて居た。

五二、くろち (雀科) *Emberiza variabilis* (Temminck)

黒頸、黒蒿雀

吉原からクボテ山に登る途中丸山に墓がある、其處を通過した時一羽の黒鷗が墓場に降りて落葉をあさりながら「チツ」と鳴いて居るのを見た。廣澤義彪氏の談によると字八丁の處にも黒みのある頬白大の鳥を見たとき多分黒鷗と思ふ。因に黒褐は一寸黒みはあるが、よくみると背面も腹部も石版色で翼の風切羽及び尾羽は黒褐色を呈してゐる。

五三 あをじ (雀科) *Emberiza, spodocephala*, *Personata* (Temminck)

青鷗、蒿雀

神社の下宮直後の濶葉樹林及八丁阪などで地面に降りて落葉を漁つて居るのをよく見る。因に此鳥の特徴とも云ふべき點は頸側より胸に亘る部分は暗橄欖色を呈し、頸以下の背面は橄欖褐色で脊の羽毛は赤褐色を帯びて居る。喉は黄色で胸以下も黄色であるが、上胸には褐色の斑點がある。

五四 いかる (雀科) *Eophona, peronata*, *personata* (Temminck & Schlegel)

桑鳳、斑鳩、鵲

本區域の山岳部では嘗て見たことがないが、大字岩屋友松龍吾氏宅前記大椋には連雀、シメなどと共によく椋の實を慕つて來ることが多い。此地方の人々はシメと共にムクバリと云つて居る。又人によつてはイカルをムクバリの雄鳥、シメを雌と誤り稱する者がある。而して此鳥の常鳴は普通「キョツ／＼／＼」であるが、轉りには「キコツキー、キー」と聽へる。古老の言によると此鳥は「ツキヒ、ホシ／＼」「月日星々」と鳴くと云ふ、和漢三才圖會には此鳥の鳴聲を「比志利古木利」と記してある。

のもなか、面白、普通世間では豆廻しと稱し、其體色の美と嘴の黄く太く又其聲の美とで汎く籠鳥として愛翫されて居る。最近大分縣廳林務課の大旗勘太郎氏は此地に來て此鳥の啼聲を聴き、章句假充法で「イチカシ、ホシ」と譯して居らるるのも面白い。

五五、しめ (雀科) *Coccothraustes japonicus* (Temminck & Schlegel)

蠟嘴、老西子、蠅嘴

前項記載の友松龍吾氏宅の大椋及其附近の大椋に飛來することは慥かであるが、多分他の本區域内にも來るものと思ふ。此鳥はイカルによく似て嘴が鉛色で(冬季は肉色)額が淡黄色で脊は暗褐色をして居る。そして上尾筒と腰は淡黄褐色を呈して居る。

五六、こかはらひわ (雀科) *Chloris, Sinica minor* (Temminck & Schlegel)

小河原鶇

岩屋村大字岩屋、全鳥井畑等で秋の頃田圃に降りて稻の落穂を漁つたり、藁積などに群れて居るコカハラヒワを見ることが多い。翼の一部分にあるヒワ色と其變つた鳴聲の「キユル」又は「チウイン」等で人のよく知る鳥である。筑前の海岸松林等ではよく蕃殖して居るのを目撃する。又大河原鶇も飛來するならんも慥でない。

五七、まひわ (雀科) *Spinus, Spinus* (L.)

眞鶇、金翅雀、蘆花黃雀

大字クボテ等には普通に見る鳥である。昔はウソと共に囀を用ひて捕獲し籠鳥にしたものである。此鳥は前記コカハラヒワによく似た鳥であるが、頭上は黒色で脊面は暗紅褐色に黒褐色の

軸斑がある。そして腰と上尾筒とは黄色で顔は眼先が黒く眉斑其他は黄緑色である。全身が黄緑色即ちヒワ色に見ゆる處から昔は色の名にヒワ色を使用したものと云つて居る。

五八う ぞ (雀科) *Pyrhura, phrula griseiventris* (Lafresnaye)

鶯灰兒拙老婆

元來ウソは梅や櫻の芽を好んで食する鳥であるが、此クボテの參道兩側に植へられた櫻に毎年十二月頃から翌年の一月頃にかけて渡り來て櫻の芽を害する。此地の人の話に昭和十二年には約三十羽の鶯が來たが、昨年の冬から本春迄には一羽も來なかつたと云つて居た。此地方でもウソの多い年は梅の不作と云ふ言葉が残つて居る。又此地方でもヒウソ(雄)アマウソ(雌)の語はあるが種類に使つてゐる。此鳥もヘクソカヅラの實を好むので昔は之を四の近くに掛けて捕獲したものである。

因に此鳥は平素ヒョソソと嘯く(常鳴)様に鳴くか雄鳥の囀りは又格別である。或實驗家の説によると雄鳥(ヒウソ)の喉元の赤みは年を経ると淡くなると云つて居る。

五九ほ ぼ じろ (雀科) *Emberiza, cioides, eiopsis*, (Bonaparte)

頬 白 鷄

普通山手にも平地にも見る鳥で、此地方では山雀と云つて居る。然し大字クボテの人などはチロコと鳴聲から方言して居る。即ち山雀は、ペンケイ、チチロコ又はペンケイ、サラモテコイ、シルスワシユなど鳴くと云つてゐる。嘗て石門の處で此鳥の巢を發見したことがある。巢の位置は低く雜草や雜草の根などで作つて居る、卵は四個であつた。

六〇、みやまほじろ (雀科) *Emberiza elegans* (Temminck)

深山頬白、黃眉

大字クボテの八丁阪などに行くと頬白に似て眼の上に黄色の羽毛が一字にあつて頭にトツキンのある、そして鳴く時に之を立つる鳥が居るが何鳥かと聞かれたことがある。勿論之はミヤマ頬白で英彦山等では此鳥の事をトツキンカブリと云つて居る。蓋しトツキンとは山伏(役業者)の冠りのことで此地等で鳥に此名あるは一層縁のある話と思ふ。然し英彦山では此方言は連雀に使用する人もある様である。

六一、あとり (雀科) *Fringilla montifringilla* (L.)

花雞、花鵲、黃雀

岩屋村、上城井村の山畑等に蕎麥や粟の稔る頃に雀大の鳥がジュン／＼と騒ぎながら群れて来る、之がアトリで此邊ではアットリとつめて云つて居る。筑前朝倉郡地方では此鳥を方言でボメキと云つて居る。蓋し騒ぐの意で、鹿兒島縣霧島地方では小椋鳥のことを之によく似たバメキと方言で云つて居るが之も同じく騒ぐの意らしい、相通じた處に方言の面白みがある。

六二、かしらだか (雀科) *Emberiza rustica* (Pallas)

頭鳥、頭高、花眉子、白眉子

鳥井畑から求菩提登山道の本通りを登ると右手にラミイの栽培してある處がある、そこに二三羽居るのを見た。最初は頬白の雄鳥と見て居たが雙眼鏡でよく見ると、頭上は黒色で後頭の處に白斑があつて背面の地色は黒赤色で顔は黒く眼の後ろの處に白い羽毛がある。誰でも頬白と

一緒に見て居るので別に注意して居ないが此場所以外にも相當居ることと思ふ。

六三、かいつぶり (鷺鷥科) *Podiceps, ruficollis japonicus* (Hartert)

鷺鷥 鷺

岩屋の椋堰に浮いて居るのを一度見たことがある。此地方ではケイッグ又はケイッーと云つて居る。區域外ではあるが同じ築上郡の合河村の池や、八屋町の池などには澤山此鳥の浮いて居るのを目撃した。『キャラキャラ』と鳴くのと水中をよく潜るので人のよく知る鳥である。

六四、じゐさぎ (鷺科) *Nycticorax, Nycticorax, Nycticorax* (L.)

五位鷺、脊黒五位、星五位、鍋冠

大字クボテ等に泊つて居ると夕刻中空を『ッ』と鳴き渡る鳥が居る、即ち五位鷺で昔はクボテの南谷等には二三百位蕃殖したことがあるそうである。昨年の秋の始め頃であつたと思ふ、大字篠瀬字篠瀬で一羽の五位鷺が嘴太鳥から追はれて居るのを目撃した。此地方の人々も脊の黒い分と脊に淡黄の斑點のある分を別種の様に考へて居るが夫は間違いで、前者は三年以上の老鳥で後者は三年以下の若鳥である。三才圖會(徳川時代の博物書)などには脊黒五位と、星五位とに區別して居るのも面白い。

因に昔の文學上に云ふ鵲は今で云ふ此五位鷺を指したものであらうと學者は云つて居る。學問上の鵲は筑後、肥前地方に居る、彼の天然紀念物として指定されて居る此地方で云ふコウゲガラス又は朝鮮ガラスのことである。

六五、ささじゐ (一名みのこゐ) (鷺科) *Butorides, Striatas, javanics* (Horsfield)

笹五位、簑五位

昭和十一年五月禁獵區の標識検査の爲めクボテ山から國見岳に行き、上城井村の寒田に下る途中、五位鷺より小形の鳥が一羽頭上を掠めて飛んで行くので、下から見上ると腹部は灰色であつた。やがて其鳥は溝邊に下り止つたので、靜かに近づいて雙眼鏡で覗くと頭上から後頭部が黒く脊は灰鼠色であつた。即ち笹五位と云ふことを慥めた。寒田の人はあの鳥ならば春になると河椽に來て木の上で蕃殖すると語つて居た。

六六、みぞごゐ (一名ヤマイボ) (鷺科) Gorsachins, goisagi (Temminck)

溝五位

大字クボテには初夏の頃ウン／＼怒噴く鳥が居ると云ふ、勿論之はミゾゴキ一名ヤマイボであることは疑ひの餘地はない。英彦山ではウメキ鳥の名さへある體は黒褐色で五位鷺より小形である。四月頃蕃殖すると此邊の人は云つて居る。

六七、まがも (雁鴨科) *Anas platyrhynchos platyrhynchos* (L)

眞鴨

此地方では青頸と云つて居る。上城井村の大西池等には小鴨と共に飛來する、殊に周防灘が荒れると澤山に來ると此地方狩獵者の言である。鴨の中では最大種で味もよく、夜など此池の邊りを通過すると「ペーペー」鳴いてゐる。

六八、こがも (雁鴨科) *Nettion crecca crecca* (L)

小鴨

眞鴨と共に上城井村の大西池によく浮いて居る。此地方では方言でヒョガモと云つて居る。鴨の中では小形であるので名づけられたものと思ふ。頭上と顔と頸は栗色で眼から後頭にかけて幅の廣い金屬綠色の縁があり、「ビョン〜」と鳴くので狩獵者のよく知る處である。

六九、おしどり (雁鴨科) *Aix galericulata* (L.)

鴛鴦

岩屋村枝河内の俗に云ふオシブチ、夫から篠瀬の竹藪の淵などには年によつてはオシドリが飛來する。又犬岳の恕淵にも大正十四、五年の頃には澤山來て居たそうである。オシドリは樗の實や櫟の實、水中の混虫などを好んで食するので、自ら潤葉樹林と溪流などが一緒にある様な處に多く着く様である。

七〇、とび (鷲鷹科) *Milvus lineatus lineatus* (Gray)

鷲

犬岳と求菩提山との谷峽の松に鷲が巢を架けた事がある。秋の晴天の日など求菩提の中腹の上空に百羽位の鷲が舞ふことがあるが、何處から來るのかと聞かれたことがある。此地方で鷲が「ピーヒョロヒョロ」と鳴いて空を舞ふと翌日は晴天になると云ひ傳へて居る。

七一、すり (鷲鷹科) *Buteo buteo japonicus* (Temminck & Schlegel)

鷲

枝川の河ぶちの櫓にノスリが一羽止つて居るのを見たことがある、止つて居る此鳥の姿は膨れて體の割合に、大きく見ゆる。此地ではノブクと方言して居る、此方言は福岡縣には廣く通ずる

様である。ノブクの意は明でないが、野に棲む梟の意か、但しは野の河豚の意か、何れにしても語源は此邊にあると思ふ。鳶に一番縁の近い鳥で、體の上面は褐色で頭及び後頭には白色の羽毛がある。

七二、あつさい(雄)、つみ(雌) (鷲鷹科) *Accipiter, guralis* (Temminck & Schlegel)

雀 鷹

此地方ではスズメダカと呼んでゐる。此方言は汎く使用されて居るが、蓋し雀をよく追ふてゐるからであらふ。現に此地方でも雀其他の小禽を追ふてゐるのを見る事が多い。雄鳥をエツサイ、雌鳥をツミと稱するが、之は昔別種の様に考へてつけた名稱と思ふ。

七三、このり雄、はいたか(雌) (鷲鷹科) *Accipiter, ninnus nisisimii* (Tickell)

雛 兄 鷹

ツミ、エツサイと共に此鷹も雌雄によつて名稱を異にして居る。秋の晴れた日など國見岳の上空及び八丁坂などの上空に輪を描いて居るのを目撃する。之を眺めて駄句あり。

八丁の空に輪をかく小鷹かな

七四、きうしうきじ (雉子科) *Phasianus, versicolor kiusiuensis* (Kroda)

九州 雉 子

岩瀧川、築城川の川椽、國見岳の麓などに小數の雉子を見るが近年非常に尠くなつた。古老の話に昔は山を焼いて菜種を蒔くと夫によく來たものである。夫を針金や紐で作つた括り毬で捕つたものである。又狩獵者の談によると雉子は春蘭の花の未だ地上に現はて居ないもの、夫からヤ

マイモの根及び珠芽を食すると云つてゐた。

七五、あかやまどり (雉科) *Graphohasia us soemmerringii soemmerringii* (Temminck)

鵲 雉、山鳥

此地方の人の話に雉子は近年非常に少なくなつたが、其割合にヤマドリは大分残つて居ると、之は實際其の様である。先年積雪の頃クボテ山に登山したことがある、其時中宮直後の上宮道で雪の上にヤマドリの足跡を幾つも發見した。此地方の狩獵家にヤマドリの習性に就て聞くと次の様に交々語つてゐた。

△餌としてはネムノキの實、藤の實、樫の實、櫟の實、土筆、ミミズなどを食する。

△鳴聲は時によつて異なるが、

○ク・ク・ク (雉子と同様)

○チョン (雉子に似て)

○クワ・クワ (物に驚いた時か)

春先蕃殖期になると雄が雌の歡心を求むる爲めよい聲で囀るが、一寸眞似は出來ぬなど言ふ人もあるが少しあやしい。

七六、たしぎ (鵲科) *Capella, gallinago, raddei* (Buturlin)

田 鵲、鵲

求菩提の北谷に少數此鳥の渡つて來る處がある。此鳥の特徴とも云ふべき點は、頭上は黒褐色で、顔は汚白色で、眼先は黒色、背は黒色の地に黄褐色と赤褐色の不規則の斑紋がある。嘴は長く飛

ぶ時には「ギー」と鳴く獵鳥である。

七七、や ま し ぎ (鵒科) *Scolopax rusticola rusticola* (L.)

山 鵒

此地方の人々はボト又はボトシギと云つた方がよく判る。犬岳の雪溜附近などには可なり居ると炭焼きをして居る人々が話してゐた。嘴の長いこと、眼の上方に扁して居ること、肉の良味なることなどで狩獵者のよく知る處である。犬岳では留鳥だと云ふ人があるが、一部渡りをせぬのが居るかも知れない。十月末になると桑畑などに來て、長い嘴を地中に突き入れて全く動かない習性がある。

七八、た ま し ぎ (鵒科) *Rostratula bengalensis bengalensis* (L.)

玉 鵒

此地方では麥搗鳥と云つて居る。夏の頃水田の邊りで「コン、コン、グウ／＼」と鳴く、此鳴聲が一種哀愁を感じるので、此地でも魔の鳥の鳴聲として四百四病の云々と傳説がある位である。よく秧雞と混同し、此鳥の鳴聲を水雞の戸を敲くのだと風流にも誤り傳ふる者がある。鳥體はタシギ大で翼の風切羽に黄色多數の斑紋がある、之が爲め玉鵒の名がある。

七九、あ を ば と (鳩鵒科) *Sphenurus sieboldii sieboldii* (Temminck)

青鳩、山鳩、綠鳩

犬岳の一の岳、求菩提山の金比羅山、經讀岳の奥の方に春季行くと「オエオ・オエオ」と嬰兒の鳴聲の如く、或は尺八を吹く様な鳴聲の鳥が居る、之は勿論青鳩である。此處でも蕃殖して居るらしい。

本種は最も佳麗な鳩で即ち頭から頸は黄綠色を呈し、脊及び胸は少しく赤味を帯びて居る。腹は綠色であるが中央に白い處がある。土地の人に此青鳩の話を知くと山毛櫨の芽を好んで之につくので、之を狙つて昔はよく獵したもの、又竹製の笛で例の鳴聲を真似て吹き寄すると云ふ人もある。方言では山鳩と云つて居るが、全身の黄綠色なので普通アオバトとも云ひ、又一部の人は櫨の實を好む處から櫨鳩と云ふて居る。

ハ〇、きじばと (鳩 鴿科) *Streptopelia orientalis orientalis* (Latham)

雄 鳩、眞、鳩

毎年十月の始めになると大字クボテの山畑などに來るそふである。そして人家近くの林に止つて「ゴッゴウゴウ」又は「グウ」〜と鳴く、此地方でも鳩は「トテッポッポ」と鳴くと云つて居るがそんな牙へた音は出さない、色彩は頭頸部及び胸は葡萄鼠色で頸側に黒と灰青色とよりなれる斑紋がある、又腰の處に灰黒色の毛羽がある。余は嘗て鳥井畑の稻の刈田に降りて落穂を拾つて居る三羽の鳩を観察したことがあるが、なか〜可愛らしい姿である。當地では方言で山鳩と云ふと云つて居る。

ハ一、くゑな (秧 鷄科) *Rallus apuaticus indicus* (Blyth)

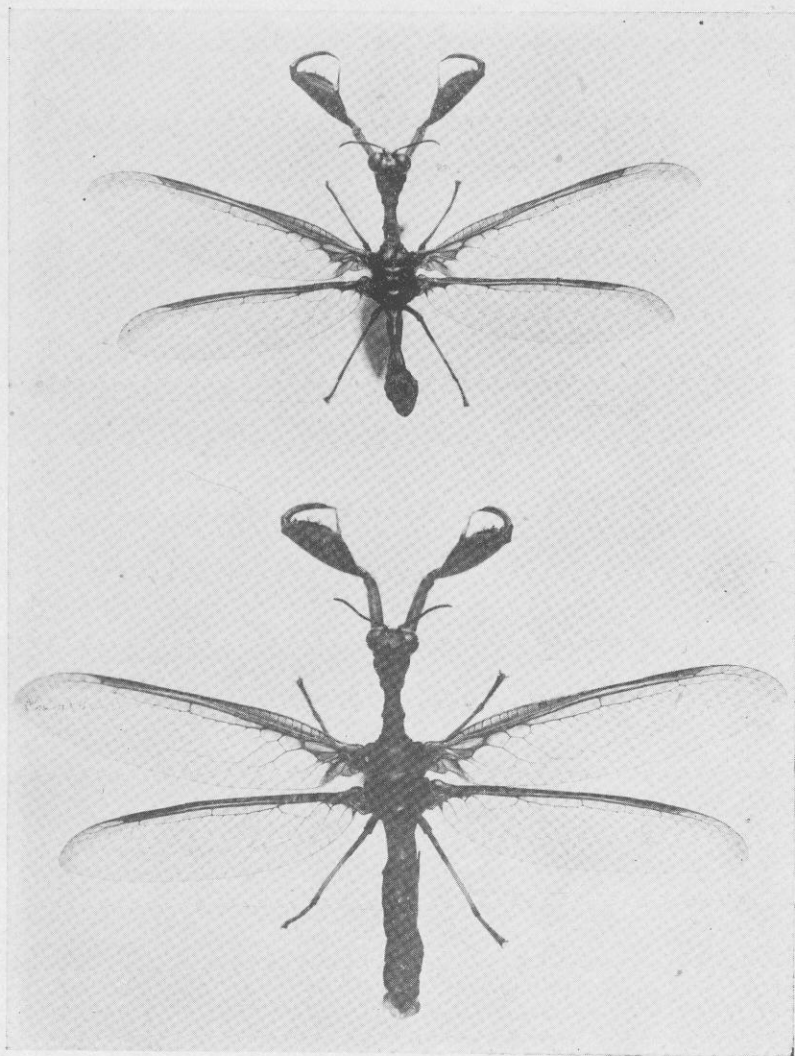
秧 鷄、水 鷄

岩屋村等では見當らないが、上城井村の築城河の邊りの空洞などには小數の此鳥を獵獲する人がある。最も禁獵區外である。脊は茶褐色で黒斑がある、頭部は黒色で少許の茶褐色の羽毛を混じて居る、下面の腮喉は白色で胸は灰色に茶色を帯び、嘴は橙赤色で脚は淡褐色を呈して居る。此

鳥の啼聲に就ては此地方の人々の中にも前記玉鳴の鳴聲「キョー／＼」を此鳥に接穂して考へて居る人があるが夫は間違ひで、此鳥は「キョー／＼」を連呼する丈けである。

因に昔文學上で云ふ戸を叩くと云ふ水雞は此鳥ではなく小型で脊はオリイプ色をして腹に赤みのある緋秧（ヒクイナ）が蕃殖時季に「ク、ク、ク」と輕く鳴く音を指すのだとの某々學者の説もあるが、偕歌や俳句に出て居るものを見るとどうも玉鳴を詠んだものが多い様である。

福岡縣に於ける珍重すべき昆蟲
(第三報)



オホカマキリモドキ成蟲

共に雌にして英彦山産 ×1.5

福岡縣に於ける珍重すべき昆蟲 (第三報)

調査委員 江 崎 悌 三

三、オホカマキリモドキ

元來カマキリモドキ科擬螳螂科(Mantispidae)の昆蟲は孰れも珍奇なものであつて、本邦に産するものが約二十種あるが、中には長い期間に僅かに一頭しか發見されたことがない様なものもあり、最も普通なヒメカマキリモドキ(*Mantispa japonica* McLachlan)でも、普通の人達には眼に觸れることはなく、昆蟲採集家にとつても決して容易に採集し得る昆蟲ではない。この類の昆蟲は頭部が小さいにも關はず、咀嚼口がよく發達し、前胸部即ち頸の部分が長く伸長し、且前脚が顯著な捕獲肢を形作つてゐるので、稍々カマキリに似た所があるので、かく名付けられてゐるのであるが、翅は膜質の脈に富んだ薄い構造で、前翅と後翅と大差なく、脈翅類(Neuroptera)特有の性質を備へてゐる。成蟲は他の昆蟲を捕食するものであるが、幼蟲時代には蜘蛛の卵囊に寄生するものがあり、又多くのものではその幼蟲時代の生活が知られてゐない。

擬本篇に於て述べようとするオホカマキリモドキは福岡縣で發見され、長い間最も珍奇な昆蟲として貴ばれてゐたものであるが、其後筆者は本種が本縣田川郡英彦山に比較的多く棲息することを明かにした。現在知られてゐる所では、この種は吾が福岡縣のみに發見される頗る限ら

れた分布を有するもので、又専門家が垂涎して止まないものである。よつてここに本種の來歴に就いて略述したい。

本種は最初故三宅恒方博士が明治四十三年(1910)四月に東京帝國大學農科大學紀要に *Mantispa magna* なる學名と、オホカマキリモドキの和名を以て發表し、記載並に圖を與へたものであつて同博士の研究された材料は二頭の雌であり、その一頭は岐阜の名和昆蟲研究所所藏のもので、明治三十五年四月に長野菊次郎氏が福岡縣に於て採集されたものであり、他の一頭は東京帝國大學所藏のもので、明治三十八年十月十二日に高千穂宣鷹男爵が福岡縣添田に於て稻の上に靜止してゐるのを採集されたものであつた (Journal of the College of Agriculture, Imperial University of Tokyo, vol. 2, No. 3, p. 214-216, pl. 12, fig. 3, 1910)。

其後本種の採集記録の公にされたものは今日に至る迄一つもない。併しこの種については岡本半次郎博士が之を同年 *Cinniciella* 屬に移した(動物學雜誌 vol. 22, p. 542, 1910)この屬は同じ年に G. Enderlein 氏によつて創設されたものであつた (Stettiner Entomologische Zeitung, Jahrg. 71, p. 360, 1910) 次いで中原和郎博士は上記農科大學の所藏標本、即ち三宅博士のタイプの一頭に就て再記載をなし、更に次の如く附記された。

「岡本農學士は、本種を *Cinniciella* に入れられしも、實際に標本を検する時は、此屬に入るゝ能はざる性質あり。之は尙今後の研究に待つ可き問題なるが、兎に角、本種を *Cinniciella* に入るゝことは不正當なりと云ふ可し。

今、此種が同屬の特徴に違反する點を擧ぐれば、

一、前胸太く、前膨部左迄大ならざる事。

二、中後兩肢の爪の末端三齒に分るゝ事。

尙本種は世界に於て最も大形なるものゝ一にして、寧ろ *Eutamoneura* 屬に非ざるかと思はるゝも、勿論此の屬にも適合せず、或は新屬を作る必要あるやも知れず。然れども、今之を決定せんことは非常に困難なるを以つて、此所に疑問を存しながらも、*Climaciella* の中に加へ置くことゝなしたり。

かくて氏は *Climaciella* (?) *magna* (Miyake) なる學名を用ひられた動物學雜誌 vol. 24, p. 564-565, 1912²⁾。翌年同博士は本種の學名の疑問符を除き、且本種が同屬の他種に比し、甚だしく大形なること前胸部の前膨部が餘り太くなきこと、更に觸角の基節に白き隆起あること等の特記された。又本種が四月及び十月に採集されてゐることから、本種が成蟲態を代て越冬するものならんと推定された (Annotationes Zoologicae Japonenses, vol. 8, p. 235-236, 1913³⁾。

後に桑山覺博士は本科の昆蟲の研究中に於いて、本種に關して右の中原和郎博士の 1912 年の意見を引用し、更に三宅博士がこの種とある點が近似せりとされた "*Mantispa areolaris* Westwood" が Enderlein 氏によつて *Eutamoneura* 屬に移されてゐることを附加された。ここに氏は再び疑問符を附し *Climaciella* ? *magna* (Miyake) とされた (Journal of the College of Agriculture, Hokkaido Imperial University, vol. 15, p. 262, 1925⁴⁾。氏は更に本種を同じ名を以て目錄中に採録された(動物學雜誌 vol. 37, p. 469, 1925⁵⁾。右の外に筆者は堀浩安松京三兩氏と共著の原色日本昆蟲圖說(1939)の p. 125-126, pl. 57, fig. 226⁶⁾ に始めて本種の着色圖を示した。

現在筆者の研究し得た本種の標本は合計十八頭に達し、これ等の標本は約半数が九州帝國大學農學部昆蟲學教室に、又他の半数が九州帝國大學附屬彦山生物學研究所に保存されてゐる。次に之等の標本の記録を列舉して見よう。

採集年月日	性別	採集者	大きさ(翅の開張)
一九三〇年八月三十一日	♀	高千穂宣鷹	五三耗
一九三三年八月二十日	♀	江崎悌三	四六耗
一九三四年八月十二日	♂	安松京三	四八耗
一九三五年八月十九日	♀	江崎悌三	四六耗
一九三五年八月二十八日	♀	江崎悌三	五三耗
一九三七年八月一日	♂	堀浩・藤野政雄	三六耗
一九三七年八月八日	♀	堀浩・藤野政雄	四九耗
一九三七年八月十三日	♂	高千穂宣鷹	五一耗
一九三七年八月二十八日	♂	高千穂宣鷹	四五耗
一九三七年八月二十八日	♀	高千穂宣鷹	四五耗
一九三七年八月三十日	♂	高千穂宣鷹	五二耗
一九三七年九月三日	♀	安松京三	六八耗
一九三七年九月八日	♀	安松京三	六〇耗
一九三八年八月十日	♀	江崎悌三・安松京三	四八耗
一九三八年八月二十三日	♂	江崎悌三・安松京三	四九耗

一九三八年八月二十八日	♂	江崎 悌三・安松 京三	四	六	耗
一九三八年八月二十八日	♀	江崎 悌三・安松 京三	五	三	耗
一九三八年八月二十八日	♂	江崎 悌三・安松 京三	四	八	耗

以上の中一九三四年八月十二日に安松京三氏の採集されたものは福岡縣朝倉郡古處山の産であるが、他の十七頭は全部英彦山の産であり、又この古處山のもの、一九三三年八月二十日に江崎の採集したものは晝間採集されたものであるが、残の十六頭は盡く夜間採集にて獲られたものであり、本種が通常の採集にて發見されることが如何に珍らしいかが解る。

三宅博士が始めて記載された二頭は共に雌であるが、翅の開張が六四耗となつてゐる、これは恐らく大きい方の箇體を測定されたものであらう。之は右の十八頭の測定で解る通り、本種の中では大形なもので、最小三六耗から最大六八耗までの著しい變異がある。併し四五耗以下の小形なるもの及び五五耗以上の大形なものは極めて稀なものと云ふことが出来る。既知の最大の箇體である六八耗のものは實に見事なるもので、附圖の下の方が即ちそれである。附圖の上圖は本表の最初の一九三〇年に高千穂男爵の採集された標本である。本種の多くは四五―五三耗位の大きさであると言ふことが出来る。

出現の時期は八月一日から九月八日に亘つて居り、八月下旬に最も多く得られる。三宅博士の記された二頭に於ては一頭が四月、他の一頭が十月十二日の採集であるが、少くも前者の「四月」と言ふのは頗る疑はしく、恐らく九月の誤であらうと思ふ。中原和郎博士はこの三宅博士の記事から推して本種が成蟲にて越冬するであらうと推定されてゐるが、これは信じ得られぬ所である。

それ以外に本種の生活史に關しては何も知られてゐない。

又本種の所屬に關しては、多數の標本に就いて研究して見るに、Enderlein の與へた *Climaciella* 屬の特徴によく符合し、この屬に編入されることは疑ない。中原博士は中脚及び後脚の爪の先端が三つに分れると言はれたが、大部分は五つに分れ、稀に四つに分れるものが見られるのみで、従つてこの點も *Climaciella* の特徴に一致する。前胸の比較的太きことは種の特徴と見倣してよろしかるべく、又觸角の基節に白き隆起は見られない。

以上の論議を綜合すれば、本種の學名は岡本博士の示された如く *Climaciella magna* (Miyake, 1910) とすべきものと思はれる。

本種は上記の如く福岡縣豐前國英彦山には八月頃比較的普通に見られ、又安松京三氏によつて筑前國古處山から得られ、又三宅博士の研究されたものも共に福岡縣の産であるが、未だ本縣以外の地からは一回も發見された記録なく、極めて珍稀なる昆蟲として、又本縣特有の昆蟲として、最も珍重するに値するものと思はれる。

昭和十五年三月二十五日印刷
昭和十五年三月三十一日發行

福 岡 縣

福岡市東職人町一八

印刷人 大 隈 龍 介

福岡市上名島町五三

印刷所 福岡印刷株式會社

電話西②
（五四〇）
一〇
五六六
〇四二
番番番